

嶋 遺 跡
範囲確認調査報告書
〈総 括 編〉

2012

山 形 市
山形市教育委員会

しま
嶋 遺 跡
範囲確認調査報告書
〈総 括 編〉

平成24年3月

山 形 市
山形市教育委員会

序

本報告書は、平成23年度に国庫補助事業の採択を受け実施した、嶋遺跡の範囲確認調査の結果をまとめたものです。

嶋遺跡は、昭和37～39年に発掘調査が実施され、古墳時代の打込柱の建物跡や倉庫跡など多数の木製品が良好に遺存していることが確認されました。その成果から、昭和41年には山形市はもとより日本の当時代の村落形態や生活を研究するうえで重要な遺跡として、その一部が国指定史跡に指定されております。

その後、本遺跡の保護方策を探るため、平成5年、平成18年に範囲確認調査を実施し、指定地を含む嶋遺跡の包蔵地は、地区公園として整備しつつ、保存を図ることとしておりました。平成18年に新たに確認された建物域については、平成22年2月追加指定を受けております。

こうしたなか、公園内への施設建設を踏まえ、平成22年度に実施した緊急発掘調査で、史跡と同等の価値を持つ古墳時代の打込柱などの遺構が確認されました。今回の調査はこれを受け、嶋遺跡の集落構造を再検討するため実施したものです。調査では、指定地より西側でも打込柱が検出され、建物域がさらに広がることが分かりました。今後は、嶋遺跡を保護しながら、遺跡を活かした公園整備を進めていく予定です。

本書が嶋遺跡の内容解明の資料として、また埋蔵文化財の保護と啓発の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたって埋蔵文化財の保護に特段のご理解をいただき、発掘調査に多大なご協力をいただきました地元の方々をはじめ、嶋遺跡検討会議にご参画を賜りご指導下さいました先生方、発掘調査に携わった作業員の皆様並びに関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成24年3月

山形市教育委員会
教育長 後藤 恒裕

例 言

- 1 本書は、平成22年度及び平成23年度に実施した「嶋遺跡」の範囲確認調査報告書〈総括編〉である。
- 2 調査は山形市教育委員会が実施した。
- 3 調査要項は下記のとおりである。

遺 跡 名 嶋遺跡（しまいせき）

所 在 地 山形県山形市嶋北二丁目

遺 跡 番 号 県遺跡番号 4

現 地 調 査 平成23年3月22日～6月30日

整 理 作 業 平成23年9月1日～平成24年3月31日

調 査 面 積 400㎡

調 査 主 体 山形市まちづくり推進部公園緑地課

調査実施機関 山形市教育委員会社会教育課

調 査 担 当 者 社会教育課 課 長 富木慶太郎（平成22年度）

丹野 典昭（平成23年度）

課長補佐兼総括主幹 金子 実

文化財保護係長 玉田 典子（平成22年度）

茂木 健男（平成23年度）

主 査 植松 薫 樋口 修

臨 時 職 員 鎌田 浩範 公平 浩志

調 査 指 導 文化庁記念物課 山形県教育庁文化財保護推進課

嶋遺跡検討会有識者

田中 哲雄（元東北芸術工科大学教授） 北野 博司（東北芸術工科大学准教授）

阿子島 功（福島大学特任教授） 米村 祥央（東北芸術工科大学専任講師）

- 4 本書の作成・執筆・編集は植松薫、樋口修が担当し、資料整理、図版作成に際し、鎌田浩範がこれを補佐した。また、付編については、福島大学特任教授 阿子島功氏に玉稿を頂いた。

- 5 発掘調査及び本書の作成にあたっては、以下の方々からご協力、ご助言を頂いた。ここに記して感謝申し上げる（敬称略、順不同）。年代測定については、山形大学准教授 門叶冬樹氏にご協力いただいた。石材鑑定については、山形大学教授 大友幸子氏に鑑定いただいた。また、X線写真撮影については、東北芸術工科大学文化財保存修復研究センターにご協力頂いた。

荒井 格（仙台市教育委員会文化財課） 竹田 純子（山形県教育庁文化財保護推進課）

長橋 至（山形県教育庁文化財保護推進課） 渋谷 孝雄（山形県教育庁文化財保護推進課）

山澤 護（天童市西沼田遺跡公園） 佐藤 正知（文化庁記念物課）

水ノ江和同（文化庁記念物課） 林 正憲（文化庁記念物課）

玉田 芳英（独立行政法人奈良文化財研究所） 吉川 純子（古代の森研究舎）

金井 慎司（パリノ・サーヴェイ株式会社）

伊藤 邦弘（財団法人山形県埋蔵文化財センター）

植松 暁彦（財団法人山形県埋蔵文化財センター）

高桑 弘美（財団法人山形県埋蔵文化財センター）

草野 潤平（財団法人山形県埋蔵文化財センター）

- 6 発掘調査及び出土遺物の整理にあたっては、以下の方々からご協力を頂いた。ここに記して感謝申し上げます（敬称略、順不同）。

石澤 剛 奥山 啓 川本 路明 佐々木理佐 鈴木源治郎 高嶋 邦治

三浦 茂 三宅 末夫 森谷美祈子 吉田 久悦（以上発掘調査）

江口 智博 川本 路明 二瓶 正和（以上遺物整理）

- 7 委託業務は下記のとおりである。

嶋遺跡範囲確認調査補助業務 石川建設産業株式会社

嶋遺跡範囲確認調査復旧業務 高橋土建株式会社

嶋遺跡範囲確認調査基準点測量業務 国際航業株式会社

嶋遺跡範囲確認調査記録業務 国際航業株式会社

- 8 出土遺物、調査記録類については、山形市教育委員会が一括保管している。

凡 例

- 1 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲した。
- 2 遺跡概要図・遺構配置図中の方位は座標北を示している。
- 3 グリッドの南北軸はN-21°35' - Eを測る。また、グリッドの呼称については、第1図を参照されたい。
- 4 遺構実測図は1/60～1/400の縮図で採録し、各々スケールを付した。なお、実測図中の、「●」は遺物の出土地点を示す。
- 5 遺構実測図中の水系レベルは標高を表す。単位はmである。
- 6 土層観察において、遺跡を覆う基本層序についてはローマ数字を、その他部分的に確認される層序についてはアラビア数字で表している。
- 7 遺物実測図は1/3（木製品以外）・1/4（木製品）の縮図で採録し、各々スケールを付した。なお、土師器、陶器、磁器は断面白抜き、須恵器は「●」を断面右下に付した。また、土師器内面の黒色処理を網掛けで表している。その他、必要に応じて凡例を付している。
- 8 遺物観察表中において、（ ）数値は図上復元による推計値または残存値を、空欄は欠損等による計測不能を示す。単位はmmを使用している。出土地点欄の層位では「F」は遺構覆土内出土を示し、ローマ数字「I～V」などは遺跡を覆う土層（基本層序）を示している。
- 9 遺物図版については、任意の縮尺とした。
- 10 本文中の遺物番号については、本文・表・挿図・写真図版とも共通のものとした。図版等の○-△は、挿図第○図△番を指す。
- 11 土層断面図及び遺物観察表の色調記載については、1997年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帳』に拠った。

目 次

I 調査の経緯	III 検出された遺構と出土した遺物
1 調査に至る経過…………… 1	1 トレンチ1の調査概要…………… 13
2 調査の概要	2 トレンチ2の調査概要…………… 16
2-1 調査の方法と経過 …… 1～2	3 トレンチ3の調査概要…………… 22
2-2 嶋遺跡検討会議の経過及び 遺跡の取り扱いについて …… 2～3	4 トレンチ4の調査概要…………… 28
2-3 これまでの調査地区と基本層序 …… 4	5 トレンチ5の調査概要…………… 34
II 遺跡の立地と環境	IV まとめ …… 36～42
1 地理的環境…………… 7	報告書抄録 …… 46
2 歴史的環境…………… 7	付 編 嶋遺跡の立地環境 …… 1～7

表

表1 遺跡地名表…………… 10
表2 トレンチ1出土遺物観察表…………… 15
表3 トレンチ2出土遺物観察表…………… 22
表4 トレンチ3出土遺物観察表…………… 28
表5 トレンチ4出土遺物観察表…………… 33
表6 トレンチ5出土遺物観察表…………… 34

挿 図

第1図 トレンチ配置図…………… 3
第2図 嶋遺跡調査概要図・基本層序図…………… 5～6
第3図 嶋遺跡周辺地形分類図…………… 8
第4図 遺跡位置図…………… 9
第5図 トレンチ1平・断面図…………… 11～12
第6図 トレンチ1出土遺物(1) …… 14
第7図 トレンチ1出土遺物(2) …… 15
第8図 トレンチ2平・断面図…………… 17～18
第9図 トレンチ2出土遺物(1) …… 19
第10図 トレンチ2出土遺物(2) …… 20
第11図 トレンチ2出土遺物(3) …… 21

第12図	トレンチ3平・断面図(1)	23~24
第13図	トレンチ3平・断面図(2)	25
第14図	トレンチ3出土遺物(1)	26
第15図	トレンチ3出土遺物(2)	27
第16図	トレンチ4平・断面図(1)	29~30
第17図	トレンチ4平・断面図(2)	31~32
第18図	トレンチ4出土遺物.....	33
第19図	トレンチ5平・断面図.....	35
第20図	トレンチ5出土遺物.....	36
第21図	嶋遺跡 遺構・遺物分布図.....	43
第22図	嶋遺跡出土土器.....	44
第23図	嶋遺跡出土木製品.....	45
付 図	嶋遺跡遺構平面図	

図 版

図版1	嶋遺跡全景ほか
図版2	嶋遺跡全景ほか
図版3	トレンチ1完掘状況ほか
図版4	トレンチ2全景ほか
図版5	トレンチ3全景ほか
図版6	トレンチ4全景ほか
図版7	トレンチ5全景ほか
図版8	埋戻し前状況ほか
図版9	トレンチ1出土遺物(1)
図版10	トレンチ1出土遺物(2)
図版11	トレンチ1出土遺物(3)
図版12	トレンチ2出土遺物(1)
図版13	トレンチ2出土遺物(2)
図版14	トレンチ2出土遺物(3)
図版15	トレンチ3出土遺物(1)
図版16	トレンチ3出土遺物(2)
図版17	トレンチ3出土遺物(3)・トレンチ4出土遺物(1)
図版18	トレンチ4出土遺物(2)・トレンチ5出土遺物

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

嶋遺跡は、昭和37～39年の6次にわたる発掘調査において打込柱式の建物跡や豊富な木製品が出土し、古墳時代後期の集落跡として広く周知されることになった遺跡である。昭和41年には、東北地方における古墳文化期の集落跡として学術的価値が高いため、遺跡の中心部と考えられる約2,288.46㎡が国の史跡として指定されている。本遺跡については、発見当初から相当の広がりを持つ遺跡と考えられていたが、当時、農業経営が優先されたことなどもあり、遺跡の全容解明はその後の開発に合わせて調整・調査を行うこととしてきた。

平成3年度には、嶋遺跡を含む同地域約104haについて、市街化区域編入と民間組合施行の区画整理事業による宅地開発が計画されることになった。関係機関との協議の結果、開発計画と本遺跡の保護対策に係る調整のため、平成5年に範囲確認調査を実施し、遺物の広がりなどから遺跡の最大範囲を確認した。その後の協議により、史跡指定地を含む本遺跡の範囲については、地区公園として保存を図りつつ整備することが決定された。平成18年度、公園整備の具体的な方策に対処するため、嶋遺跡の内容解明のための範囲確認調査を実施した。その結果、指定地外にも平地式建物などの建物域が広がることを確認し、平成22年2月には、新たに確認された建物域の部分が追加指定されている。

公園整備にあたり、史跡指定地域ではない南西角について当初は多目的広場の整備を予定していたが、平成21年度に入り、市民から整備が求められていた屋内型幼児遊戯施設の建設が計画されたため、当該施設予定地において翌22年度に緊急発掘調査を行った。対象地については、過去のトレンチ調査の結果から、建物などの重要な遺構は存在しないと予測していた場所であったが、打込柱などの遺構が確認され、史跡指定地内に遺存する遺構・遺物と同等の価値を持つものと判断された。

この調査結果を受けて、国、県、関係機関と協議を重ねた結果、本遺跡の価値及び集落構造について再検討を行う必要が生じ、遺構の広がりの確認のため、公園用地北側と西側に計5カ所のトレンチを設定し、範囲確認調査を実施することとなった。また、屋内型幼児遊戯施設建設についても可能な限り早く進める必要から、公園敷地北西部において、山形市予算で施設建設に伴う緊急発掘調査を並行して実施することに決定した。

発掘調査は、山形市まちづくり推進部公園緑地課の依頼により、山形市教育委員会が実施したものである。諸事情により、北側の調査（トレンチ4・5）は山形市予算、西側の調査は（トレンチ1～3）は国庫補助事業を受けて行った。

2 調査の概要

2-1 調査の方法と経過

範囲確認調査は、平成23年3月22日から6月30日までの延べ64日間実施した。調査区はトレンチ1～5の5カ所にわたり、調査面積は合計約400㎡である。それぞれ、過去の調査結果と比較検証するため、可能な限り平成5・18年のトレンチを包括した調査区を設定した。また、過去の範囲確認調査ではトレンチ幅が1.5～2mであり、遺構の面的な広がりの確認できなかったため、今調査においては遺跡の内容確認を重要な課題と捉え、幅広の平面形状（幅5m）としている。トレンチの周囲5mの範囲については、作業の安全と手掘りの廃土処理の効率を考え、公園造成による厚さ約1.3mの盛土を除去した。調査区を覆うグリッドは、平成18年度の範囲確認調査時と同一の方眼区を設定した。

I 調査の経緯

現地における調査は、遺跡範囲外（当時）としたトレンチ5から開始し、その後トレンチ4→1→2→3の順に進めた。各調査区において表土除去、遺構検出・精査の工程で進め、写真撮影、平・断面図の作成・土層注記、遺物取り上げなどの記録作業を随時実施した。基本的には、古墳時代の遺構確認面と判断される地層が確認されたところで調査の目的は達成したと考え、それ以上の掘削は行わなかったが、遺跡範囲外（当時）に設定したトレンチ4、5については、遺構確認面以下の土層を確認するため、部分的に掘下げを実施した。現地における調査は6月30日に終了した。その他、調査期間中に基準点測量や写真測量などの記録業務を委託している。また山形市予算で放射性炭素年代測定、花粉分析、珪藻分析、植物珪酸体分析、樹種同定分析、種実同定分析等の理化学分析業務を委託して実施した。

2-2 嶋遺跡検討会議の経過及び遺跡の取り扱いについて

本調査については、嶋遺跡の価値について再検討を行うという目的から、本調査成果並びに緊急発掘調査成果を踏まえた遺跡の評価についての指導・助言を得るため、有識者4名を構成員とする「嶋遺跡検討会議」を設置した。具体的には、調査期間中に合計3回にわたり、発掘現場の視察並びに会議を実施した。会議には山形県教育庁文化財保護推進課、山形市関係部課職員も参加している。また調査期間中に文化庁記念物課文化財調査官による視察も2回行われた。以下に、検討会議及び文化庁調査官視察の内容について概述する。

第1回会議（5月28日開催）では、トレンチ4、5の調査成果並びに緊急発掘調査区の間接報告を行い、協議した。特に緊急発掘区において木製品が集中して出土する土層（IV a層）及び範囲の評価について協議がなされ、精査途中でもあり、史跡との関連、遺跡の中での空間的位置づけを判断するには、土層及び木製遺物の年代測定、木製遺物の鑑定、自然環境の調査、微地形図などの資料が不足しているとのことから、それらの情報を早急に準備する必要があるとの意見が出された。

第2回の検討会議（7月8日開催）では、トレンチ1～3及び緊急発掘調査区の調査成果、前回の課題のうち、木製遺物を含むIV a層ほかの土層及び木製品などの年代測定、木製遺物の内容などの結果を報告し、協議を行った。有識者からは、木材散布範囲は人為的・意図的な形跡であり、国指定史跡嶋遺跡の広がりや捉えられること、トレンチ2、3は打込柱があり、建物域であるため追加指定が必要であること、当時遺跡範囲外と判断した公園北側30mのエリアについて再検証し、あわせてトレンチ4と5の間のIV a層の広がりを調べることなどの意見が出された。同日午前には、文化庁記念物課佐藤正知主任文化財調査官による視察もあり、木製品が含まれるIV a層について水田跡である可能性が指摘された。合わせて同層の平面的広がりを確認し、遺跡の保護のため、IV a層の掘下げを中止することなどの指導・意見が出された。以上の指導・助言を受け、緊急発掘調査区は、遺跡の保護のため掘削を中止し、IV a層の広がりを確認するため新たに調査区（トレンチ6）を設定した。

7月21日には、文化庁記念物課水ノ江和同文化財調査官による現場視察が行われ、古墳時代の遺構確認面（IV b層上面）をもとに旧地形図を描くこと、これまでの調査成果とあわせて集落の生活域や生産域を確認すること、嶋遺跡は、集落としての機能がすべて揃う古墳時代の一大集落であるなどの指導・意見が出された。

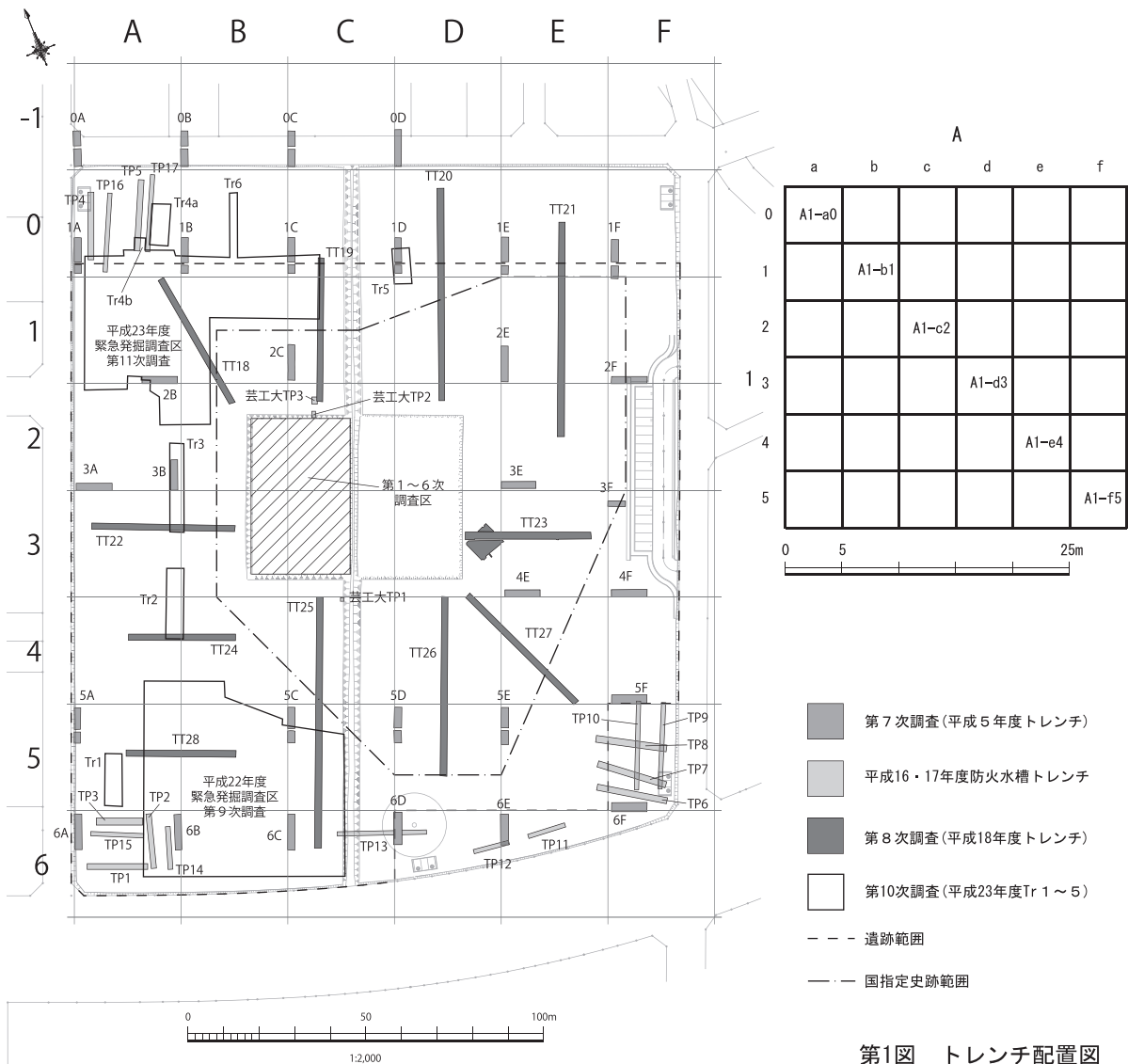
第3回の検討会議（7月29日開催）では、これまでの調査成果をまとめた総括図と理化学分析結果を踏まえた生産域の検討についての報告、また追加指定する範囲を有識者の方から検討して頂くため、

山形市教育委員会が作成した追加指定範囲案を提示し、協議を行った。これまでの調査により嶋遺跡の建物域と縁辺の様相などが明らかになったことから、公園整備については嶋遺跡を活かしたものでほしいこと、指定区域の再検討を行い、追加指定にとりくむべきとの意見が出された。

以上の検討会議での有識者による意見などを踏まえ、現地における調査終了後、遺跡の取り扱いについて、庁内関係部局、国・県で協議を行った。協議の結果、公園内での屋内型幼児遊戯施設の建設は行わないこととなり、遺跡に影響しない形での公園整備を進めていくことに決定した。

現地調査終了後の10月には、遺跡の養生のため、検出された柱などが壊れないよう、盛土前の地表面付近まで在来土で埋め戻した後、調査の目安とするための土壌分離シートを敷設したうえで現地表面まで埋戻しを行った。

今後、公園整備を進めるとともに、嶋遺跡のさらなる追加指定に向け、文化庁及び県と協議していく予定である。



第1図 トレンチ配置図

2-3 これまでの調査地区と基本層序

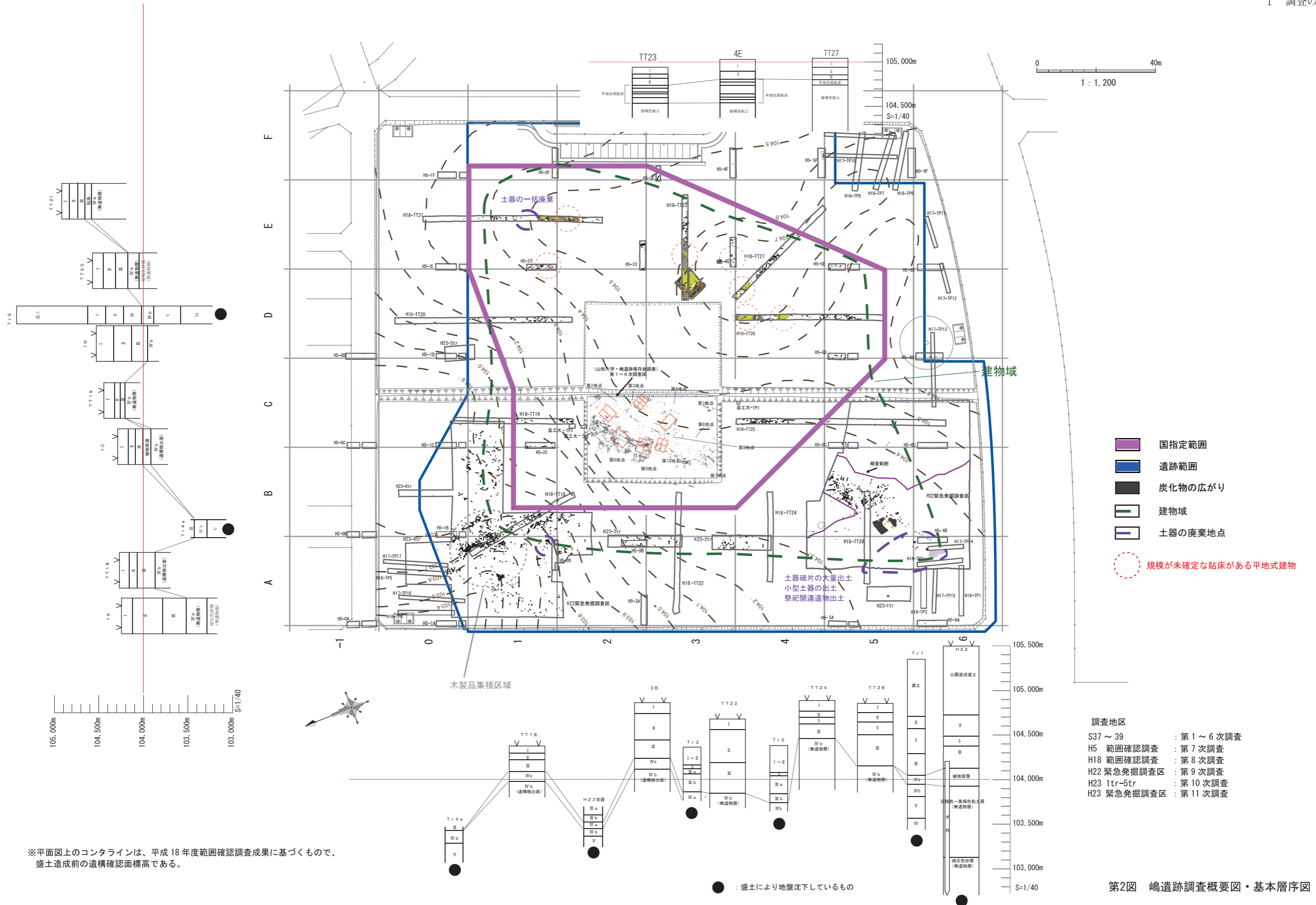
嶋遺跡の発掘調査は、昭和37～39年の故柏倉亮吉山形大学名誉教授を調査団長とする第1～6次調査を含めると、現在までに第11次調査を実施している（第2図）。調査次は以下のとおりである。

第1次調査		主体：山形市	1962年4月	
第2次調査		主体：山形県 協力：山形市	1962年10月	
第3次調査		主体：山形県 協力：山形市	1963年3月	『嶋遺跡調査報告』収録 3次調査までの概要報告)
第4次調査		主体：山形県 協力：国及び山形市	1963年10月	
第5次調査		主体：嶋遺跡保存会	1964年3月	
第6次調査	(約1,200㎡)	主体：嶋遺跡保存会	1964年10月	『嶋遺跡』山形市史別巻 1収録
第7次調査	(612.5㎡)	主体：山形市	1993年7～10月	『嶋遺跡発掘調査概報』 収録
第8次調査	(800㎡)	主体：山形市	2006年7～11月	山形市埋蔵文化財調査報告書第29集収録
第9次調査	(2,600㎡)	主体：山形市	2010年7～11月	
第10次調査	(400㎡)	主体：山形市	2011年3～6月	山形市埋蔵文化財調査報告書第34集収録
第11次調査	(2,400㎡)	主体：山形市	2011年4～7月	

基本堆積土層の観察は各調査区で行った。その結果、基本的な堆積は、第7～11次調査の各地点において概ね同様である。ただし、7・8次調査は盛土造成前、9～11次調査は盛土造成後のため、各土層の確認面標高に最大40～50cmの差が生じている。盛土により沈下したものと考えられる。地表面から古墳時代の遺構確認面までは大別すると、IV層に分層可能である（第2図）。IV層より下の層についても部分的に掘下げを実施しており、以下、V～VI層まで確認した。

具体的には、現地表から、公園造成に伴う盛土、それより以下にI層（旧表土・水田耕作土）、II層（水田基盤層）と続く。S層は河川などの氾濫による洪水堆積層で、粒度により細分される。同層は、公園敷地の西側でのみ確認される層で、南側のトレンチ1付近で層厚20～30cmを測る。III層は黒色粘土で、近世以降の水田耕作土である。色調により細分している地区もある。打込柱の多くはIII層中より確認されはじめる。同層からは古墳時代の土師器片とともに、古代の須恵器片や古銭、中近世の陶磁器などの遺物が出土する。IV層は、褐灰色粘土で未分解の植物を含んでおり、有機物の多少によりIVa・IVbに細分される。腐植した植物を多く含むIVa層上部は、古墳時代の木質の遺物を含んでおり、低地部により厚く堆積している傾向が窺えた。IVb層は、腐植した植物片が僅かに混入しており、無遺物層である。IVb層上面が古墳時代の遺構確認面である。遺跡範囲南西部のTT25、26では、III層とIV層の間に砂層が確認されており、古墳時代以降の洪水砂層の可能性がある。V層は黒～黒褐色粘土で、遺跡北東部では砂混じりとなる。無遺物層である。VI層は明黄褐色～褐色砂層で、河川堆積によるものと思われる。IVb層、V層中には白色粘土、腐植土によるラミナが形成されている。

全体的な地形としては、南から北西方向にかけてゆるやかに傾斜している。遺構確認面標高は、北西隅のトレンチ4で一番低く103.4m前後を測り、トレンチ5で104.1m前後、トレンチ3では103.85m前後、トレンチ2で104.0m前後、南西隅のトレンチ1で104.0m前後を測る。



第2図 嶋遺跡調査概要図・基本層序図

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

嶋遺跡は、山形県山形市の北西部に所在する。山形市は山形県の東部、山形盆地の東南部に位置し、東は奥羽山脈、南部と西側は白鷹丘陵に仕切られる。奥羽山脈から源を発する馬見ヶ崎川が北流し、南東から北西に伸びる扇状地を形成している。山形市街地はこの馬見ヶ崎川扇状地上に発展し、東の奥羽山脈から盆地西側を北流する須川に向かってやや傾斜する地形となっている。標高は、馬見ヶ崎川扇状地の扇頂部で200mを超え、本遺跡付近では105m前後となる。

現在の馬見ヶ崎川は、近世初期に山形城下への水害を防ぐため、山形城主鳥居忠政による河川改修が行われ、盃山付近で北に大きく流路を変えている。それ以前は、小白川から旧県庁付近を西へ流れており、陣場付近では陣場沼などのため池が、河道の名残として昭和40年代まで遺存していた。現在の本遺跡周辺は、馬見ヶ崎川と須川に挟まれた低湿地となっているが、河川改修以前は河道の流路は一定ではなく、一時的には馬見ヶ崎川の河道が来ていたであろうと指摘されている（阿子島2004）。

本遺跡は、市街地から約3km離れた嶋地区に所在し、標高は約105～106mを測る。地形的には、この付近は馬見ヶ崎川扇状地の前縁帯にあたり、豊富な湧水に恵まれている。地表では自然堤防の発達も明確ではないが、遺跡は、低湿地中のわずかな自然堤防状の微高地に立地し、集落が営まれたと考えられる。一帯は良好な水田地帯であるが、一方で民間組合による土地区画整理事業が大規模に進み、大型店舗や住宅地が広がり、かつての景観は様変わりしている。

2 歴史的環境

山形市内には、現在約380を超える遺跡が確認されている。それらの多くは奥羽山系から流下する馬見ヶ崎川、立谷川、乱川などの各河川が形成した扇状地上に分布する。馬見ヶ崎川扇状地扇端部～前縁帯にかけては、湧水帯や自然堤防に沿って遺跡が分布する様相が近年の調査で明らかになってきた。嶋遺跡が所在する嶋・今塚地区では、弥生時代頃から集落が営まれており、稲作に適した環境を求めた結果、弥生時代以降、平野部や低湿地へ進出したものと考えられる。

弥生時代では、江俣遺跡や今塚遺跡で石包丁や刃痕が付く土器が出土している。また河原田遺跡では、県内では希少な同時代の木棺墓5基と土器棺墓1基や、住居跡と想定される柱穴群が検出された。

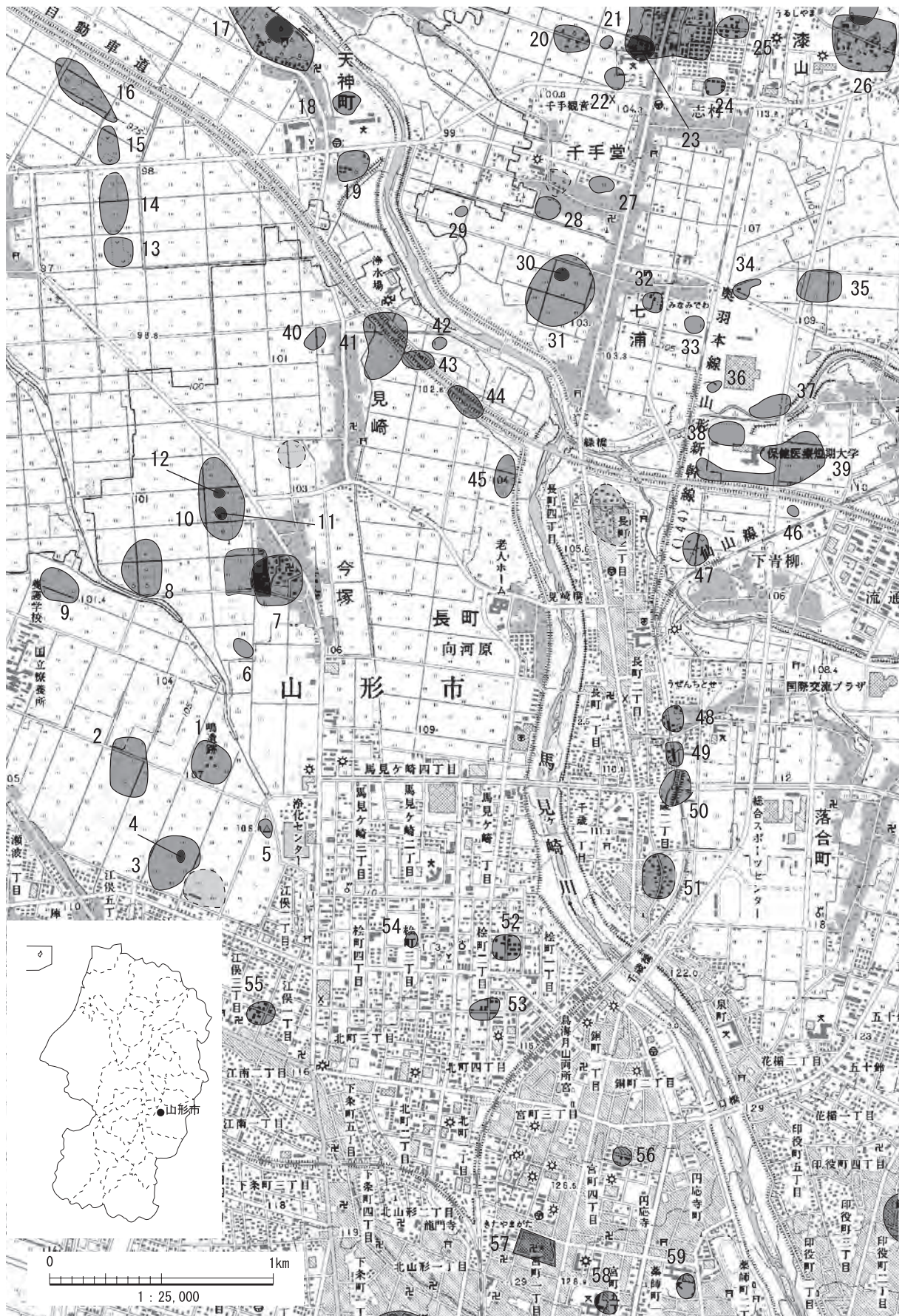
古墳時代では、古墳時代前期の焼失家屋が検出された今塚遺跡や特異な形態の棟持柱建物跡が検出された長表遺跡などが確認されている。また梅野木前1遺跡においても、県内最古の水田遺構が検出され、古墳時代前期の住居域、生産域などの集落構造が窺える良好な資料が得られている。さらに本遺跡の南西約200mに位置する梅野木前2遺跡では、古墳時代後期の打込柱建物跡が1棟検出されている。また、本遺跡の北方約2.5kmに位置する藤治屋敷遺跡では、蛇行する河川跡から古墳時代の農具、容器などの木製品が多量に出土した。馬洗場B遺跡では古墳時代の破鏡が出土し、注目される。

奈良・平安時代では、紀年木簡（853年）や多量の墨書土器などが出土し、役所的な性格を持つと考えられる今塚遺跡が所在する。また梅野木前1遺跡や河原田遺跡などでも同時代の遺構・遺物が検出されている。

中世以降では、長表遺跡や今塚館跡が所在する。長表遺跡では、方形館の外郭部と推定される堀跡が検出され、「三つ鱗」の紋様を持つ漆器椀や青磁、須恵器系陶器などが出土している。



第3図 嶋遺跡周辺地形分類図

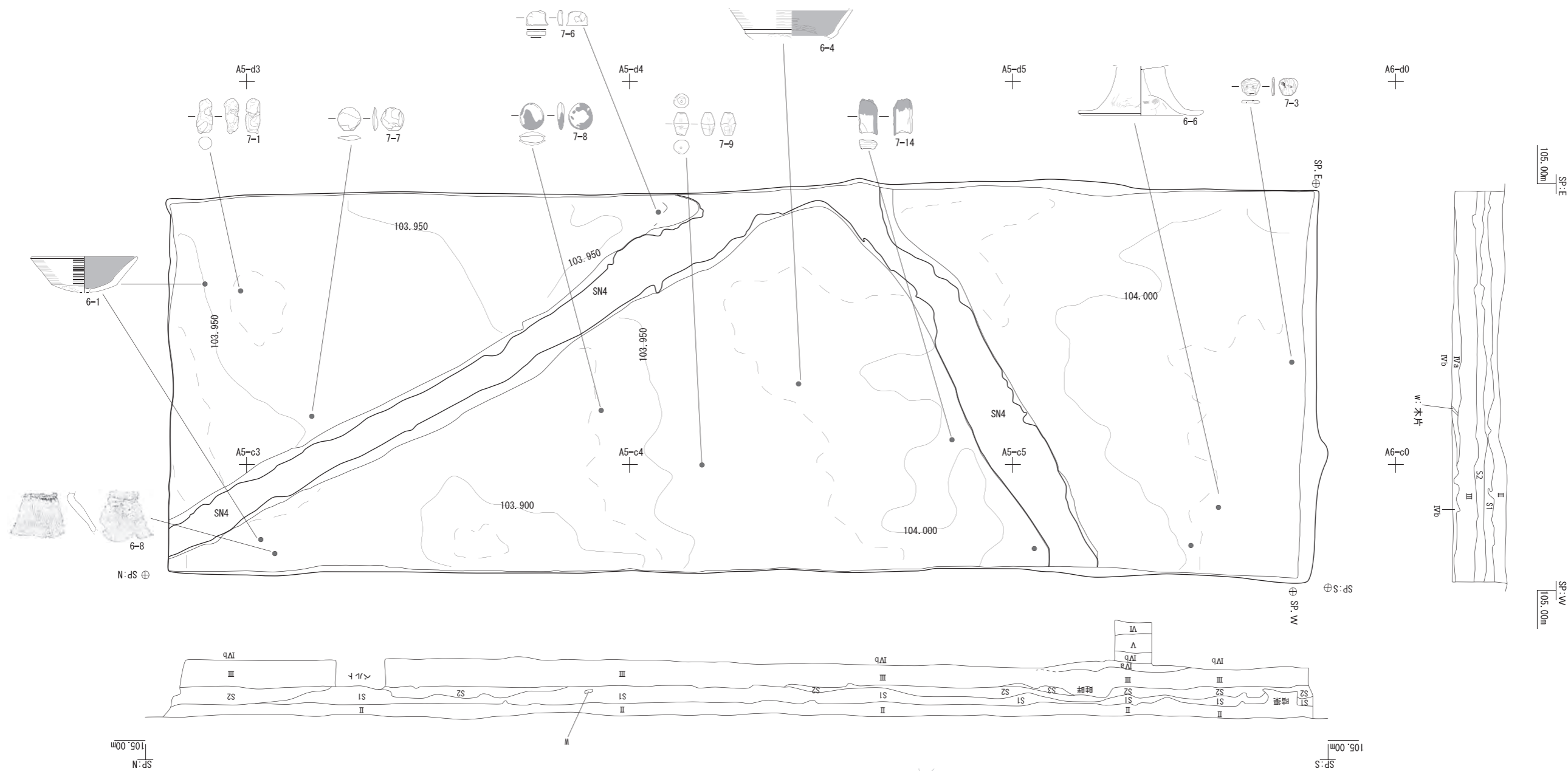


第4図 遺跡位置図

II 遺跡の立地と環境

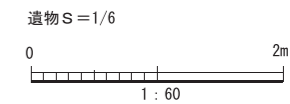
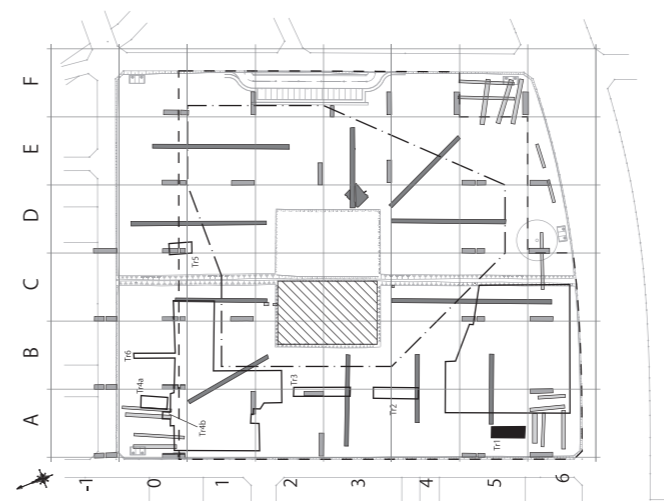
表1 遺跡地名表

番号	遺跡名	種別	時代
1	嶋	集落跡	古墳
2	梅野木前1	集落跡	古墳・奈良・平安
3	梅野木前2	集落跡	古墳・奈良・平安
4	梅野木塚	塚	近世
5	田端稲荷塚	塚	近世
6	河原田	集落跡	弥生・平安
7	今塚	集落跡	古墳・平安
8	八ッ口	散布地	奈良・平安
9	行才1	散布地	奈良・平安
10	長表	集落跡	古墳・中世
11	長表大日塚	塚	近世
12	長表熊野塚	塚	近世
13	服部	集落跡	古墳～近世
14	藤治屋敷	集落跡	古墳～近世
15	馬洗場A	散布地	平安
16	馬洗場B	集落跡	古墳～中世
17	向河原	集落跡	弥生～中世
18	新井田	集落跡	奈良・平安
19	天神		奈良・平安
20	井森塚	集落跡	弥生
21	衛守塚2号墳	古墳	古墳
22	衛守塚4号墳	古墳	古墳
23	衛守塚古墳群	古墳	古墳
24	北道上B	集落跡	奈良・平安
25	北道上A	集落跡	弥生
26	伊達城	城館跡	中世
27	千手堂大門	散布地	奈良・平安
28	南川原	集落跡	弥生
29	七浦2号墳狐山2号墳	古墳	古墳
30	七浦古墳群	古墳	古墳
31	七浦	集落跡	弥生・古墳
32	五反	集落跡	古墳
33	七浦一ノ坪	集落跡・包蔵地	弥生・古墳
34	大明神	集落跡	奈良・平安
35	漆山長表	集落跡	古墳・奈良・平安
36	北柳2	集落跡	縄文・弥生
37	北柳1	集落跡	縄文・弥生・古墳
38	下柳C	集落跡	奈良・平安
39	下柳A	集落跡	弥生・古墳
40	見崎	集落跡	奈良・平安
41	境田C	集落跡	縄文・平安
42	境田B	集落跡	奈良・平安
43	境田C´	集落跡	縄文～平安
44	境田D	集落跡	弥生・平安・中世
45	境田A	集落跡	奈良・平安
46	下柳B	古墳・墓	古墳・中世
47	白山堂前	古墳	古墳
48	長町北河原	包蔵地	弥生
49	長町	集落跡	弥生
50	西ノ神	包蔵地	弥生
51	落合楯	城館跡	中世
52	桧葉ノ木	集落跡	古墳
53	川原田	集落跡	古墳
54	宮町古墳	古墳	古墳
55	江俣	集落跡	弥生
56	宮町円応寺	集落跡	古墳・奈良・平安
57	西根小但馬屋敷	城館跡	中世
58	宮町三小	集落跡	古墳
59	薬師町五中	集落跡	平安



トレンチ1土層注記

II	10YR 4/2 灰黄褐色シルト	砂混じり。均質。水田基盤層。
S1	2.5Y 4/3 オリーブ褐色砂	酸化前の土色は5GY 5/1 オリーブ灰色。洪水による堆積層。横溝状の葉理がみられる。中央部下層は酸化して赤みを帯びた色調になる。
S2	2.5Y 4/2 暗灰黄色微砂	酸化前の土色は5Y 4/1 灰色。洪水堆積層。横溝状の葉理がみられる。流木片を多く含む。
S3	2.5Y 3/1 黒褐色シルト	微砂混じり。
III	2.5Y 2/1 黒色粘土	炭化粒、土器片、木片などの遺物を含む。均質。2.5Y 3/2 黒褐色粘土粒 (2~5m/m大) を2%含む。10YR 6/3 にぶい黄褐色シルト粒 (2~5m/m大)、10YR 5/3 にぶい黄褐色砂粒 (2~5m/m大) を2%含む。近世~近代の水田耕作土。
IVa	2.5Y 2/1 黒色粘土	IIIより黒い色調。腐植した植物片を5%含む、ボソボソしている。10YR 4/2 灰黄褐色細砂を斑状に15%含む。
IVb	10YR 4/1 褐灰色粘土	腐植した植物、炭化した植物を25%含む。(地山)
V	2.5Y 2/1 黒色粘土	腐植した植物片を25%含む。炭化粒を1%含む。(地山)
VI	2.5Y 4/1 黄灰色粘土	IVb層よりやや暗い色調。腐植した植物片を25%含む。(地山)



第5図 トレンチ1平・断面図

Ⅲ 検出された遺構と出土した遺物

1 トレンチ1の調査概要

位置：平成22年度緊急調査区域の西側に設定した。

規模：5 m×15m

目的：平成22年度調査区(9次調査)から西側の遺構の確認を行う。同調査区では、多数の打込柱や遺構に伴うと推測される炭化物層が確認されており、その分布域の西端の把握を目的とする。

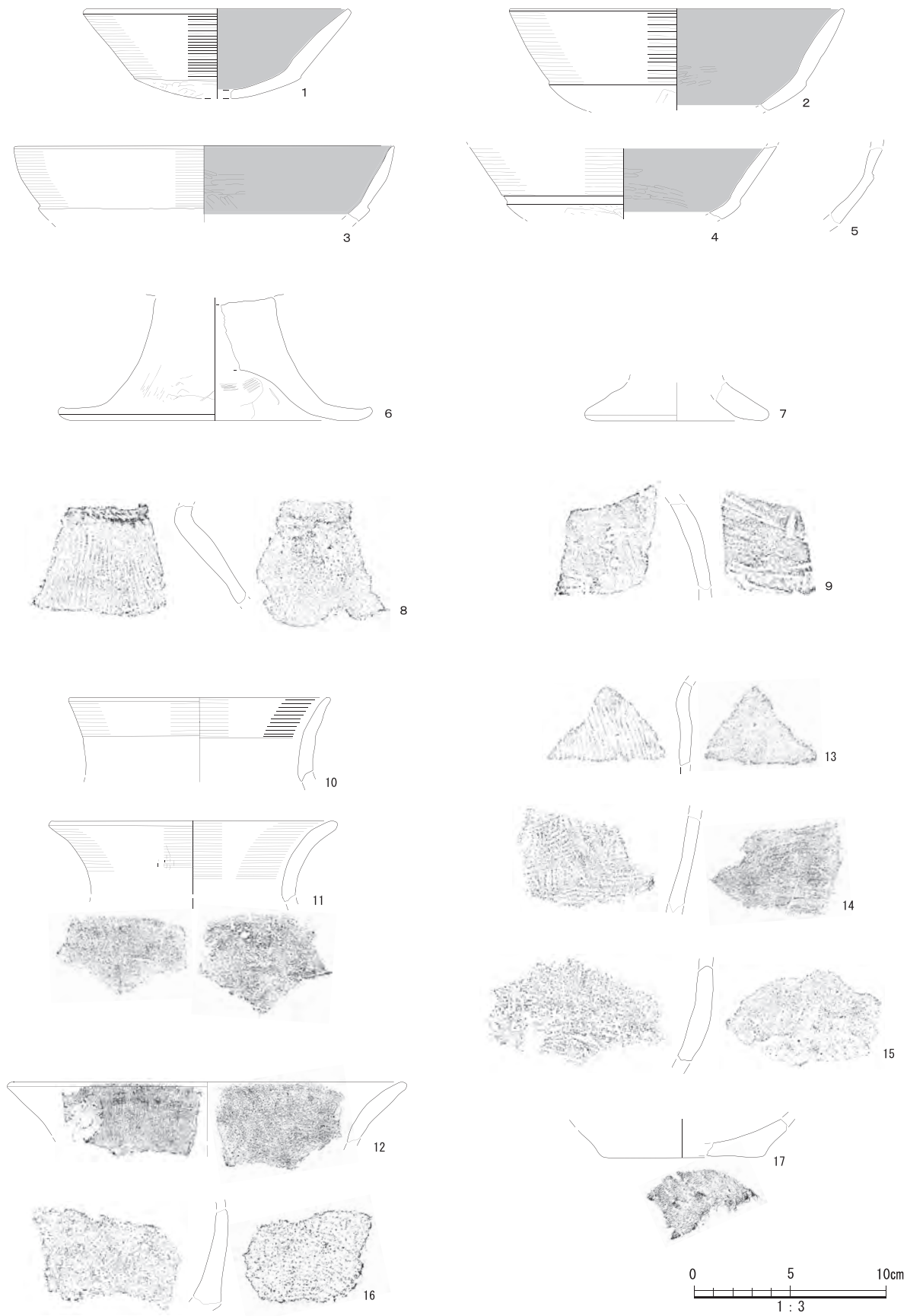
近世以降の水田畦畔が検出された。古墳時代の打込まれた柱材などの遺構は未検出であるが、Ⅲ層及びⅣa層(古墳時代の遺物包含層)から、土師器片や粘土塊などの土製品、石製品などの遺物が出土した。特筆される遺物として、祭祀に関わると考えられる石製模造品や琥珀製の切子玉があげられる。

遺物は主にⅢ層、Ⅳa層より出土した。そのうち図化したものについて以下に概述する。6-1~5は内面が黒色処理される土師器坏で、外面に段を持つ。6-6、7は高坏の脚部である。6-8、9は土師器壺で、8は頸部付近に刻み目が施され、体部にはハケメによる調整が認められる。6-10~17は土師器甕である。口縁部付近はナデによる調整、体部はハケメ調整されるものが大半である。7-1、2は土製品で、藁状の植物片の痕や指頭痕が残る粘土塊である。同様の粘土塊は、形状が棒状や円形状など様々であるが、平成22年度調査区でも多く出土している。7-3は、石製模造品で双孔円板である。中央に直径約2mm弱の孔が2ヶ所穿孔される。流紋岩製で両面及び側面に擦痕が残る。7-4~8も同じく石製品で、円盤状に加工されている。8にはスズ状のものが付着する。7-9は琥珀製の切子玉である。直径2mmの孔が両面から穿孔されている。7-10は珪化木の破片である。7-12、13は瀬戸美濃の皿で大窯4段階、年代は16世紀末~17世紀初頭と判断される。7-11は磁器碗で近世~近代の所産と考えられる。7-14は棒状の木製品で先端が炭化している。用途は不明である。その他、図化していないが、鉄滓の小片(図版11)も出土している。H22調査区でも羽口や鉄滓が出土しており、鍛冶など金属製品の加工がおこなわれていたものと推測される。また石製品(7-6・7)と材質が同じ流紋岩の礫(図版11)も出土しているため、石製品の製作が行われていた可能性がある。

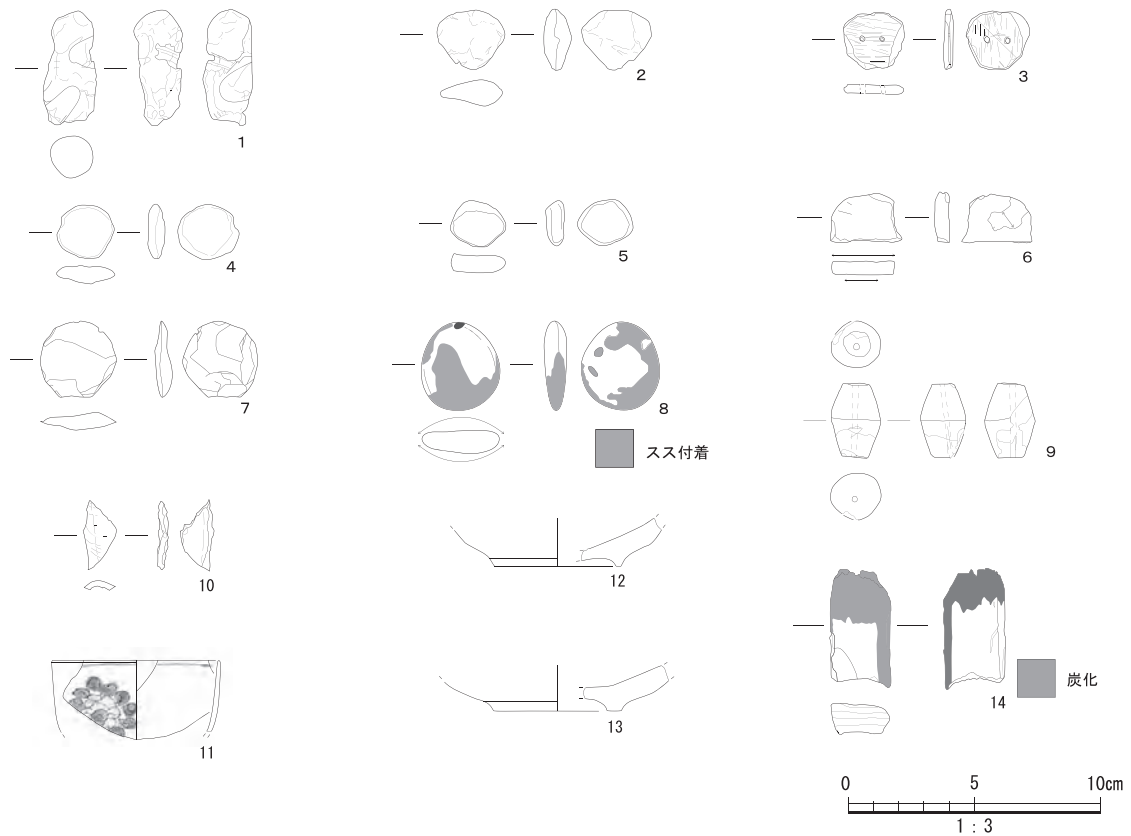
本調査区では、打込まれた柱材は認められなかった。よって9次調査で検出された建物域が、その分布の西端にあたりと考えられる。また本調査区は、9次調査で大量の土器片や子持勾玉が出土した遺物廃棄地点の西側に位置している。同地点は、遺跡縁辺の遺物廃棄場や祭祀の場としての利用が想定されており、切子玉や石製模造品などの出土もそれらと関連するものと考えられる。

また理化学分析の結果によれば、本調査区のⅣa層においてイネ属珪酸体の含有量が多く(短細胞珪酸体約4,100個/g 機動細胞珪酸体が約3,200個/g)確認されているため、周辺で水田耕作が行われた可能性が指摘されている。

トレンチ1の調査概要



第6図 トレンチ1出土遺物(1)



第7図 トレンチ1出土遺物(2)

表2 トレンチ1出土遺物観察表

挿図	番号	図版	種別	器種	調査区	グリッド	層位	計測値 mm(最大)			調整・特徴			備考
								口径/ 長さ	底径/ 幅	器高/ 厚さ	内面	外面	底部	
6	1	9	土師器	坏	トレンチ1	A5-c2, A5-b3	Ⅲ下~Ⅳ	(136)	—	(47)	被熱。黒色ミ ガキ	ナデ	ケズリ	
6	2	9	土師器	坏	トレンチ1	A5-c2	Ⅲ下	(174)	(134)	—	黒色ミガキ	ナデ	ケズリ	
6	3	9	土師器	坏	トレンチ1	A5-c5	Ⅲ下	198	—	—	黒色ミガキ	ナデ		
6	4	9	土師器	坏	トレンチ1	A5-c4	Ⅲ下	—	—	—	黒色ミガキ	ナデ	ケズリ	
6	5	9	土師器	坏	トレンチ1	A5-c5	Ⅲ下	—	—	—	黒色ミガキ	不明		
6	6	9	土師器	高坏	トレンチ1	A5-b5	Ⅲ下	—	(164)	—	脚部：ハケメ	脚部：ハケメ		
6	7	9	土師器	高坏	トレンチ1	A5-c3	Ⅲ下	—	(96)	—	不明	不明		
6	8	9	土師器	壺	トレンチ1	A5-b3	Ⅲ下~Ⅳ上	—	—	—				
6	9	9	土師器	壺	トレンチ1	A5-c5	Ⅲ下	—	—	—	ヘラナデ	ミガキ		
6	10	10	土師器	甕	トレンチ1	A5-c2	Ⅲ下	(136)	—	(38)	ナデ	ナデ		
6	11	10	土師器	甕	トレンチ1	A5-c4	Ⅲ下	(150)	—	(38)	ナデ	ハケメ→ナデ		
6	12	10	土師器	甕	トレンチ1	A5-c5	Ⅲ下	(204)	—	—	ハケメ→ナデ	ハケメ→ナデ		
6	13	10	土師器	甕	トレンチ1	A5-b5	Ⅲ下	—	—	—				
6	14	10	土師器	甕	トレンチ1	A5-b4	Ⅲ上	—	—	—	ヘラナデ	ハケメ		
6	15	10	土師器	甕	トレンチ1	A5-c5	Ⅲ下	—	—	—	ヘラケズリ	ヘラケズリ		
6	16	10	土師器	甕	トレンチ1	A5-c3	Ⅲ下	—	—	—	ハケメ			
6	17	10	土師器	甕	トレンチ1	A5-c5	Ⅲ下	—	(84)	(18)	不明	不明		
7	1	11	土製品	粘土塊	トレンチ1	A5-c3	Ⅲ	44	20	19	指頭痕			
7	2	11	土製品	粘土塊	トレンチ1	A5-c5	Ⅲ下	23.5	22.5	—				
7	3	11	石製機造品	双孔円板	トレンチ1	A5-c5	Ⅲ下	24	23	3	孔2カ所			流紋岩
7	4	11	石製品	円盤状	トレンチ1	A5-b4	Ⅲ上	22	21	6				流紋岩
7	5	11	石製品	円盤状	トレンチ1	A5-c5	Ⅲ下	18	21.5	7				流紋岩
7	6	11	石製品	円盤状	トレンチ1	A5-c4	Ⅲ	28	18	6	磨いている			流紋岩
7	7	11	石製品	円盤状	トレンチ1	A5-c3	Ⅲ	31	29	6.5				流紋岩
7	8	11	石製品	円盤状	トレンチ1	A5-c3	Ⅲ下	35	32	9	ススが付着			デイサイト
7	9	11	石製品	切子玉	トレンチ1	A5-c4	Ⅲ	29	20	20	孔1カ所			琥珀
7	10	11	石製品カ		トレンチ1	A5-b3	Ⅲ上	(28)	(13)	—				珪化木
7	11	11	磁器	碗	トレンチ1	A5-c2	Ⅲ	(65)	—	(28)	染付。草花文			近世~近代か
7	12	11	陶器	瀬戸美濃皿	トレンチ1	A5-c4	Ⅲ	—	(50)	(19)	灰釉7.5Y5/3 灰オリーブ色	灰釉7.5Y5/3 灰オリーブ色		大窯4段階。 16c後
7	13	11	陶器	瀬戸美濃皿	トレンチ1	A5-c3	Ⅲ上	—	(51)	(18)	灰釉7.5Y5/3 灰オリーブ色	灰釉7.5Y5/3 灰オリーブ色		
7	14	11	木製品	棒状	トレンチ1	A5-c4	Ⅲ下~Ⅳa	(44.5)	23.5	12	先端炭化。			

2 トレンチ2の調査概要

位置：公園用地西側に設定した。平成18年度TT24を包括する。

規模：5 m×20m

目的：史跡指定地から西側への遺構の広がりの確認を行う。

検出された遺構は、古墳時代の打込まれた柱材14本、板材が2本である。そのほとんどは調査区北半のA3-f4、A3-f5グリッドに密集して検出され、建物を構成すると考えられるが、具体的な建物規模については不明である。また貼床についても未確認である。調査区南半にも打込まれた柱材や板材、木製品がまばらに検出された。打込材が集中する北半部には、Ⅲ層の下にⅢ層より古い段階の耕作土と判断される土層が確認されており、その部分について掘り下げているため、周辺より遺構検出標高が30cmほど低い。また、遺構確認面であるⅣb層が非常に軟弱で、上層から遺物が入り込んでいるような状況であったことから、掘りすぎている部分もある。

柱材は、全て芯持材で直径は最小で約6cm、最大で10cmを測る。断面形状は円形、半円（扇）形、板状の概ね3種が確認できた。板材は柁目材で幅10cm、厚さ1cm前後を測る。柱材周辺からは、棒状や板状の木製品が横位で出土しており、比較的大型のものは建築部材と考えられる。打込まれた柱材・板材は、上部が炭化しているものと、炭化していないものが確認された。これらの柱材が建物を構成するものであるとすれば、建物は少なくとも2時期以上の変遷があると考えられる。また年代測定の結果、136は、530AD～602AD、137は、538AD～620ADの年代が得られている。

樹種は、W1：トネリコ属、W2：ケンポナシ属、W3・W4・W8・W12・W137：クリ、W5：コナラ属コナラ亜属クスギ節、W6・W9・W10・W136：コナラ属コナラ亜属コナラ節、W7・W11：モモ、W13：ハンノキ属ハンノキ亜属、W148：スギ材である。

遺物は、土器、石製品、木製品、鉄製品などが出土した。土器では、土師器坏9-1～3、甕9-4、5、甑9-6が出土した。土師器坏は外面体部に段を持つものと持たないもの、内面について黒色処理されるものと非黒色のものとが認められる。9-6は甑で、体部内外面にミガキがみられる。土製品は2点出土した。9-7はトレンチ1でも出土した粘土塊、9-8は土師器甕片を円盤状に加工したものである。9-9は流紋岩製の砥石で、4面が使用されており、擦痕が確認される。9-10は、古代の須恵器坏底部で底部の切離しは回転ヘラ切である。9-11～14は鉄製品で所属時期は不明である。9-14は永楽通宝である。

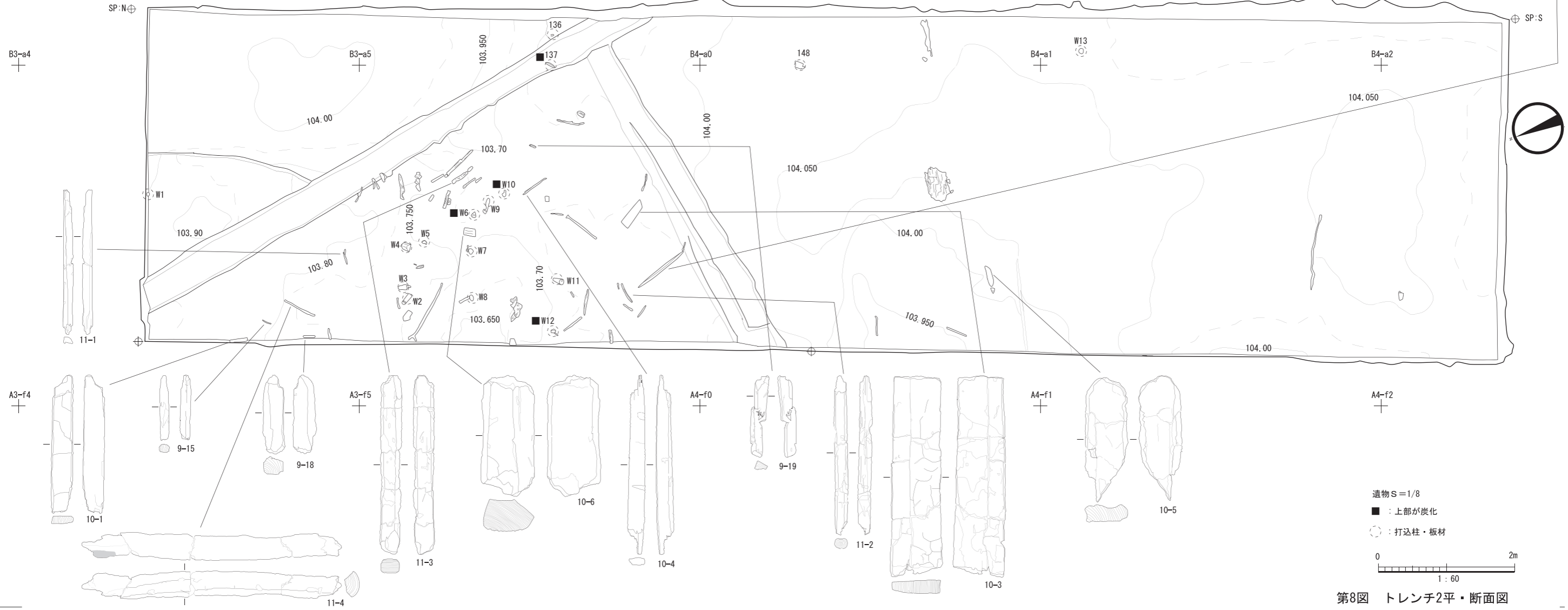
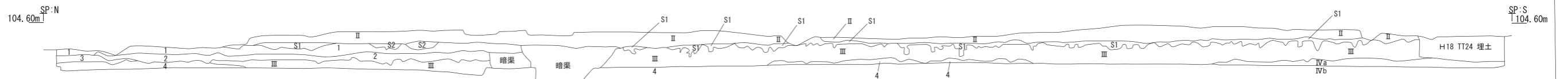
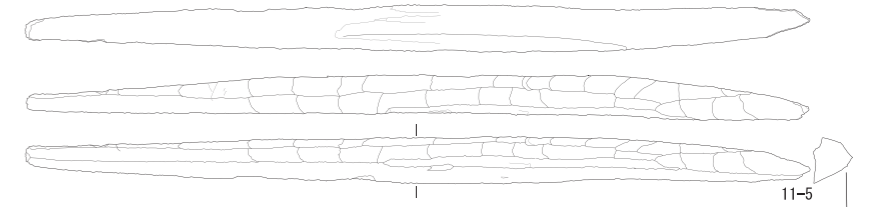
木製品は、形状から板状、棒状、それ以外に分けられるが、その用途は不明である。10-1～3は板状の木製品で、手斧による加工痕が残る。11-1～5は棒状の木製品である。11-2、3は面取り加工されている。11-5は断面が三角形の棒状木製品で、手斧により、側面および先端が加工される。建築部材と考えられる。

本調査区では、打込まれた柱材が検出されたことから、建物域が広がっているものと判断された。検出状況から、建物域は本調査区よりさらに西側に広がるものと推測されるが、その範囲は判然としない。

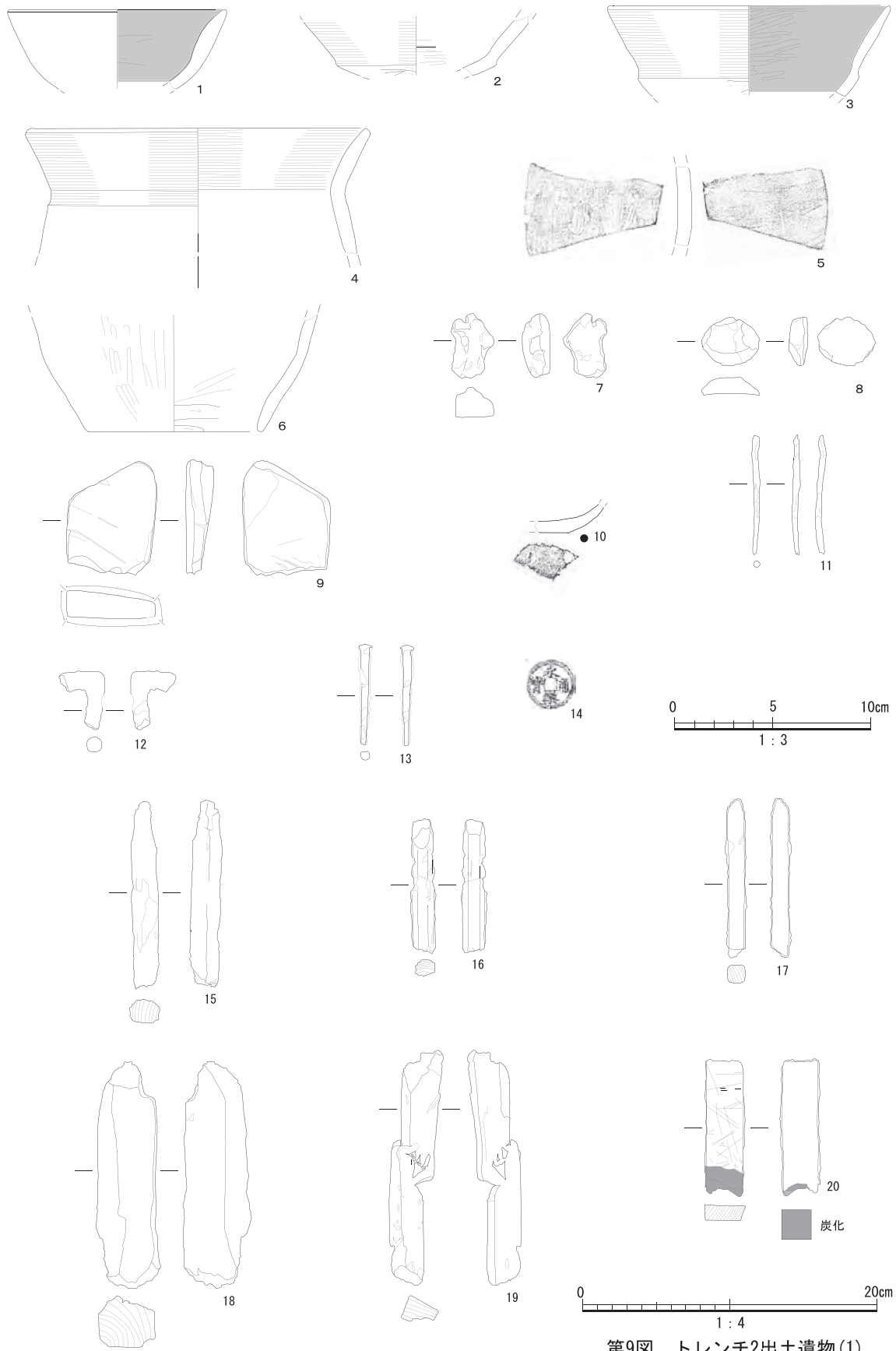
本地区については、調査区南東角を除き、Ⅳb層上面まで掘下げを実施した。打込柱や板材、壁・遺構確認面以下にささる木材は、保存のため現地に残し、それ以外は取り上げて調査を終了した。

トレンチ2土層注記

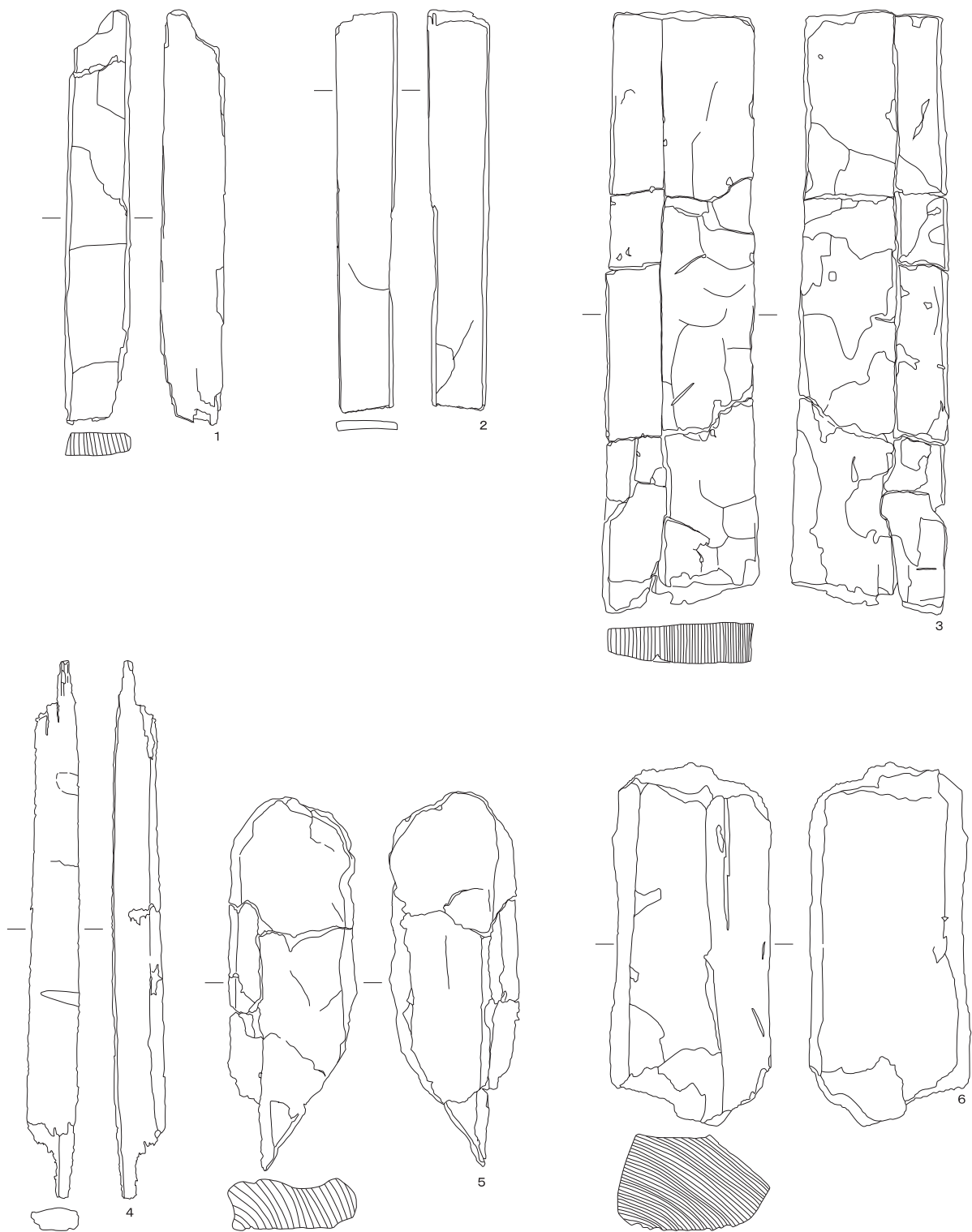
1	10YR 3/2黒褐色シルト	炭化粒を微量に含む。砂混じり。管状酸化鉄斑紋がみられる。
2	10YR 2/2黒褐色粘質シルト	砂混じり。管状酸化鉄斑紋が多くみられる。
3	10YR 3/2黒褐色シルト	炭化粒 (2~5m/m大) を1%含む。10YR 3/3暗褐色シルトをまだらに30%含む。
4	2.5Y 4/2暗灰黄色粘土~5Y 6/3オリーブ黄色粘土	Ⅲ層より前の段階の整地層と考えられる。
II	10YR 3/3暗褐色シルト	管状酸化鉄斑紋がみられる。水田基盤層。
S1	10YR 5/4にぶい黄褐色細砂	10YR 2/2黒褐色粘質シルトをまだらに5%含む。洪水堆積層。
S2	10YR 3/3暗褐色シルト	10YR 5/4にぶい黄褐色砂をまだらに20%含む。洪水堆積層。
Ⅲ	10YR 2/1~2/2黒色~黒褐色粘質シルト	10YR 6/3にぶい黄褐色シルト粒 (2~10m/m大) を3%含む。遺物を含む。10YR 5/2灰黄褐色細砂ブロックを2%含む。上部に管状酸化鉄斑紋がみられる。近世~近代の水田耕作土。
IVa	10YR 3/2黒褐色粘土	腐植しほとんど分解した植物質片を10%含む。炭化粒 (1~2m/m大) を微量に含む。10YR 4/2灰黄褐色粘土ブロックを1%含む。遺物包含層。
IVb	10YR 4/2灰黄褐色粘土	腐植した植物片を25%含む。遺構確認面。(地山)



第8図 トレンチ2平・断面図



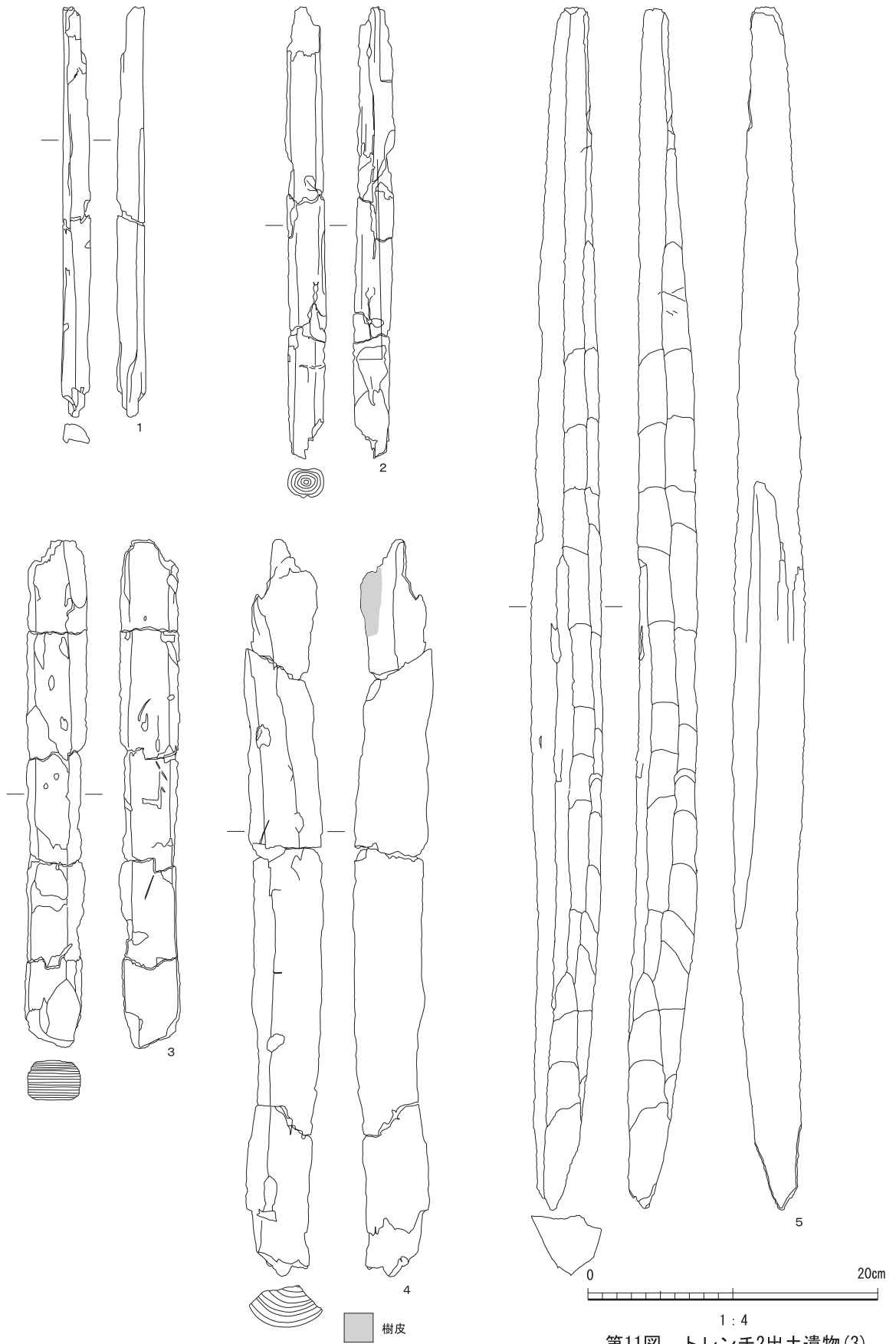
第9図 トレンチ2出土遺物(1)



0 20cm

1:4

第10図 トレンチ2出土遺物(2)



第11図 トレンチ2出土遺物(3)

表3 トレンチ2出土遺物観察表

挿図	番号	図版	種別	器種	調査区	グリッド	層位	計測値 mm(最大)			調整・特徴			備考
								口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	内面	外面	底部	
9	1	12	土師器	環	トレンチ2			(110)		8		黒色ミガキ		
9	2	12	土師器	環	トレンチ2	A3-f4	Ⅲ	—	82	—		ミガキ	ナデ	ケズリ
9	3	12	土師器	環	トレンチ2	A4-f2	Ⅲ～腐植土	(144)	(112)	—		黒色ミガキ	ナデ	ケズリ
9	4	12	土師器	甕	トレンチ2	A4-f2	Ⅲ下	(170)	—	—		ナデ	ナデ	
9	5	12	土師器	甕	トレンチ2	A3-f4	Ⅲ	—	—	—		ヘラナデ	ハケメ	
9	6	12	土師器	甕	トレンチ2	A3-f5	Ⅲ～腐植土	—	(84)	—		ミガキ、ケズリ	ヘラケズリ→ミガキ	
9	7	12	土製品	粘土塊	トレンチ2	A4-f0	Ⅲ	34.6	20	16				
9	8	12	土製品	円盤状	トレンチ2	B4-a	Ⅲ	30	25	8			土師器甕片を加工	
9	9	12	石製品	砥石	トレンチ2	竈内(A3-f5)	埋土	58	42.5	15			4面砥面。流紋岩。	
9	10	12	須恵器	環	トレンチ2	A4-f1	Ⅲ	—	—	—		ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切
9	11	12	鉄製品		トレンチ2	A3-f5	Ⅲ下	61	3.5	4				
9	12	12	鉄製品		トレンチ2	A3-f5	Ⅲ	(30)	(23)	7				
9	13	12	鉄製品	釘	トレンチ2	A3-f5	Ⅲ	51.5	7	6				
9	14	12	古銭	永楽通宝	トレンチ2	A3-f5	Ⅲ							
9	15	13	木製品	棒状	トレンチ2	A3-f4	Ⅲ	125.5	19.5					
9	16	13	木製品	棒状	トレンチ2	A3-f5	Ⅲ	90	17.5	11			六角形に加工。	
9	17	13	木製品	棒状	トレンチ2	A3-f5	Ⅲ	105.5	14	11.5				
9	18	13	木製品	棒状	トレンチ2	A3-f4	Ⅲ	152	40.5	35				
9	19	13	木製品	棒状	トレンチ2	A3-f5	Ⅲb	156	26.5	17			土圧により折れ曲がる	
9	20	13	木製品	板状	トレンチ2	B3-a5	Ⅲ	92	26.5	10			表面に刃物キズが残る。先端炭化	
10	1	13	木製品	板状	トレンチ2	A3-f4	Ⅲb	265	42.5	15			榫目。手斧痕	
10	2	13	木製品	板状	トレンチ2	A3-f5	Ⅲ下～Ⅲb	257	40	6				
10	3	13	木製品	板状	トレンチ2	A3-f5	Ⅲb	389	100	25			榫目。手斧痕 ニレ科ケヤキ属ケヤキ	
10	4	14	木製品	板状	トレンチ2	A3-f5	Ⅲ下～Ⅲb	351	33	14			両端加工	
10	5	14	木製品		トレンチ2	A4-f0	Ⅲb	242	83	33				
10	6	14	木製品		トレンチ2	A3-f5	Ⅲ	232	105	59.5				
11	1	14	木製品	棒状	トレンチ2	A3-f4	Ⅲb	282	19.5	13				
11	2	14	木製品	棒状	トレンチ2	A3-f5	Ⅲ下～Ⅲb	361	25.5	20.5			面取り加工。芯持ち。	
11	3	14	木製品	棒状	トレンチ2	A3-f5	Ⅲ下～Ⅲb	350	41	27			榫目。	
11	4	14	木製品	棒状	トレンチ2	A3-f4	Ⅲb	508	50	38			分割材 一部樹皮残る	
11	5	14	木製品	棒状	トレンチ2	A3-f5	Ⅲb	826	48	40			側面、先端に加工痕あり	

3 トレンチ3の調査概要

位置：公園用地西側に設定した。平成5年度3Bトレンチを包括する。

規模：4 m×25m

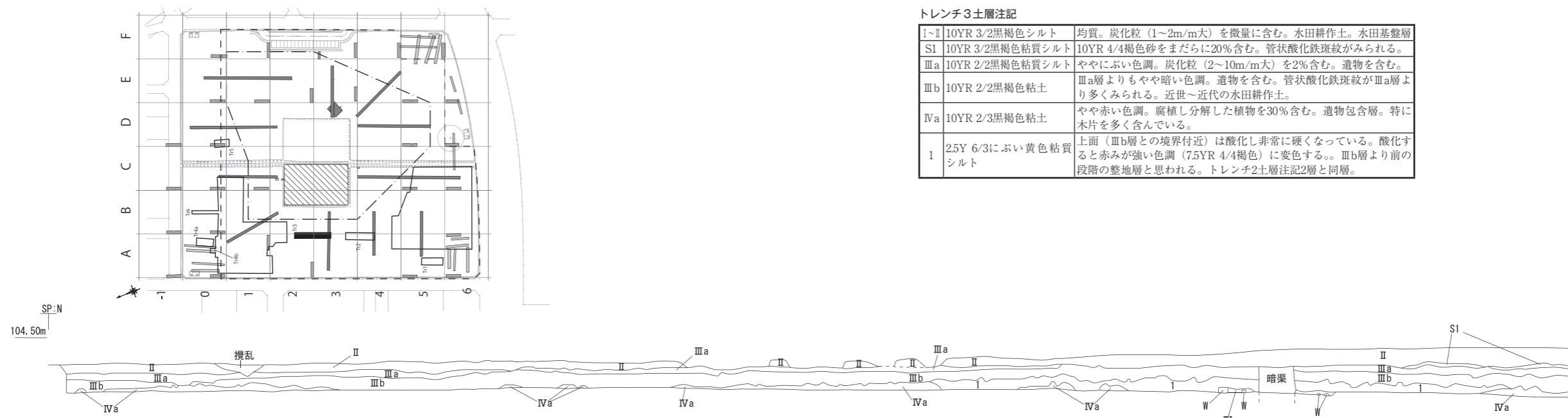
目的：史跡指定地から西側への遺構の広がりの確認を行う。

調査区南端、A3-f1、A3-f2グリッドで古墳時代の打込まれた柱材（芯持）が2本（200、203）検出された。柱材の大きさはW200が径8cm（分割材）、W203が径6cmを測る。柱間は約2.2mを測り、建物跡と推測されるが、貼床もなく、部分的な検出であるため、全体の規模は不明である。樹種同定の結果、W200はクリ材、W203はスギ材であった。打込材の他、Ⅲ層下～Ⅳa層中に木製品が分布している状況が確認された。A2-f5、B2-a5グリッド付近では、木製品の方向が一定または直交して出土する傾向が見られた。

遺物はⅢ層、Ⅳa層を中心に出土した。14-1、2は土師器環、14-3～8は土師器甕である。口縁部はナデによる調整、体部はハケメ調整されるものがほとんどである。14-9は小型土器である。14-10は、円盤状石製品で両面が磨かれている。

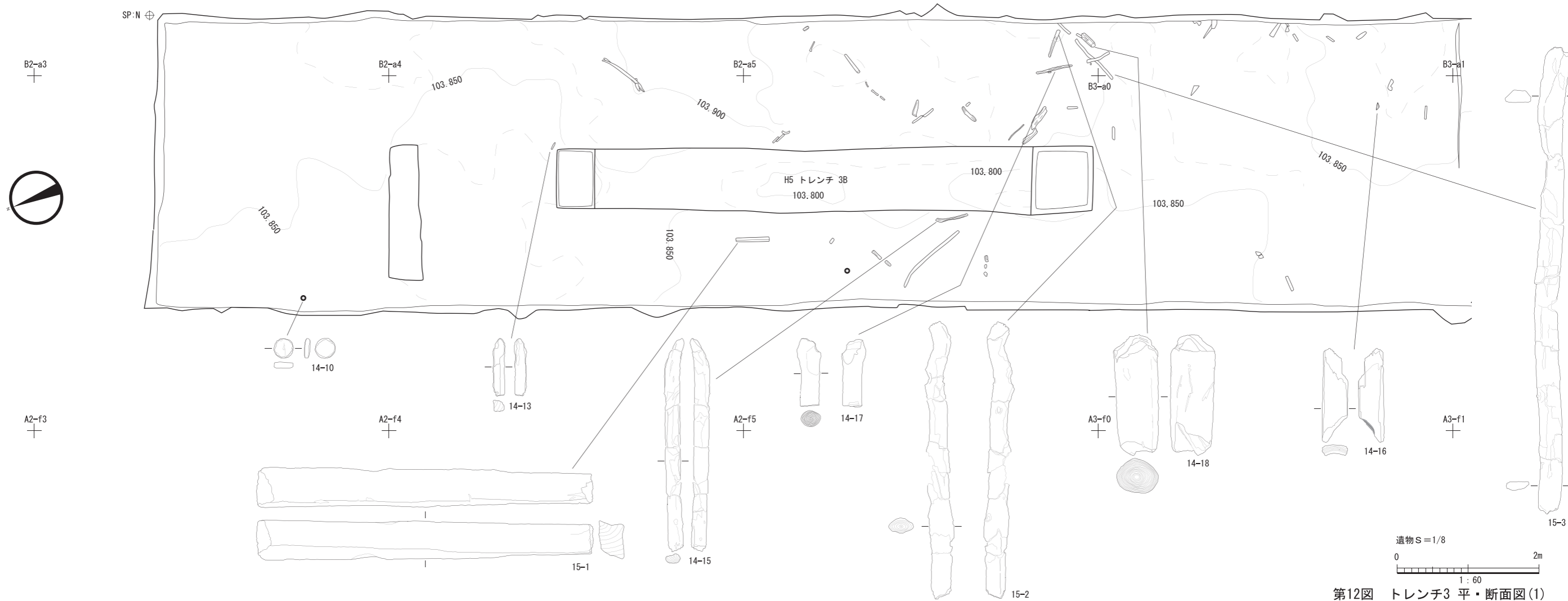
14-12～18、15-1～3は木製品である。全てⅣa層から出土し、長さが10cm内外の小型の木製品とそれ以外のものに分けられる。棒状、板状などの形状が認められるが、用途は不明である。14-12は棒状の木製品で、不整六角形に面取り加工されている。14-14は板状で側面に加工が施される。14-18は直径8cm、長さ約20cmの芯持材である。両端に加工痕があるが、未成品と考えられる。15-1～3は、比較的大型の製品で、建築部材の可能性はある。

本地区では、古墳時代の遺物包含層であるⅣa層が確認されており、打込まれた柱材が検出されたことから、建物域が広がっているものと判断される。建物域は、より西側に広がる可能性もあるがその範囲は不明である。本地区は、Ⅳa層中またはⅣb層上面で掘下げを中止した。また打込材、壁にささる木製品を除いた遺物については取り上げを実施し、調査終了とした。



トレンチ3土層注記

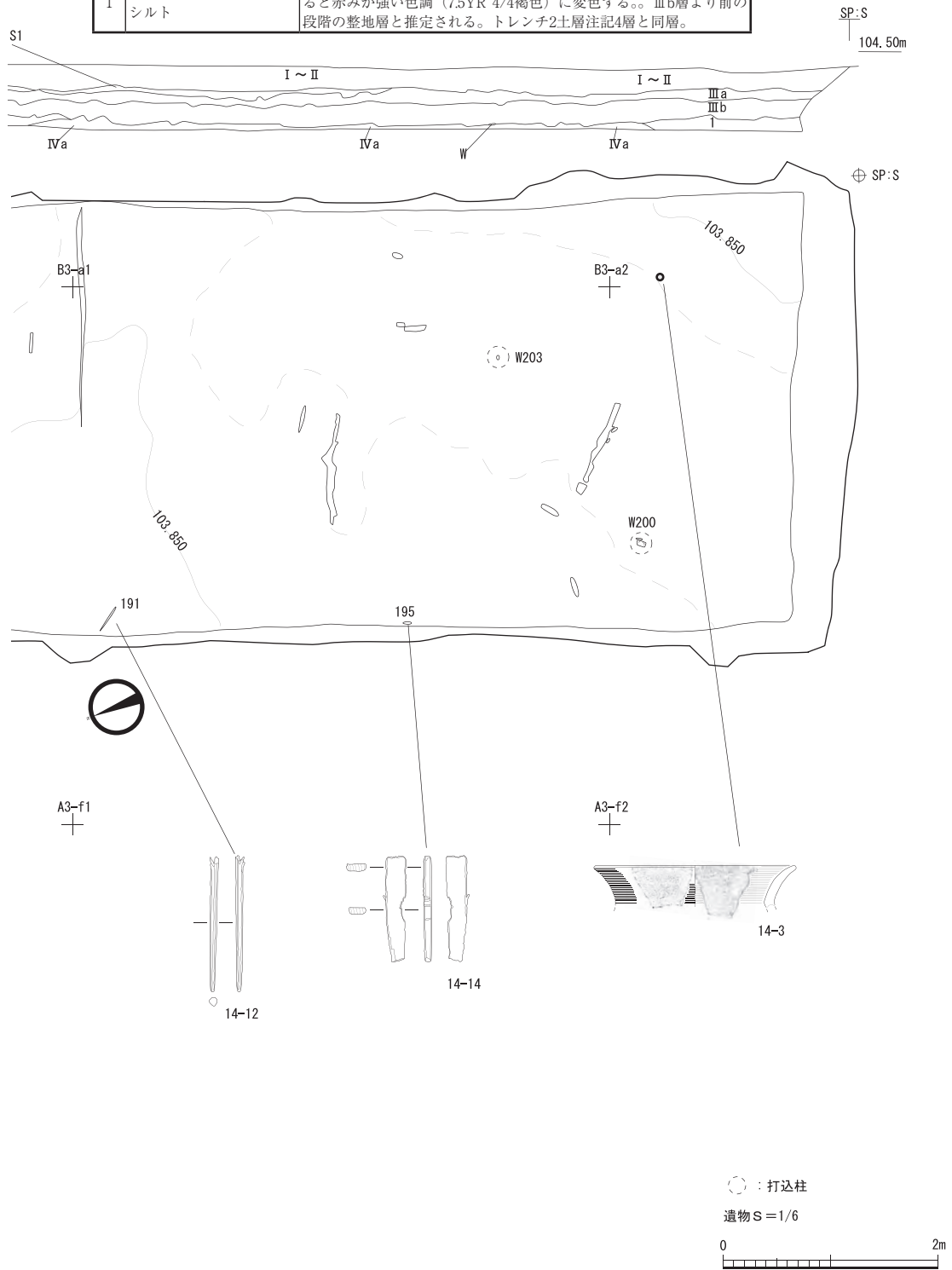
I-II	10YR 3/2黒褐色シルト	均質。炭化粒 (1~2m/m大) を微量に含む。水田耕作土。水田基盤層
S1	10YR 3/2黒褐色粘質シルト	10YR 4/4褐色砂をまだらに20%含む。管状酸化鉄斑紋がみられる。
IIIa	10YR 2/2黒褐色粘質シルト	ややぶい色調。炭化粒 (2~10m/m大) を2%含む。遺物を含む。
IIIb	10YR 2/2黒褐色粘土	IIIa層よりもやや暗い色調。遺物を含む。管状酸化鉄斑紋がIIIa層より多くみられる。近世~近代の水田耕作土。
IVa	10YR 2/3黒褐色粘土	やや赤い色調。腐植し分解した植物を30%含む。遺物包含層。特に木片を多く含んでいる。
1	2.5Y 6/3にぶい黄色粘質シルト	上面 (IIIb層との境界付近) は酸化し非常に硬くなっている。酸化すると赤みが強い色調 (7.5YR 4/4褐色) に変色する。IIIb層より前の段階の整地層と思われる。トレンチ2土層注記2層と同層。



第12図 トレンチ3 平・断面図(1)

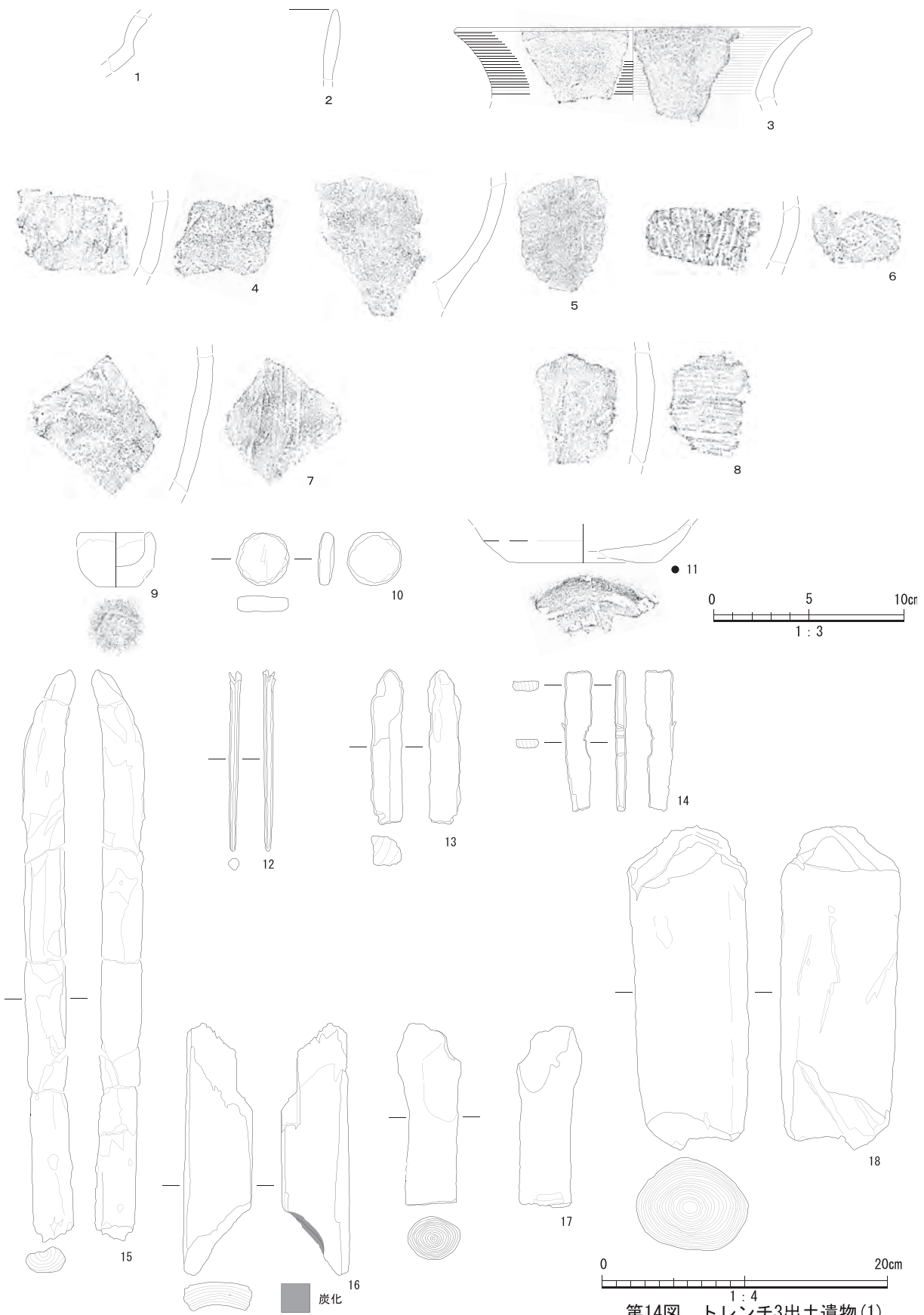
トレンチ3土層注記

I~II	10YR 3/2黒褐色シルト	均質。炭化粒（1~2m/m大）を微量に含む。水田耕作土。水田基盤層
S1	10YR 3/2黒褐色粘質シルト	10YR 4/4褐色砂をまだらに20%含む。管状酸化鉄斑紋がみられる。
IIIa	10YR 2/2黒褐色粘質シルト	ややぶい色調。炭化粒（2~10m/m大）を2%含む。遺物を含む。
IIIb	10YR 2/2黒褐色粘土	IIIa層よりもやや暗い色調。遺物を含む。管状酸化鉄斑紋がIIIa層より多くみられる。近世~近代の水田耕作土。
IVa	10YR 2/3黒褐色粘土	やや赤い色調。腐植し分解した植物を30%含む。遺物包含層。特に木片を多く含んでいる。
1	2.5Y 6/3にぶい黄色粘質シルト	上面（IIIb層との境界付近）は酸化し非常に硬くなっている。酸化すると赤みが強い色調（7.5YR 4/4褐色）に変色する。IIIb層より前の段階の整地層と推定される。トレンチ2土層注記4層と同層。

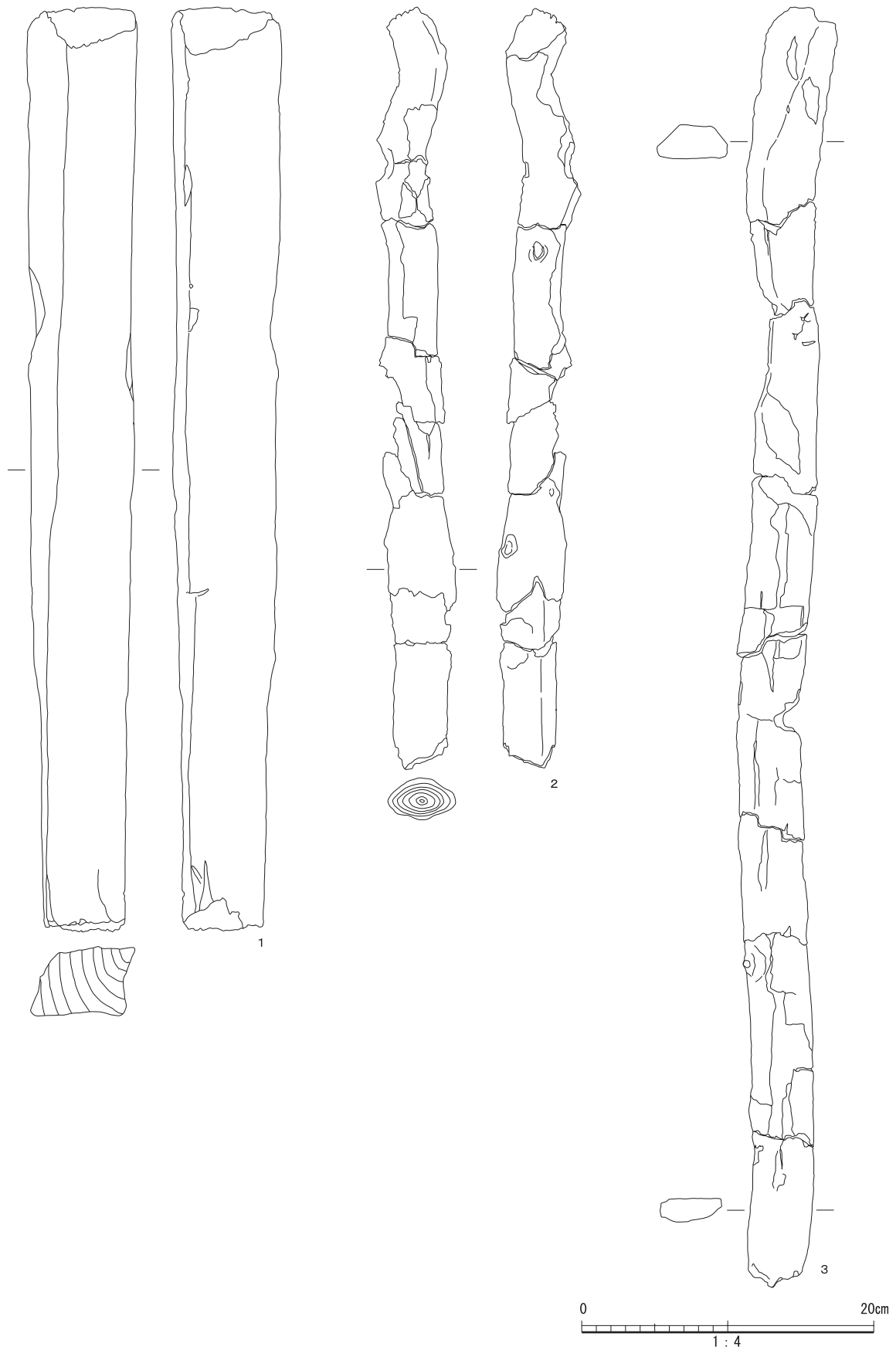


第13図 トレンチ3平・断面図(2)

トレンチ3の調査概要



第14図 トレンチ3出土遺物(1)



第15図 トレンチ3出土遺物

表4 トレンチ3出土遺物観察表

挿図	番号	図版	種別	器種	調査区	グリッド	層位	計測値 mm(最大)			調整・特徴			備考
								口径/ 長さ	底径/ 幅	器高/ 厚さ	内面	外面	底部	
14	1	15	土師器	坏	トレンチ3						黒色ミガキ	ナデ		
14	2	15	土師器	坏	トレンチ3	A2-f4	IVa	—	—	—	黒色ミガキ	ナデ		
14	3	15	土師器	甕	トレンチ3	B3-a2	IVa	(185)	—	—	ハケメ～ナデ	ナデ		
14	4	15	土師器	甕	トレンチ3	B2-a4		—	—	—	ヘラナデ	ヘラケズリ		
14	5	15	土師器	甕	トレンチ3	B2-a5	IVa	—	—	—	ハケメ	ハケメ		
14	6	15	土師器	甕	トレンチ3	A3-f0	III	—	—	—	ヘラナデ	ハケメ		
14	7	15	土師器	甕	トレンチ3	A3-f0		—	—	—	ヘラケズリ	ヘラケズリ		
14	8	15	土師器	甕	トレンチ3	B3-a1	III～IVa	—	—	—	ハケメ	ハケメ		
14	9	16	土師器	小型土器	トレンチ3		表土	—	20	28.5	ナデ	ナデ		
14	10	16	石製品	円盤状	トレンチ3	A2-f4	III	28	27.5	8	流紋岩			
14	11	12	須恵器	坏	トレンチ3	B3-f0	III	—	(78)	—	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	
14	12	16	木製品	棒状	トレンチ3	A3-a1	III	126	7	7	面取加工 ヒノキ科アスナロ属			
14	13	16	木製品	棒状	トレンチ3	A2-f4	IV a	107.5	22.5	21				
14	14	16	木製品	板状	トレンチ3	A3-f1	III	98	19	6	側面に加工あり スギ科スギ属スギ			
14	15	16	木製品	棒状	トレンチ3	A2-f5	IVa	392	28	15.5				
14	16	16	木製品	板状	トレンチ3	A3-f0	IV a	153.5	47.5	16	両端が炭化。板目 ヒノキ科アスナロ属			
14	17	16	木製品	棒状(丸)	トレンチ3	A2-f5		126.5	33.5	31	芯持丸木。			
14	18	16	木製品	棒状	トレンチ3	B2-a5		225	79	64	芯持丸木。			
15	1	17	木製品	棒状	トレンチ3	A2-f5	IVa	474	55.5	33.5	分割材 スギ科スギ属スギ			
15	2	17	木製品	棒状	トレンチ3	B2-a5	IV a	517	35	28	一部樹皮残る。ヤナギ科ヤナギ属			
15	3	17	木製品	棒状	トレンチ3	B2-a5～B3-a0		800	44	34				

4 トレンチ4の調査概要

位置：公園用地北西部、周知の埋蔵文化財包蔵地外に設定した。緊急発掘調査区と南側で隣接する。
平成16・17年度トレンチTP5、TP17を包括する。

規模：トレンチ4a：5m×11.5m トレンチ4b：3×4m

目的：平成18年度調査において近代以降の攪乱と判断した範囲の再検証を行う。また面的に広げることにより、打込柱等の古墳時代の建築部材が遺存しているかの確認を行う。

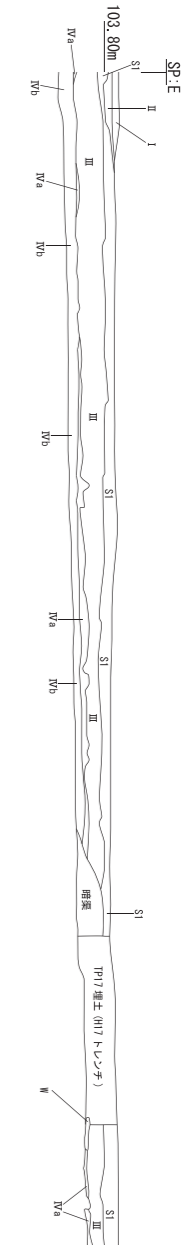
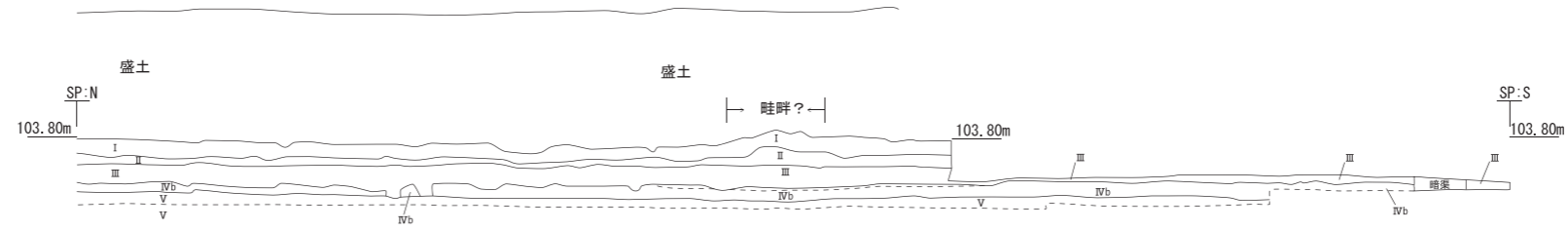
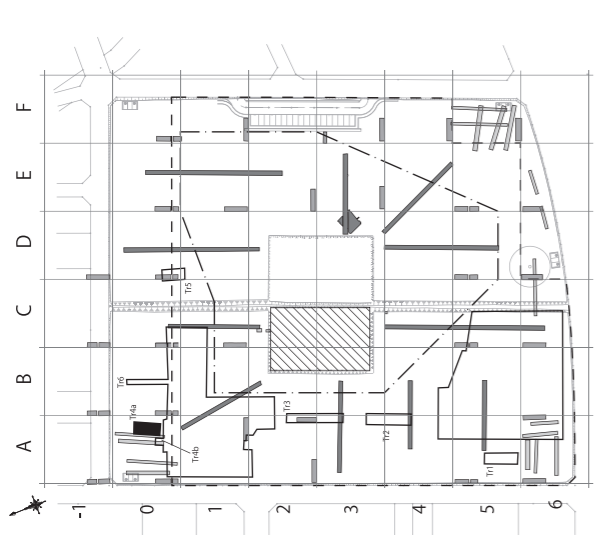
調査区の都合で、東側のトレンチ4aと西側のトレンチ4bの2カ所について精査した。東側のトレンチ4aでは、Ⅲ層を除去すると遺構確認面のⅣb層になり、精査したが明確な遺構は検出されなかった。北半部分は、Ⅳb層以下の土層確認のためさらに掘下げを実施した。

トレンチ4bでは、古墳時代の包含層であるⅣa層が、A0-d4グリッド付近に薄く（層厚2～4cm未満）分布しており、同層中から加工痕のある木製品が出土した。緊急発掘調査区で検出された木製品が集積する遺構と一連のもので、その分布範囲の北端部にあたると判断される。

遺物は土器片、木製品などがⅢ層、Ⅳa層より少量出土している。18-4～9は木製品である。いずれも完形のものではなく、欠損している。トレンチ4b内、古墳時代の包含層（Ⅳa層）より出土した。18-4は棒状の木製品で面取り加工が施されている。

その他、表土、Ⅲ層中から古代の須恵器甕片18-1や景德鎮の磁器皿18-2などが出土した。また図化していないが、モモヤクルミ、炭化した種子（米、アワ）の塊がⅢ層中から出土している。

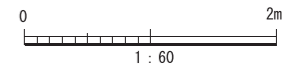
調査の結果、近現代の耕地整理による削平はⅢ層まででそれより下層には及んでおらず、近代以降の攪乱は受けていないことが分かった。しかし本調査区は、全体的には遺物の出土も少なく、グリッドA0ラインより北側は、Ⅲ層直下がⅣb層の地山となることから、近世以降の耕作により古墳時代の包含層が削平された状況であると認められた。古墳時代の遺物量も少なく、遺構も未検出であるため、本地区は遺跡の縁辺部にあたると判断される。



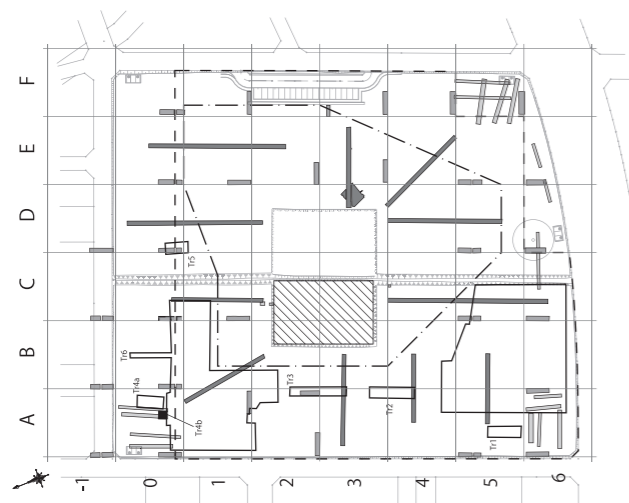
トレンチ4土層注記

I	10YR 3/2黒褐色シルト	ややぶい色調。管状酸化鉄斑紋がみられる。旧水田耕作土。
II	10YR 3/2黒褐色シルト	I層との境に管状酸化鉄斑紋がみられる。旧水田基盤層。
S1	10YR 3/2黒褐色粘土	砂混じり。10YR 5/4にぶい黄褐色細砂をまだらに15%含む。管状酸化鉄斑紋あり。部分的にIII層に入り込む。
III	10YR 2/1黒色粘質シルト	10YR 5/2灰黄褐色粘土粒 (1~2m/m大) を微量に含む。10YR 7/2にぶい黄褐色シルト粒を部分的に含む。管状酸化鉄斑紋がI、II層より多くみられる。
IVa	10YR 2/1~2/3黒色~黒褐色粘土	IIIよりもぶい色調。西側では赤みを帯びた色調となる。腐植した植物、黒色化した植物を20%含む。この層より木片が出土する。(H18調査時のV層とした層か)。IVa層はトレンチ南西部にみられる層で、南西部以外はIII層直下がIVb層になる。
IVb	10YR 4/2灰黄褐色粘土	10YR 7/2にぶい黄褐色粘土を2~20m/mの厚さで横溝状に15%含む。腐植した植物、黒色化した植物を20%含む。上層は灰色味が強い。遺構確認面。(地山)
V	2.5Y 2/1黒色粘土	腐植した植物(完全に分解せずに構造が残っている)を30%含む。10YR 5/2灰黄褐色粘土をまだらに5%含む。(地山)

遺物S=1/6
 ◎ : 炭化した種子

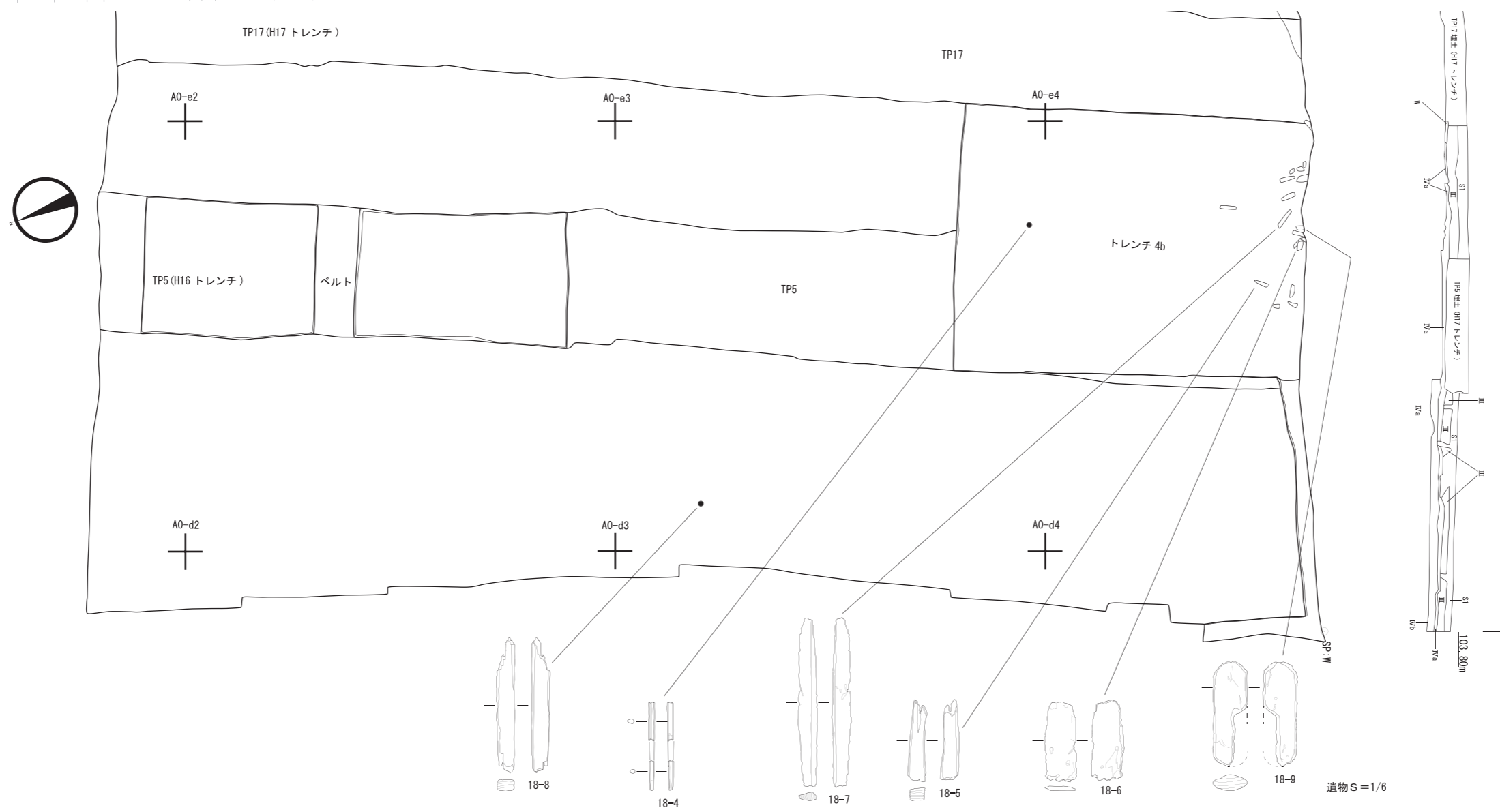


第16図 トレンチ4平・断面図(1)

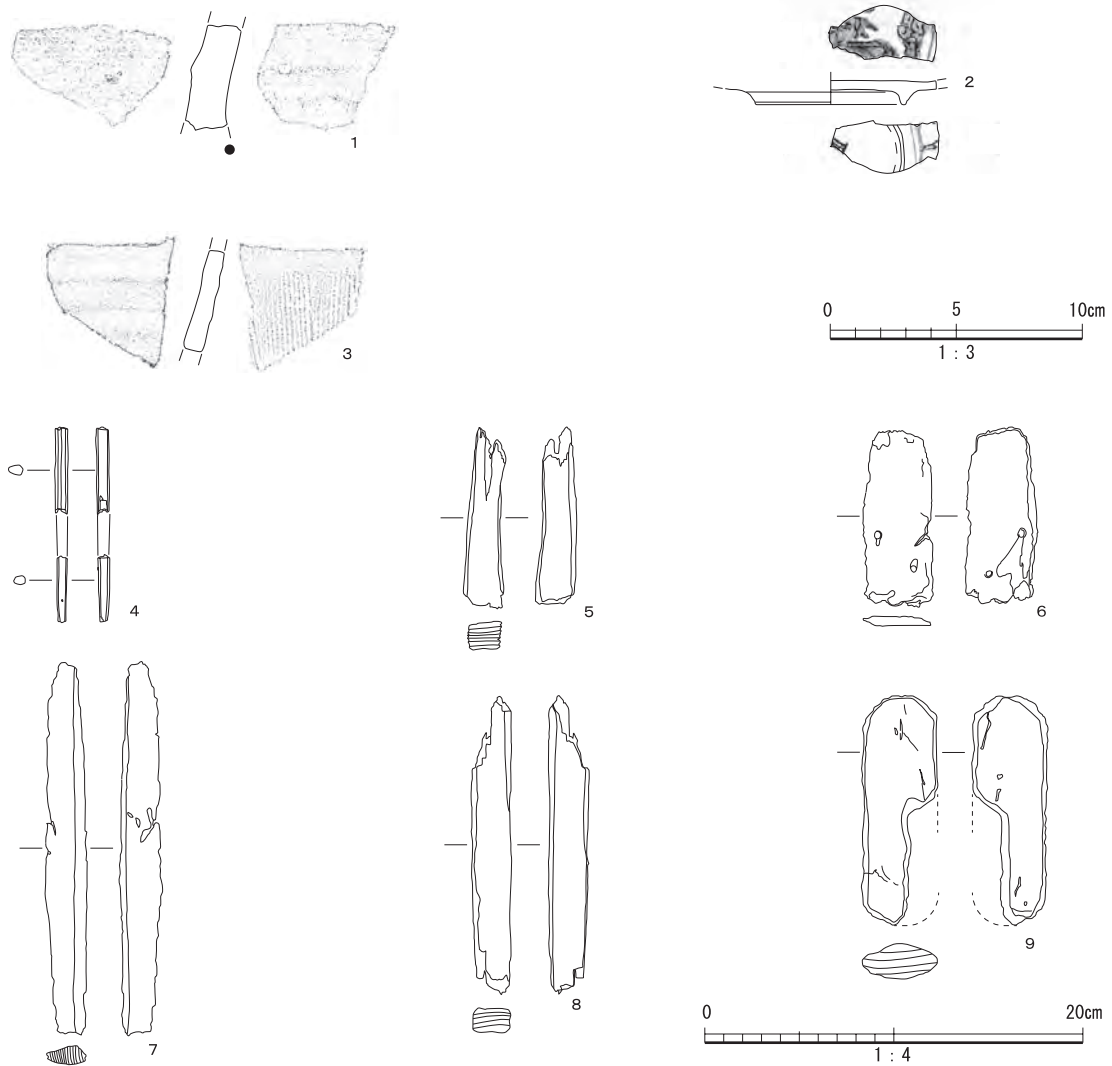


トレンチ4土層注記

I	10YR 3/2黒褐色シルト	ややぶい色調。管状酸化鉄斑紋がみられる。旧水田耕作土。
II	10YR 3/2黒褐色シルト	I層との境に管状酸化鉄斑紋がみられる。旧水田基盤層。
SI	10YR 3/2黒褐色粘土	砂混じり。10YR 5/4にぶい黄褐色細砂をまだらに15%含む。管状酸化鉄斑紋あり。部分的にIII層に入り込む。
III	10YR 2/1黒色粘質シルト	10YR 5/2灰黄褐色粘土粒（1~2m/m大）を微量に含む。10YR 7/2にぶい黄褐色シルト粒を部分的に含む。管状酸化鉄斑紋がI、II層より多くみられる。
IVa	10YR 2/1~2/3黒色~黒褐色粘土	IIIよりもぶい色調。西側では赤みを帯びた色調となる。腐植した植物、黒色化した植物を20%含む。この層より木片が出土する。(H18調査時のV層とした層か)。IVa層はトレンチ南西部にみられる層で、南西部以外はIII層直下がIVb層になる地点が多い。
IVb	10YR 4/2灰黄褐色粘土	10YR 7/2にぶい黄褐色粘土を2~20m/mの厚さで横縞状に15%含む。腐植した植物、黒色化した植物を20%含む。上層は灰色味が強い。遺構確認面。(地山)
V	2.5Y 2/1黒色粘土	腐植した植物（完全に分解せずに構造が残っている）を30%含む。10YR 5/2灰黄褐色粘土をまだらに5%含む。(地山)



第17図 トレンチ4平・断面図(2)



第18図 トレンチ4出土遺物

表5 トレンチ4出土遺物観察表

挿図	番号	図版	種別	器種	調査区	グリッド	層位	計測値 mm(最大)			調整・特徴			備考
								口径/ 長さ	底径/ 幅	器高/ 厚さ	内面	外面	底部	
18	1	17	須恵器	甕	トレンチ4a		Ⅲ				ロクロ	ロクロ		
18	2	17	磁器	青花皿	トレンチ4		表土		(58)		青花文			景德鎮。 16c末～ 17c初
18	3	17	陶器	播鉢	トレンチ4		埋土				鉄釉。 卸目11条	鉄釉。 ロクロナデ		
18	4	17	木製品	棒状	トレンチ4b	A0-d3	Ⅲ			6	面取り加工	ヒノキ科アスナロ属		
18	5	17	木製品	棒状	トレンチ4b	A0-d4	Ⅳ a	95	21	14				
18	6	17	木製品	棒状	トレンチ4b	A0-d4	Ⅳ a	92.5	36	4.5				
18	7	18	木製品	棒状	トレンチ4b	A0-d4	Ⅳ a	196	22	10.8				
18	8	18	木製品	棒状	トレンチ4	A0-d3	Ⅲ	154	20	12				
18	9	18	木製品		トレンチ4b	A0-d4	Ⅳ a	121	40	19	クワ科クワ属			

5 トレンチ5の調査概要

位置：公園用地北側中央部、平成5年度1Dトレンチを包括する。

規模：5m×10m

目的：トレンチ4と同様に近代以降の攪乱と判断した範囲の再検証を行う。面的に広げることにより打込柱などの古墳時代の建築部材が遺存しているかの確認を行う。

検出された遺構は、溝跡SD1と性格不明遺構SX2である。SD1は、平成5年度1Dトレンチ及び平成18年度TT20で検出された、南東から北西方向に走行する溝跡と同一の遺構である。平成5年度1Dトレンチ調査時は遺構の掘下げをしておらず、平成18年度調査では、古墳時代と推定される木材を断ち切って構築されているため、比較的新しい時代の遺構と判断している。今調査でもSD1、SX2の覆土はⅢ層とほぼ同質であること、またSD1は幅が一定しておらず、底面も凹凸がみられることから自然流路と考えられ、時代を判断できるような遺物は出土していないが、覆土及び過去の調査結果から近世以降の所産と判断される。それ以外の遺構は未検出である。

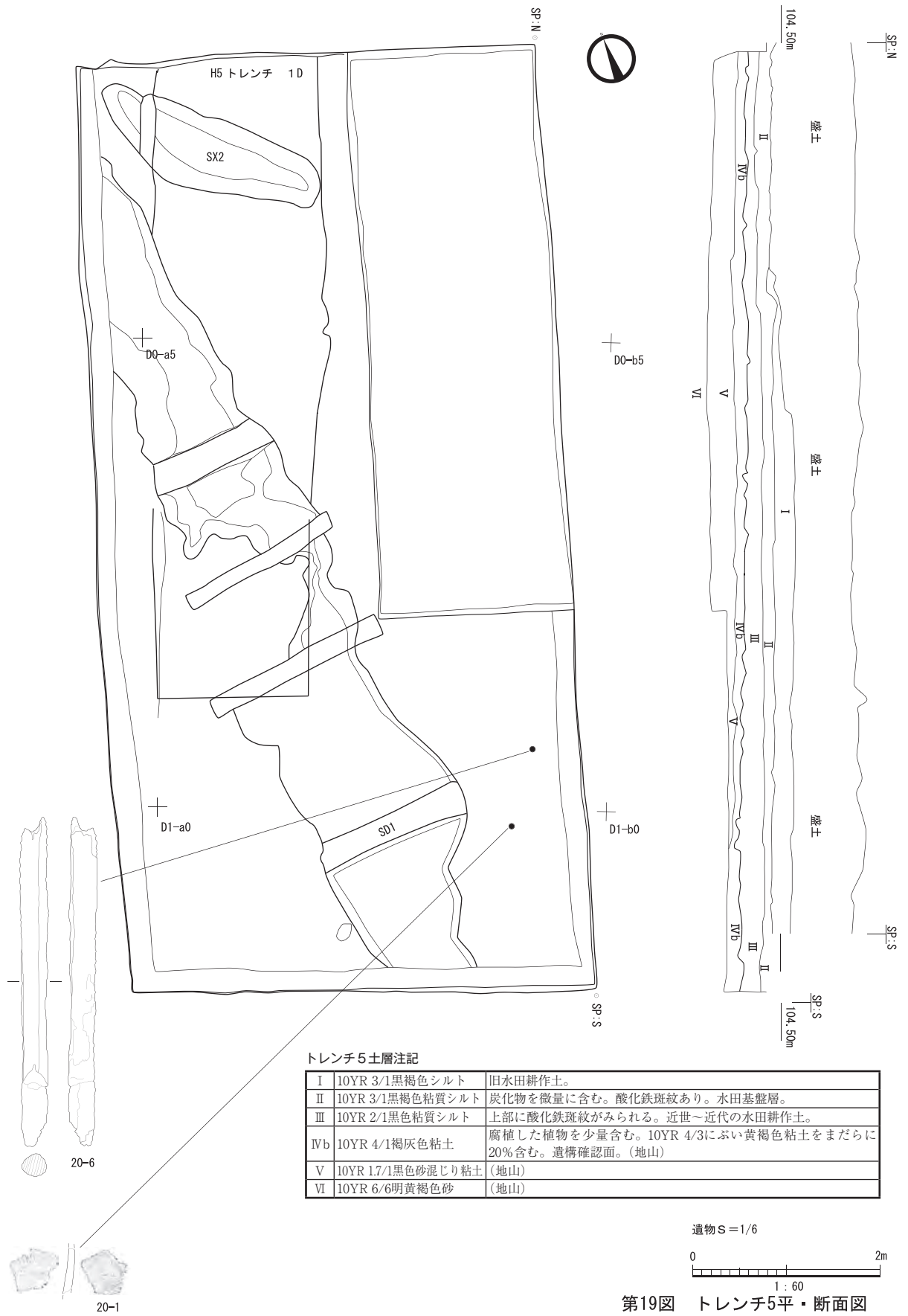
また、Ⅳb層より以下の土層について確認するため、トレンチ内の北東部分を掘り下げたところ、河川堆積と考えられる砂層（Ⅵ層）が確認された。近くに旧河道が走行していた（阿子島功福島大学特任教授による指摘）と考えられる。また同層から、縄文時代の深鉢片20-3が出土している。

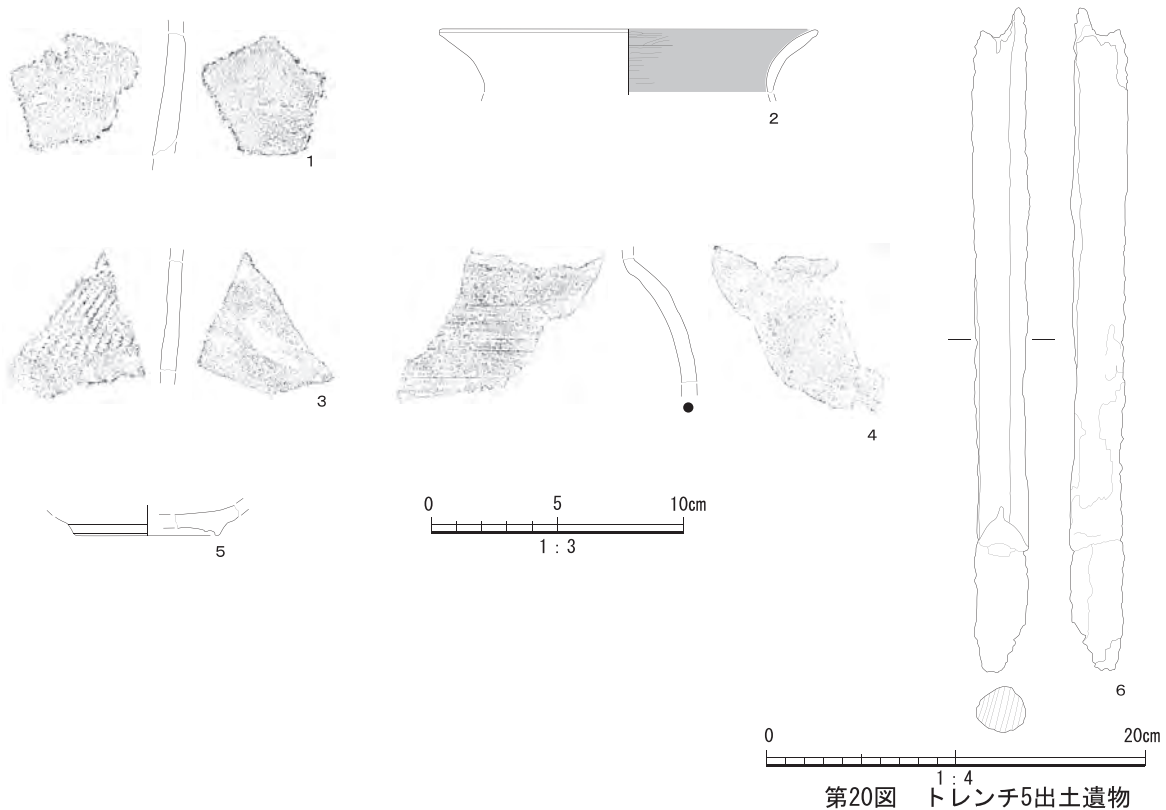
遺物は表土（Ⅰ～Ⅱ）、Ⅲ層中より出土した。図化したものについて以下に概説する。20-1は土師器甕で内外面にハケメ調整される。20-2は内面が黒色処理された土師器坏である。20-6は棒状の木製品である。その他、表土より古代の須恵器壺20-2、瀬戸美濃の皿20-5が出土した。

調査の結果、近現代の耕地整理はⅢ層上面を削平し、それより下層には及んでいないことを確認した。しかし、他の調査区で確認されている古墳時代の遺物包含層であるⅣa層が確認されず、Ⅲ層直下が古墳時代の遺構確認面（Ⅳb層）となっていることから、近世以降の耕作により、削平を受けているものと判断された。遺構については、SD1等の近世以降の所産と考えられる遺構以外検出されておらず、古墳時代に所属する遺物の出土量も少ないことから、この区域に遺跡範囲は広がらないものと判断される。

表6 トレンチ5出土遺物観察表

挿図	番号	図版	種別	器種	調査区	グリッド	層位	計測値 mm(最大)			調整・特徴			備考
								口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	内面	外面	底部	
20	1	18	土師器	甕	トレンチ5	D1-a0					ハケメ			
20	2	18	土師器	坏	トレンチ5 北半		Ⅲ	150	—	—	黒色ミガキ	不明		
20	3	18	縄文土器	深鉢	トレンチ5		Ⅵ	—	—	—	単節縄文			
20	4	18	須恵器	壺	トレンチ5 南半		Ⅰ～Ⅲ	—	—	—	ロクロ	ロクロ		
20	5	18	陶器	瀬戸美濃皿	トレンチ5			—	(56)	—	灰釉7.5Y5/3 灰オリーブ色	灰釉7.5Y5/3 灰オリーブ色	輪ドチ痕	大窯4段階、 16c後
20	6	18	木製品	棒状	トレンチ5	D0-a5	Ⅲ下	252	22	18	先端が炭化している			





第20図 トレンチ5出土遺物

IV まとめ

嶋遺跡は、山形県山形市の嶋地区に所在し、低湿地に立地する古墳時代後期の遺跡である。今回の調査は、嶋遺跡公園整備に伴う施設建設を踏まえ、嶋遺跡の価値を再検討するために実施した範囲確認調査で、遺跡範囲の西半部を対象に5カ所のトレンチを設定した。各トレンチを合計した調査面積は約400㎡、調査日数は延べ64日間である。

調査では、古墳時代の打込まれた柱材・板材などの遺構を検出し、史跡指定地西側にも建物域が広がることを確認した。出土した遺物は、土師器などの土器をはじめ、土製品、石製品、木製品など整理箱で約15箱を数える。同時に実施した緊急調査区では、同じく打込まれた柱材や木製品の集積区域などが検出され、遺跡北西部の様相が明らかになった。以下、これまでに嶋遺跡で行われた第1～11次調査で確認された遺構と遺物の概要について述べ、まとめにかえる。

出土遺構の様相

11次にわたる発掘調査で検出された遺構は、建物跡、遺物廃棄地点、木製品集積区域などである。遺跡範囲南東側の標高が高い部分に建物域、建物域の縁辺に遺物廃棄地点、遺跡範囲北西部の低地部分に木製品集積区域が検出された。また、遺跡範囲南西部では、遺物廃棄地点と隣接して炭化物の広がりが見出された。その周辺では、羽口、鉄滓、粘土塊などが出土している（第21図）。

これまでの調査で確認された建物跡のうち、規模が明確なものは7棟である。本遺跡では、古墳時代の集落に一般的な竪穴住居は未確認で、すべて打込式の柱で建物が構築されている。検出した打込柱は多数あるものの、建物を構成する柱を捉えることが難しく、建物跡の規模が判明しているものは

ごくわずかである。また、建物跡のうち、柱材に沈下予防の工夫が見られる建物や貼床がない総柱建物は、高床式建物と判断され、3棟を数える。上記以外の建物でも高床の建物跡はあると考えられるが、基本的に本遺跡の建物は、平地式建物が主体であったと推測される。

平地式建物では、貼床があるものとないものが認められる。貼床がある建物跡は、遺跡範囲の東側に多く分布しており、南西部には貼床がない建物が分布する。貼床がある平地式建物が分布する範囲は、遺構確認面標高で104.5～104.8m前後を測り、遺跡内でも標高が高く、居住するのに比較的適した（乾燥した）場所であったと考えられる。その範囲より北西（遺構確認面標高104.3～103.9m）及び南西側（遺構確認面標高104.3m前後）に貼床がない建物域が広がっている。貼床がない建物跡の柱材は、貼床がある建物跡の柱に比べて太い傾向がある。貼床は、軟弱かつ湿気の多い環境に対応するためのものと考えられ、その構造には、炭化物層、砂質粘土層、樹皮層を複数重ねたものと、樹皮層のみの簡易なものなど差異が認められる。建物内の機能・使い分けがなされたものと推測される。

第8次調査TT23で検出された平地式建物跡は、炭化物層、砂質粘土層、樹皮層を複数枚重ねて貼床を構築しており、その貼床規模は5m四方を測る。貼床中央部には2本の主柱と考えられる打込柱が検出されているため、この柱に屋根をかけたものと考えられる。また壁面付近には、簾状の有機物とそれを支えるためと思われる細い（直径5～10cm）柱（側柱）が確認されており、草壁と推測される。本遺跡の北方約8kmに位置する、天童市西沼田遺跡の平地式建物跡は「粘土を貼床の材料として使用し、土間として使用した」と推測され、一部は板敷（ベッド状遺構）であるなどの住居内構造が分かっている。本遺跡では、住居内構造は判然としないが、西沼田遺跡と同じ古墳時代後期の集落で、打込柱建物を主体に集落が構成されるなどの共通性が見られることから、同様の住居内構造であったと推測される。

高床式建物で規模が明確なものは、第3次調査第5地点で検出された2間×3間の総柱建物である。長辺3.9m、短辺3.34mを測り、長軸は磁北から西に20度傾いている。柱材は直径9.5～15cmを測る。建物の南・北辺に位置する柱材は、ほぞ穴を作り、横木を通し、さらに台木をおいて柱の沈下を防いでいる。西辺と南辺には簾状の有機物があり、それを支えるためと思われる細杭（径4.5cm）も検出されており、「床下周囲を簾状のもので囲んでいた」と推測される。またノギがついた炭化朶が周辺で多量に出土していることから、米（朶）倉と考えられている。地点は異なるが、長さが1.75m、足掛部が三段の梯子（完形品）が出土（第9地点）しており、その長さから推測される床高は1.0～1.3m程である。

建築構造を示すものとして、高床式建物の柱材に上記のような、ほぞ穴があるものなどが確認されているが、その他の具体的な構造を復原できる資料は少なく詳細は不明である。上部構造については、第5次調査第9地点の建築部材の出土状況から「^き又首や棟木にもや（屋中竹）等を掛け、その上にカヤや藁を葺く」構造が推定されている。壁などの構造は、平地式建物の一部で側柱と簾状の有機物が確認されているため、草壁と考えられるが、すべての建物に適用されたかは不明である。建物の打込柱材は、断面形状が円形・半円形（扇形）・方形などが認められ、芯持ち材である。先端を尖らせて打込んでいるものと柱を切断したまま（平坦）打込んだものとが認められ、その深さは、確認したもので最深約1.6mを測る。柱の地上立ち上がり部分の高さは、打込み深度の1.5～2倍であると想定（植松2004・天童市西沼田遺跡を参考）すれば約2.4～3.2m程度と推定される。打込材の樹種は、部分的にししか判明していないが、コナラ属が比較的多く、その他クリ、スギ、クワ、モモなど多様な樹種が選択

されている。柱材以外の建築部材についてもスギやクリ材が確認されている。

建物跡の年代は、出土土器等から古墳時代後期の6世紀後半と判断される。建物の時期的な変遷は、今後検討が必要であるが、柱材に柱上部が炭化しているものと炭化していないものが確認されているため、少なくとも2時期以上と判断される。TT23・26・27で検出された打込柱は炭化しており、出土土器も被熱している状況が確認され、焼失建物の可能性を付しておく。

土器廃棄地点

土器廃棄地点は、遺跡北辺（TT21中央部）、遺跡南西部（H22調査区）、遺跡北西部（H23調査区）の3地点で確認された。それぞれ建物域の縁辺に位置している。土器廃棄地点の出土土器は、ほぼ完形の非常に残りが良いものが多く、かつ被熱している。なかでも遺跡南西部の土器廃棄地点は、小型土器や大量の土器片のほか、子持勾玉や琥珀製切子玉など特徴的な遺物が出土し、祭祀に関わるものと考えられる。

木製品集積区域

遺跡の北西部で、南北に伸びる微高地状の高まり（遺構確認面標高103.5m）が検出され、その周囲の低地部分（遺構確認面標高103.4m）に木製品が集積する状況が確認された。木製品は、そのほとんどが加工されており、農具、紡織具、容器、馬具、武器具、建築部材など多種多様なものがある。わずかではあるが、打込材も検出されている。木製品は、同じ方向または直交する形で分布しており、全体的には低地に沿って方形に分布する傾向があるため、人為的な痕跡と判断される。その性格としては、木製品を再利用し、低地付近の軟弱地盤を補強及び安定させ、足場などとして利用したものと考えられる。同区域については、文化庁記念物課佐藤正知主任文化財調査官より「畦畔の土留めの可能性」、また東北芸術工科大学北野博司准教授より「足場が安定するよう木材を入れ込んだ可能性」（第三回検討会議）など、同様の指摘がされている。

生産域（水田域）

嶋遺跡の水田域の解明は、かねてからの課題であったが、今回の発掘調査においても水田畦畔や区画などの明確な遺構は確認できなかった。しかし、遺跡の南西・北西部においては、古墳時代の包含層であるIVa層からプラントオパールが検出されたことなどから、周辺で水田耕作が行われたものと考えられる。水田域の場所の特定はできていないが、これまでの調査成果から、遺跡北西部周辺や公園区域外に水田域が広がっていた可能性が考えられる。今年度の緊急発掘調査区にあたる遺跡北西部では、木製品を低地に集積している状況が確認されており、低地付近の軟弱地盤を足場として利用しやすいよう安定させたものと推測される。建物域と水田域を結ぶ境界部分として利用していた可能性も考えられる。水田域の解明については、遺跡範囲北側（トレンチ4・5）は近世以降の耕作により削平されていること、水流の影響を受けやすい環境であったこと（パリノ・サーヴェイ株の珪藻化石分析結果による）が指摘されているため、場所の特定は難しい状況にあるが、今後の検討課題である。

出土遺物の様相

嶋遺跡では、土器、木製品、土製品、石製品、石器、植物遺存体などの多彩な遺物が出土した。

土器は、土師器と須恵器が出土している。大半は土師器で、須恵器は少ない。土師器の器種には、坏、高坏、埴、鉢、壺、甕、甌、支脚、小型土器がある（第22図）。

坏では「丸底で、体部が屈曲し、口辺部が外反するもの」や「体～底部が半球形を呈し、そのまま

口縁部に至るもの]、「丸底で体部が屈曲し、下端に段を形成して、口辺部が外反するいわゆる有段丸底のもの]、「丸底で体部が屈曲し、口縁部が直立気味となるいわゆる須恵器模倣坏」などの器形が認められる。坏の主要器種は、有段丸底で口辺部が外傾・外反するもので、過半数以上を占める。坏・塚などの供膳形態は、外面口縁部がヨコナデ、体部から底部がケズリ、内面がミガキ・黒色処理されているものが多いが、一部、非黒色のものも認められる。また大型の内黒盤状坏も散見される。高坏は、有段丸底の坏に脚部がつくものが大半で、脚部の形態は、坏部底面からハの字状に開くものと中実の柱状部を有するものがある。脚部の長さにも長短ある。壺は、法量から小型と大型があり、丸底・球胴で直線的な口辺がつくいわゆる直口壺や頸部のしまりが強いもの、広口で頸部が短いものなどが認められる。外面調整は、口縁部がミガキ・ヨコナデ、体部がナデ・ハケメ・ミガキ調整されている。甕は、胴部の丸みが強い球胴に近いもの、長胴のものが認められる。外面調整は、口縁部がヨコナデ、体部にナデ・ハケメ・ミガキがみられる。台付甕も少量出土している。甗では、大型と小型がある。大型は無底式、小型は鉢形で、単孔式と多孔式のものがある。内外面の調整にはハケメ・ミガキが用いられている。古式須恵器は、坏蓋・坏身^{はそう}・甗などの器種がある。一番古いものはTK23式期の甗で、その他TK47式期の甗、MT15式期の坏蓋、坏身、甗が認められるが、土師器の年代より若干古い傾向がある。

本遺跡では、一部の建物を除き建物規模を明確に捉えられなかったことなどから、遺構ごとの出土土器の比較が非常に困難であるが、調査区ごとでみれば、TT27や4Eトレンチ出土の土師器坏は、TT23出土の同坏に比べ、「段の位置が下がり、丸底の底部径が小型化する」などのやや新しい特徴が見られる。今後より詳細な検討も必要であるが、これらの遺物は、形態や組成などから住社式～栗園式古相段階の概ね6世紀後半にあてられる。類例としては、中山町三軒屋物見台遺跡の物見台V群土器新段階やVI群土器があげられる。

木製品は、農具、紡織具、容器、馬具、武器具、建築部材、不明品などに分類される。これらは土器と同じく概ね古墳時代後期の年代が考えられる。(第23図)

農具では、土地を耕す耕起具、作物の収穫や脱穀・製粉をする収穫具、農作業時に使われる田下駄がある。耕起具では鍬や鋤が出土している。鍬では、直柄狭鍬やナスビ形曲柄平鍬が確認されており、刃先にはU字形鉄刃装着のための作り出しが見られるものがある。膝柄と考えられるものも出土している。収穫具では、縦杵や横槌が建物跡周辺から出土している。縦杵は、搗部と握部の境が明瞭なものややや不明瞭なものがあり、長さは61～91.5cmと幅がある。その他、方形杵付き田下駄が出土している。杵木が多いが、第4次調査第8地点では杵木、横木、田下駄が揃って復原可能な状態で出土している。

紡織具では、織機の道具である開口具、緯越具、緯打具、布巻具、経巻具、糸紡ぎ用の杵、舞羽などが出土した。編布用の板も出土している。

容器は、刳物・曲物が出土した。刳物では楕円形をした槽があり、4脚付と無脚のものが認められる。曲物は、樹皮で製作されたものも確認された。

馬具では、鐙（壺鐙・輪鐙）や鞍橋（後輪）が出土した。壺鐙（未成品）は第9地点、鞍橋は第1次調査第2地点より出土した。鞍橋は全面に漆が塗られており、一部に朱も確認されたと報告されている。

武器具では、弓や矢がある。弓では漆塗りの、ゆはずの加工をもつ全長90cmの完形品がある。矢は

木鏃、矢柄と考えられる棒状の木製品が出土している。

建築部材では、梯子や鼠返し、板壁、柱材、扉材の可能性のあるものなどが出土している。梯子は2点出土しており、第9地点出土の梯子は、完形品で長さ175cmを測り、平坦な足掛部が3段作られている。鼠返しは2点出土した。第5地点出土のものは、長さ50cmの方形の板で、中央に径7cmの円形の孔を穿つ。もう1点は、長さ46cmで、径8cmの孔が穿たれている。このことから、鼠返しを持つ高床式建物の柱材の太さは、少なくとも径7～8cm程度であったと考えられる。

装身具では、堅櫛が建物跡周辺などから計6点出土している。漆塗り結歯式堅櫛で、イネ科もしくはタケ亜科の樹種で作られている。棟部のみの出土が多いが、第8地点では完形品が出土した。歯部は24ないし30本を数え、全長11.8cmを測る。その他にも用途不明の木製品が多数ある。また、木製品の未成品と思われるものがトレンチ3で1点出土している。本遺跡では、壺鐙の未成品や槽の未成品も出土しており、木製品の加工が行われていた可能性がある。

土製品では、勾玉、管玉、小玉、玦状耳飾、土鈴、土錘、紡輪、羽口、粘土塊が出土した。紡輪は、土製・石製ともに断面形状が円錐台形で中央に径6～8mmの孔をもつ。羽口は、建物域縁辺部、遺跡南西部で出土している。特に遺跡南西部では、炭化物の広がりが見出された周辺から出土し、鍛冶関連の作業が行われていたものと推測される。粘土塊は、遺跡南西部より出土した。ワラ状の植物質の痕跡が残る、棒状や円形など不定形のもの（2～4cm大）で、土師器焼成遺構で出土するものと類似している。

石製品では、子持勾玉、琥珀製切子玉、石製模造品、管玉、小玉、有孔石製品、円盤状石製品、紡輪、砥石が出土した。子持勾玉は県内9例目となる。背面に4個、腹面に1個、両側面に各2個の小玉が配されている。琥珀製の玉は、西沼田遺跡で出土しているが切子玉としては県内初出である。石製模造品は、勾玉形2点、円板形（楕円形も含む）3点が確認される。本遺跡出土の石製遺物は、9割以上が流紋岩（大友幸子山形大学教授による鑑定）であった。トレンチ1からは、円盤状石製品の材質と同じ円礫や亜円礫の流紋岩が数点出土している。「流紋岩は、山形市南西部の隔間場付近や東部の山で一般的な石材で、須川中・下流域、本沢川流域、白川や立谷川流域などの河川でも採取できる」ため、手に入りやすい石材と判断される。石製品を製作した可能性も考えられるが、未成品などの製作途中と分かるような遺物は出土していない。その他、石器では磨石や打製石器（スクレーパー）が少量出土しているが、当該期のものかは判然としない。

金属製品は、鉄鏃の破片が出土したとされているが、詳細は不明である。木製鏃に鉄刃装着のための作りだしがあることや鍛冶関連の遺物が出土していることから、使用されたことはほぼ間違いない。

植物遺存体は、モモ、スモモ、アンズ、ウメの核、クルミ、トチ、クリ、アサ、イネ、アワ、ウリ科植物など多様な種類が確認された（古代の森研究舎による種実同定）。モモやアンズ、オニグルミは特に出土量が多い。ウリ科植物は3種（カボチャ属、メロン仲間、ヒョウタン仲間）の種子が出土しているが、量が少なく食用としていたものかどうか判然としない。また1～6次調査区では、アサの種子が大量（数リットル）に出土したと報告されている。

他に、ガラス製の小玉、骨製の装髪具や用途不明品、赤色顔料（朱）の出土がある。

集落構成と遺跡の特徴

最後に、上記の遺構・遺物の様相と理化学分析の成果などを整理し、嶋遺跡の集落構成や特徴をま

とめる。本遺跡は、古墳時代に一般的な竪穴住居はなく、平地式建物や高床式建物で構成される集落である。これまでの調査により、遺跡範囲南半の微高地（遺構確認面標高約104.7m）を中心に平地式建物跡や高床式建物などの建物域が分布し、建物域の縁辺部には遺物廃棄地点、低地にあたる北西部（遺構確認面標高103.8～103.4m）には地盤の安定のため木製品を集積した区域があるなど、集落内の建物域とその縁辺部の利用状況が見えてきた。盛土による地盤沈下を考慮しなければならないが、遺跡内でも、最大約1mの高低差が認められる。

遺構の時期区分と変遷などの課題は残るが、前述の遺跡範囲南半に確認される建物域は、東西で様相が異なる。東側の、標高が一番高い微高地には貼床がある平地式建物が多く、北西側に高床式建物や貼床がない平地式建物、南西側に貼床がない平地式建物が分布している。これらは、集落内の建物群の性格や機能の違いを表しているものと考えられる。

生産域（水田域）は特定されていないが、これまでの調査及び理化学分析等の結果から、公園区域外にあった可能性が考えられる。

一方、出土遺物からは、稲作、布生産、鍛冶など集落内で様々な手工業生産・製作を行っていたことが推測される。また、武器具や馬具、子持勾玉や琥珀製切子玉など古墳の副葬品とも共通するような特殊な遺物の出土は、古墳時代後期のこの地域の拠点的な集落であったことを示すものである。

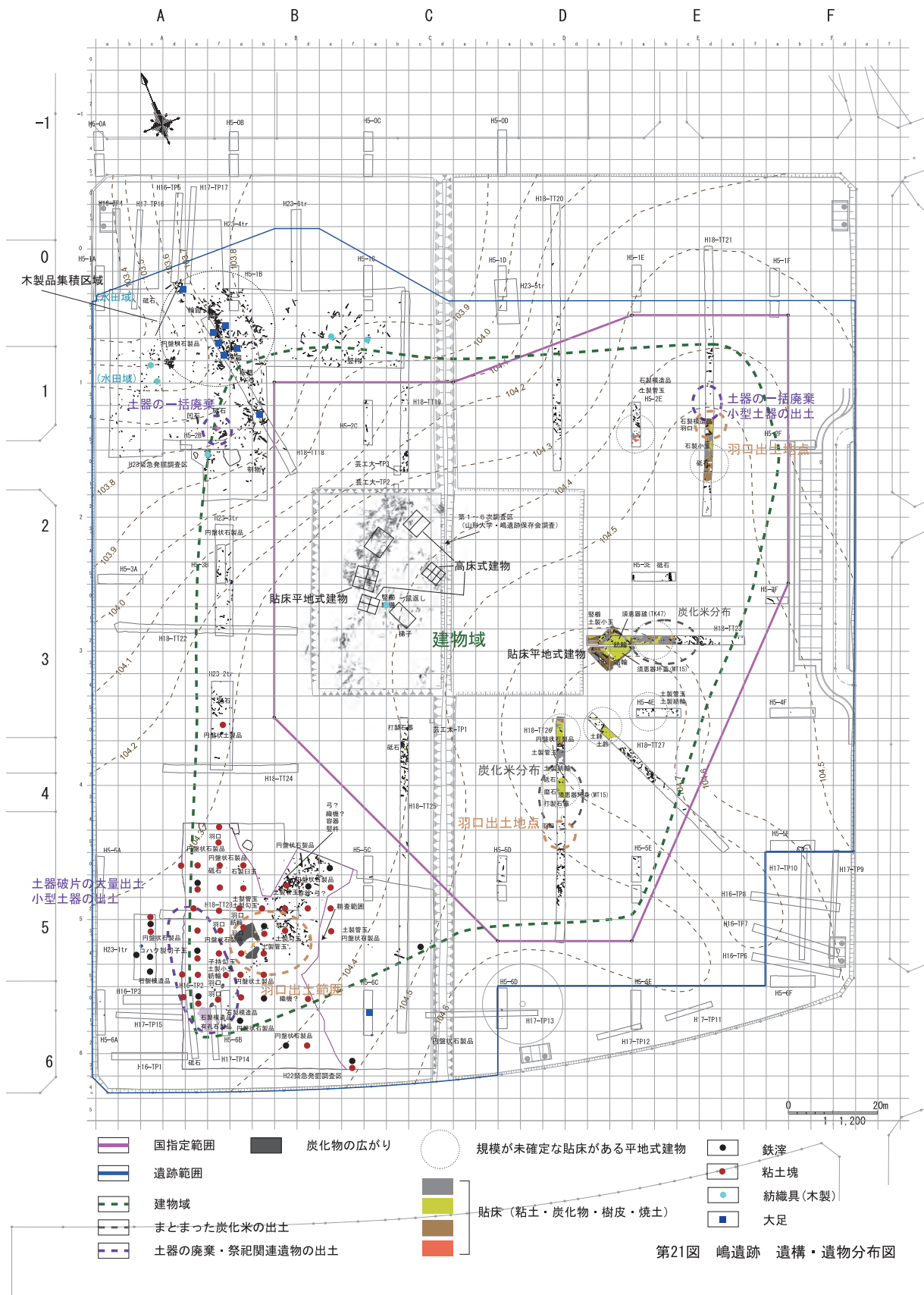
本遺跡の堆積土壌は、基本的に水中堆積である（阿子島1994）が、古墳時代の土層を挟む上下層は、両者ともにイネ科植物が繁茂する沼沢地のような環境であったことを示す分析結果が得られている。近世以降の水田耕作土であるⅢ層からは、古代、中世～近世の遺物が出土するが、居住空間があったことを示す遺構は確認されていない。また、中世や近世の年代測定結果を持つアシ様植物根の出土は、当該期の本遺跡周辺が湿地であったことを裏付けており、その状態は、近世以降に水田として利用されるまで続いたと考えられる。このような、一般的に建物を構築するのに適さない低湿地に集落を構えた理由としては、西沼田遺跡と同様、水田耕作に欠かせない水の管理が容易であることなど、水田により近い場所を優先・選択した結果と考えられる。なお、この低地を選択したことにより、多くの木製品や有機物が、高い水位に現代まで保全され、東日本でも数少ない古墳時代後期の多様な生活具の様相が明らかになったといえる。嶋遺跡の集落の終焉については、推測の域を出ないが、集落の機能時は比較的乾燥していたが、徐々に水位があがり居住に適さなくなったことにより、周辺へ移転したものと推測される。その時期は、出土土器の年代から6世紀末～7世紀初め頃と推測されるが、本地域では、7世紀代に所属する集落遺跡数が少なく、いまだ不明な点が多い。

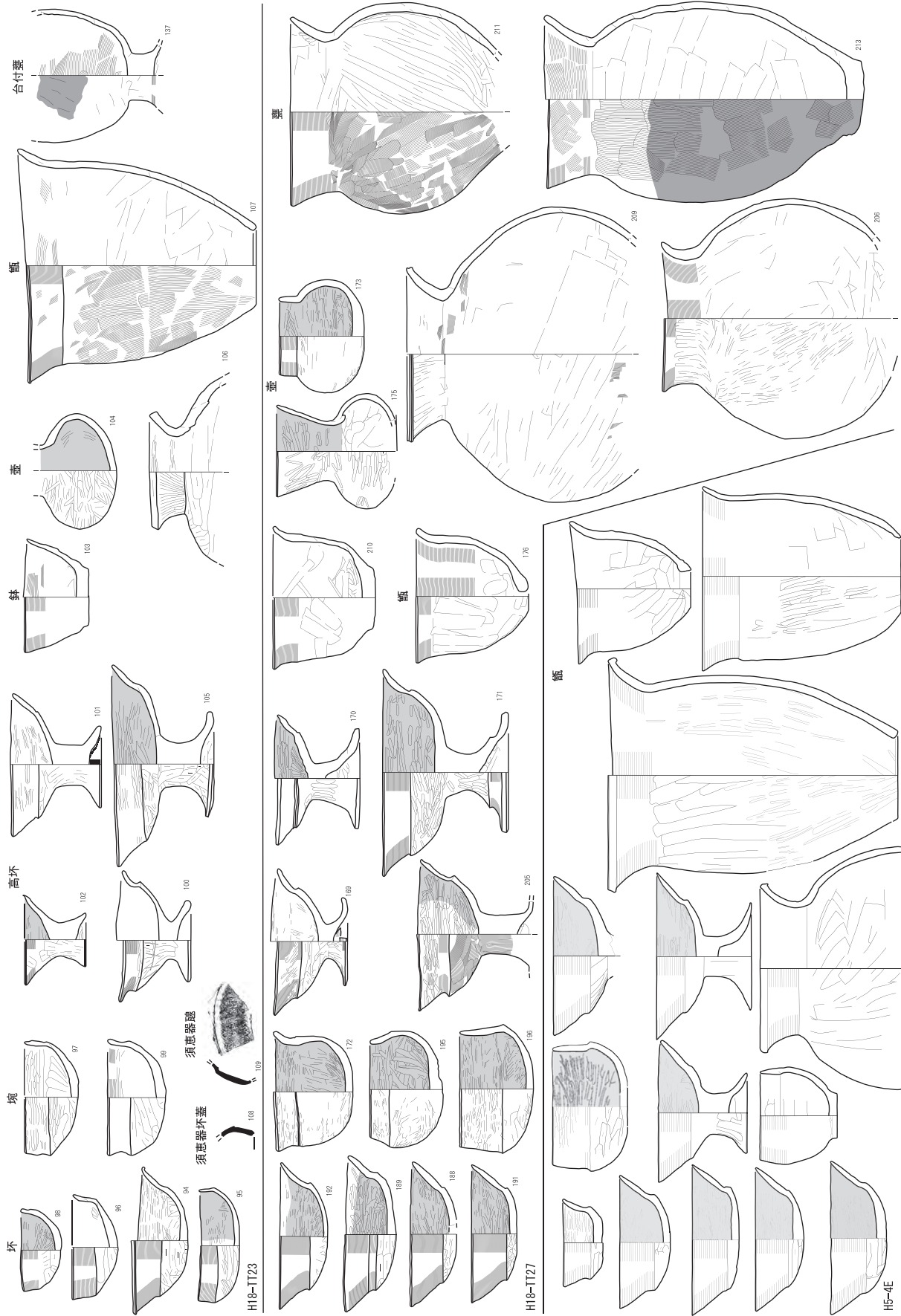
〈引用・参考文献〉

- 柏倉亮吉ほか：1968『嶋遺跡』山形市史別巻1 山形市
 佐藤庄一ほか：1986『西沼田遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第101集
 阿部明彦：1986『三軒屋物見台遺跡発掘調査報告書（2）』山形県埋蔵文化財調査報告書第107集
 阿子島功 茨城光裕 武田和宏：1994『嶋遺跡発掘調査概報』山形市教育委員会
 須賀井新人ほか：1994『今塚遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第7集
 押野一貴：2002『天童市西沼田遺跡－周辺発掘調査報告書』天童市埋蔵文化財調査報告書第28集
 伊藤邦弘：2003『梅野木前1遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第160集

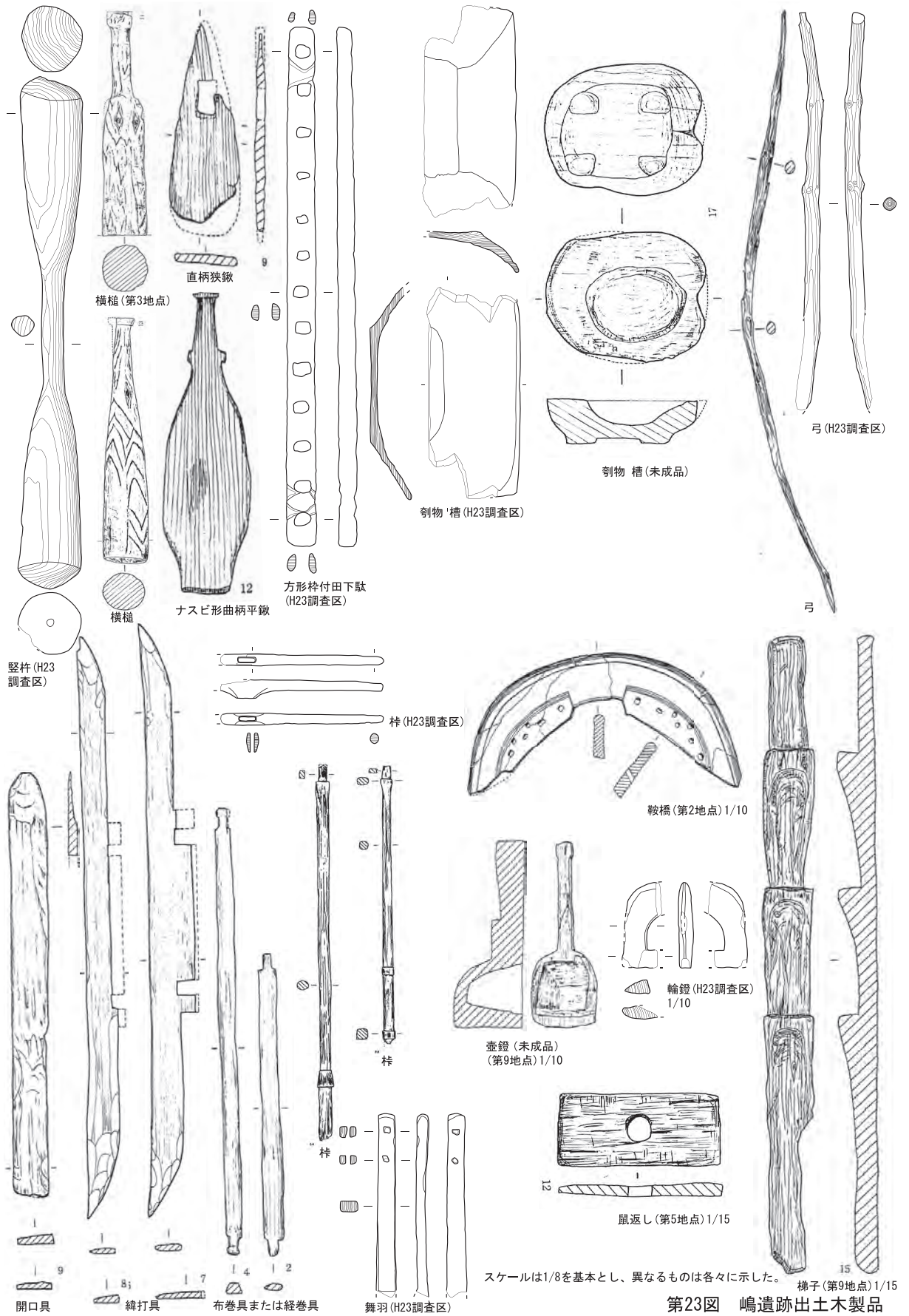
IV まとめ

- 押野一貴ほか：2003『天童市西沼田遺跡 第Ⅰ次発掘調査報告書』天童市埋蔵文化財調査報告書第29集
- 植松暁彦：2004「長表遺跡の古墳時代前期の棟持柱建物跡について」『研究紀要』第2号 山形県埋蔵文化財センター
- 高桑弘美：2004『服部藤治屋敷遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第119集
- 高橋敏：2004『馬洗場B遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第123集
- 川崎利夫編：2004『出羽の古墳時代』奥羽研究叢書8 古志書院
- 武田和宏：2004『河原田遺跡・梅野木前2遺跡発掘調査報告書』山形県山形市埋蔵文化財調査報告書第22集
- 押野一貴ほか：2006『天童市西沼田遺跡－第Ⅱ次発掘調査報告書』天童市埋蔵文化財調査報告書第32集
- 辻秀人ほか：2007『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学文学部
- 國井修：2008『嶋遺跡範囲確認調査報告書』山形県山形市埋蔵文化財調査報告書第29集
- 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館：2011企画展図録『やまがたの古墳時代』
- 山澤護：2011「西沼田遺跡の集落構成試案」『地域史研究会』36山形県地域史研究協議会





第22図 トレンチ出土土器(S=1/6)



スケールは1/8を基本とし、異なるものは各々に示した。

第23図 嶋遺跡出土木製品

報告書抄録

ふりがな	しまいせきはんいかくにんちょうさほうこくしょ 〈そうかつへん〉							
書名	嶋遺跡範囲確認調査報告書〈総括編〉							
副書名								
巻次								
シリーズ名	山形県山形市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第34集							
編著者名	植松薫 樋口修							
編集機関	山形市教育委員会							
所在地	〒990-8540 山形県山形市旅籠町二丁目3番25号 TEL 023-641-1212							
発行年月日	2012年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しま 嶋	やまがたけん 山形県 やまがたし 山形市 しまきたにちろうめ 嶋北二丁目	6201	4	38度 16分 53秒	140度 19分 20秒	20110322 ～ 20110630	400m ²	重要遺跡 範囲確認
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
嶋	集落跡	古墳時代後期	建物跡（打込式柱）	土師器（坏・高坏・ 埴・甑・壺・甕） 土製品（円盤状土 製品・粘土塊） 石製品（切子玉・ 模造品・円盤状石 製品） 木製品（建築部材・ 用途不明品）				
						総出土箱数15箱		
要約	<p>嶋遺跡は、山形県山形市の馬見ヶ崎川扇状地前縁部に立地する古墳時代後期（6世紀後半）の集落跡である。今回の調査は、嶋遺跡公園内への施設建設を踏まえ、嶋遺跡の集落構造を再検討するために実施したもので、遺跡範囲の西半部を対象に計5カ所のトレンチを設定した。調査では、史跡指定地の西側にも打込式の柱や板材が検出され、建物域がさらに西側に広がることが分かった。遺物では、古墳時代の土師器などの土器や木製品のほか、琥珀製の切子玉が出土している。同時に行われた緊急調査区では、同じく打込式の柱や板材、遺物廃棄地点、木製品集積区域などが検出されており、これまで嶋遺跡で行われた11次にわたる発掘調査により、嶋遺跡の集落の建物域やその縁辺の状況がより明らかになった。</p>							

圖 版



嶋遺跡全景（西から）



嶋遺跡全景（南西から）



嶋遺跡全景（北東から）



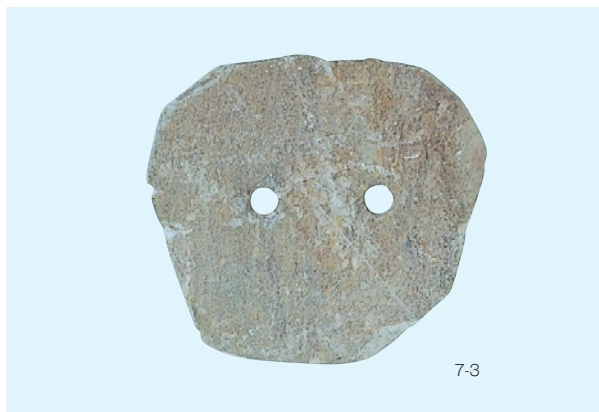
7-9



7-3



7-9



7-3



トレンチ1 SN4検出状況(南から)



トレンチ1 完掘状況(南から)



トレンチ1 完掘状況(北から)



トレンチ1 東壁断面(西から)



トレンチ1 西壁断面(東から)



トレンチ1 琥珀製切子玉出土状況(西から)



トレンチ1 面整理(南から)



トレンチ1 排水状況(北から)

図版4



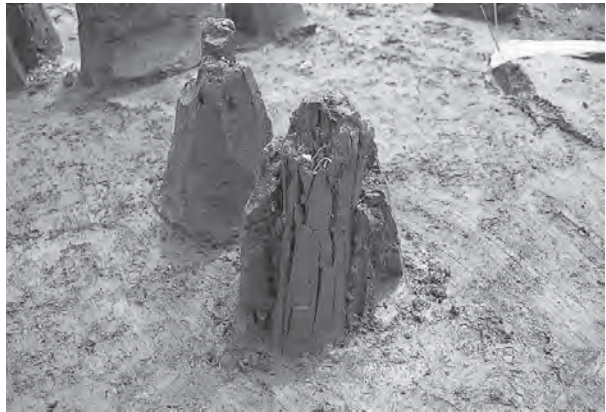
トレンチ2 全景 (北から)



トレンチ2 木製品出土状況 (西から)



トレンチ2 打込柱検出状況 (西から)



トレンチ2 打込柱 (W4) 検出状況 (北から)



トレンチ2 打込柱検出状況 (西から)



トレンチ2 板材 (W148) 検出状況 (北から)



トレンチ2 木製品 (11-5) 出土状況 (南西から)



トレンチ2 木製品 (10-3) 出土状況 (北東から)



トレンチ3 表土除去状況（北から）



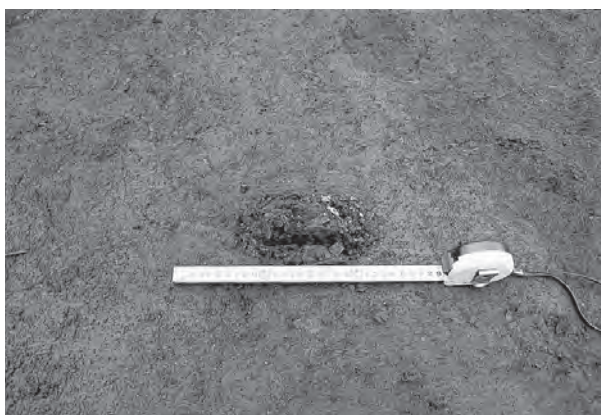
トレンチ3 全景（北から）



トレンチ3 東壁断面（西から）



トレンチ3 東壁断面（南西から）



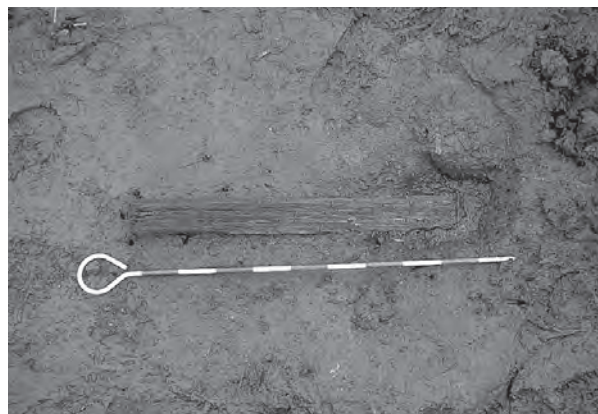
トレンチ3 打込柱（W200）出土状況（東から）



トレンチ3 木製品出土状況（西から）



トレンチ3 木製品出土状況（南東から）



トレンチ3 木製品（15-1）出土状況（西から）



トレンチ4 全景 (南から)



トレンチ4 a 面整理 (南東から)



トレンチ4 東側法面層序 (西から)



トレンチ4 a 完掘状況 (北から)



トレンチ4 b 調査前 (西から)



トレンチ4 b 全景 (西から)



トレンチ4 b 木片出土状況 (西から)



トレンチ4 南壁断面 (北から)



トレンチ5 表土除去 (北東から)



トレンチ5 東側法面層序 (西から)



トレンチ5 全景 (北から)



トレンチ5 SD1検出状況 (南から)



トレンチ5 作業風景 (南から)



トレンチ5 SD1断面 (南東から)



トレンチ5 全景 (南から)



トレンチ5 東壁断面 (北西から)



埋戻し前（南西から）



除草



現況寸法計測



手掘り部 深さ確認



トレンチ1 手掘り高さまでの埋戻し



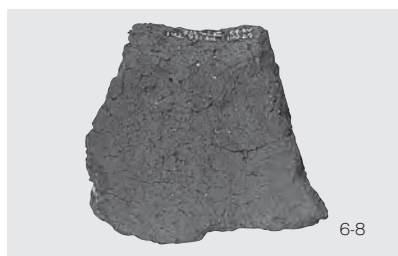
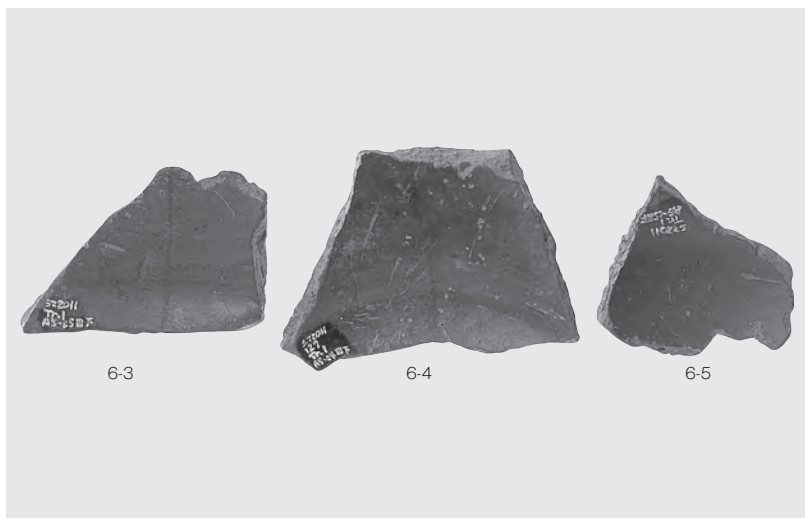
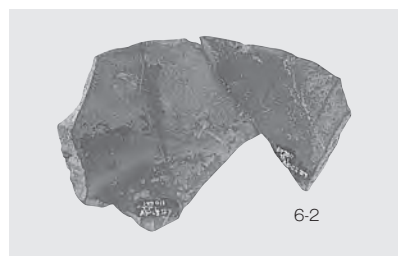
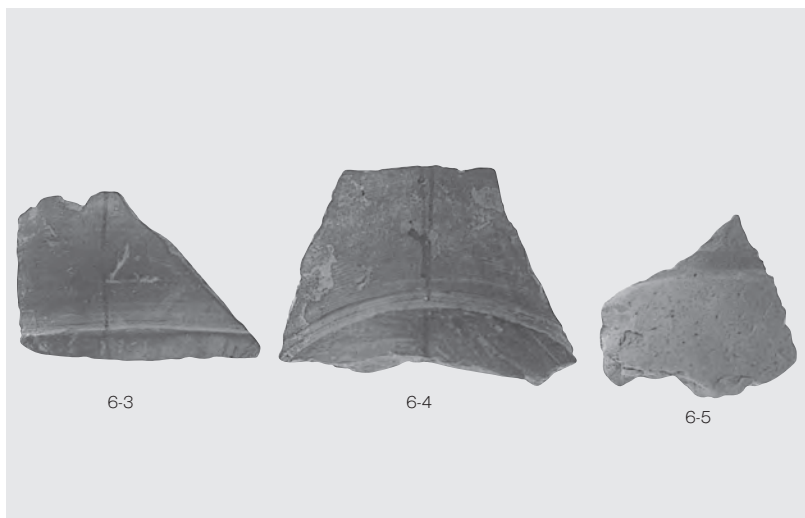
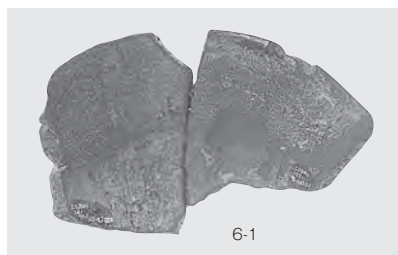
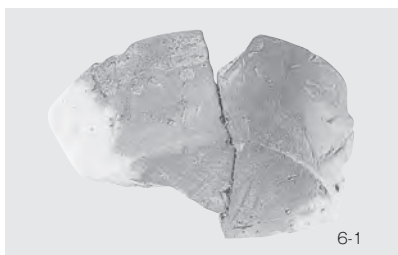
土壌分離シートの敷設

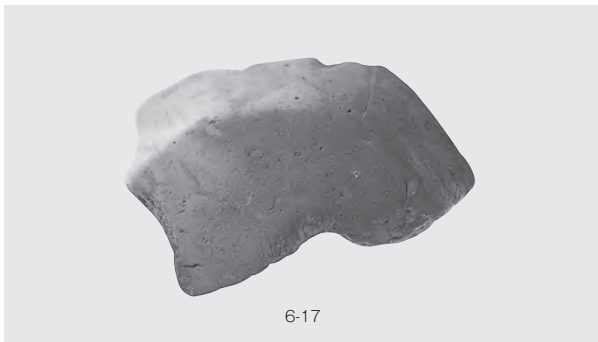
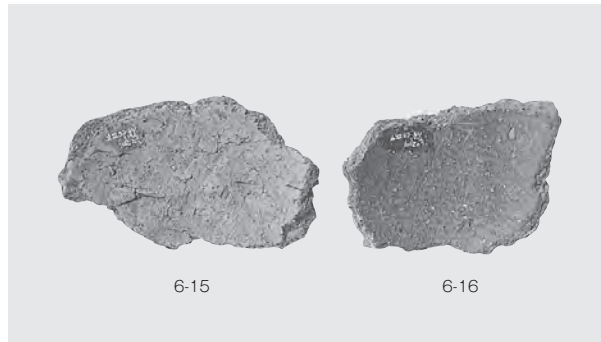
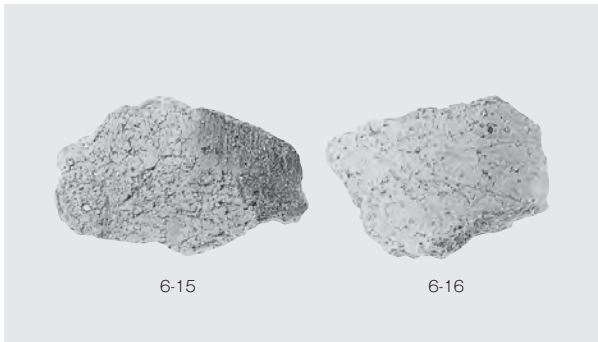
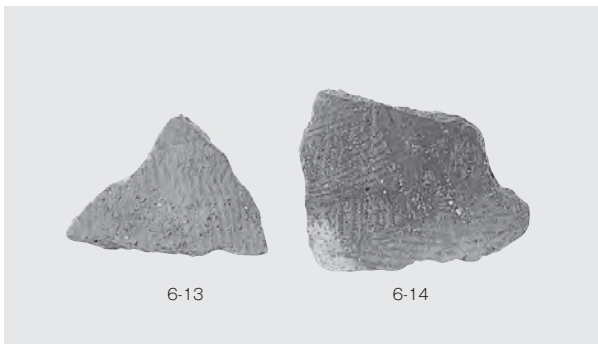


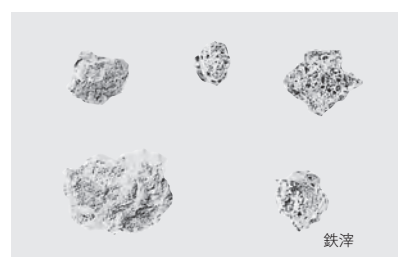
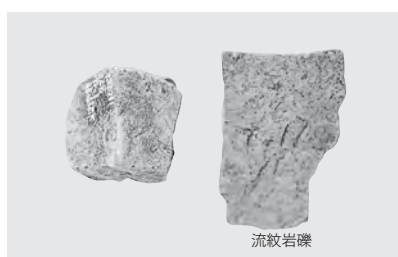
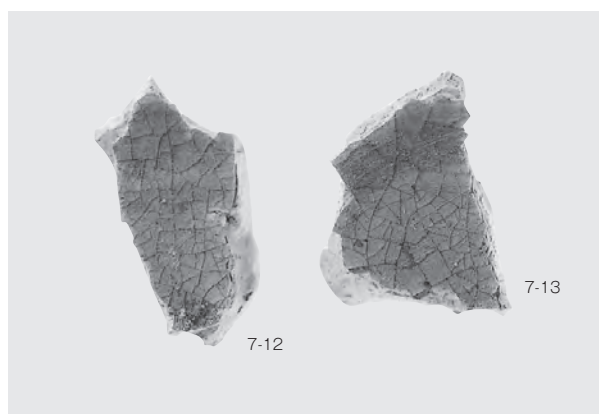
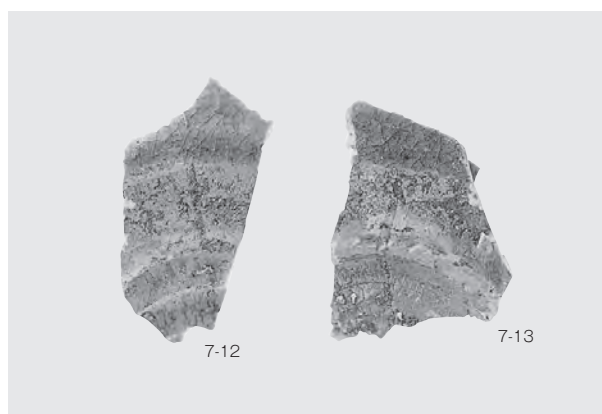
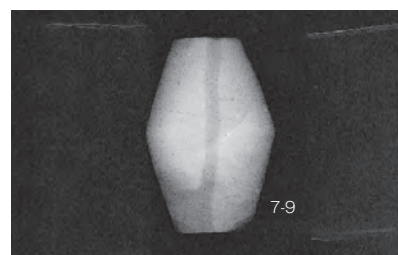
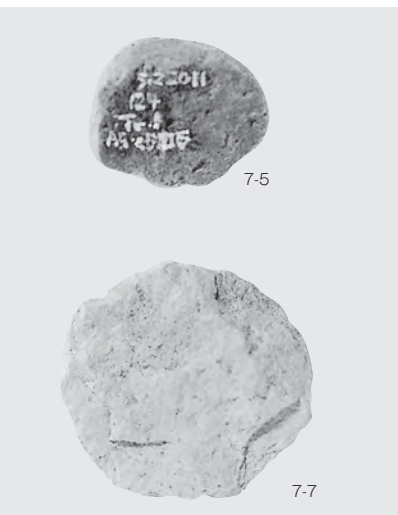
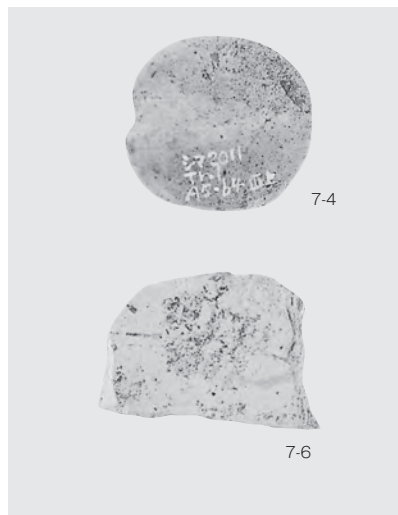
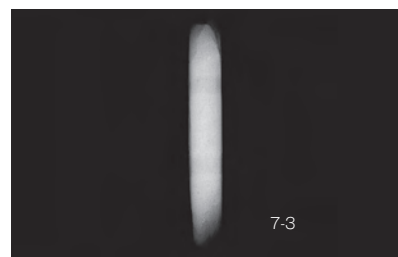
土壌分離シート敷設状況

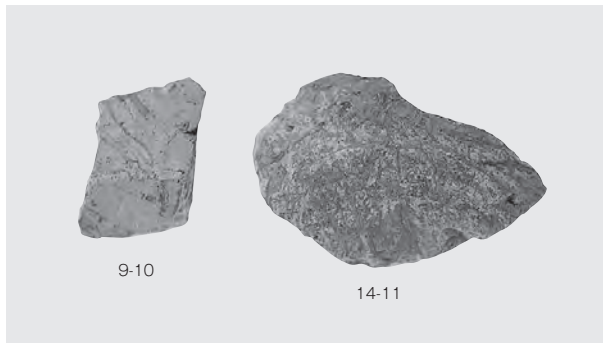
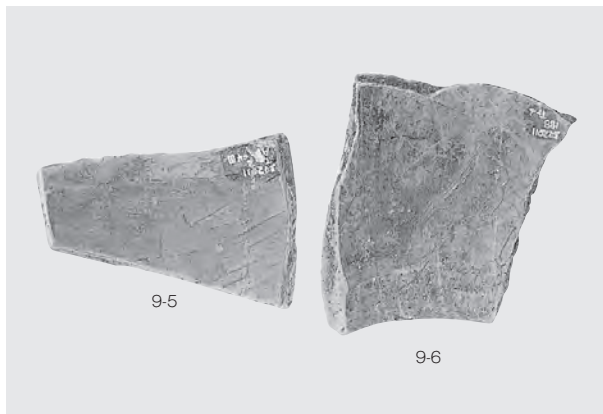
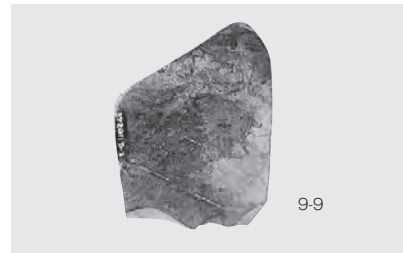
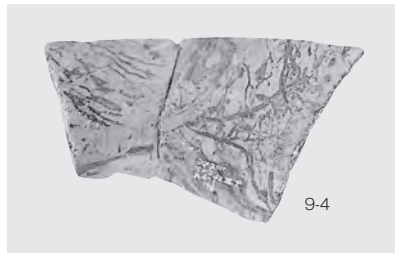
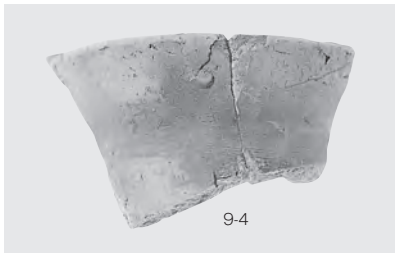
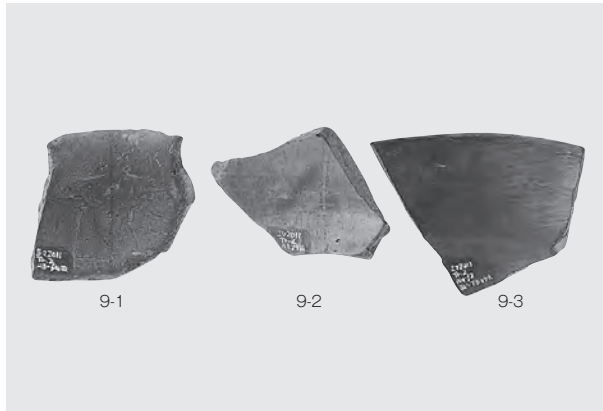
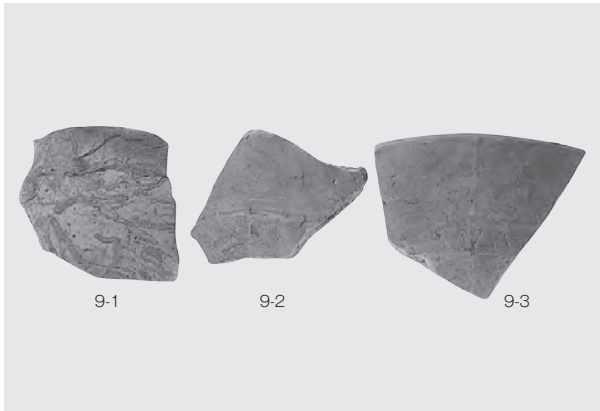


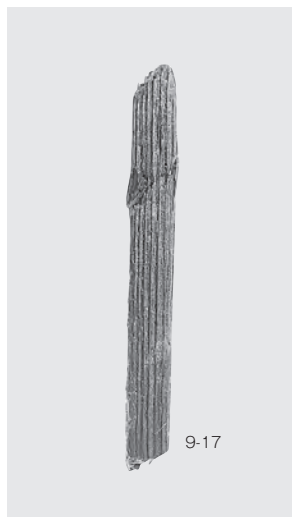
さらに現地表まで埋戻し



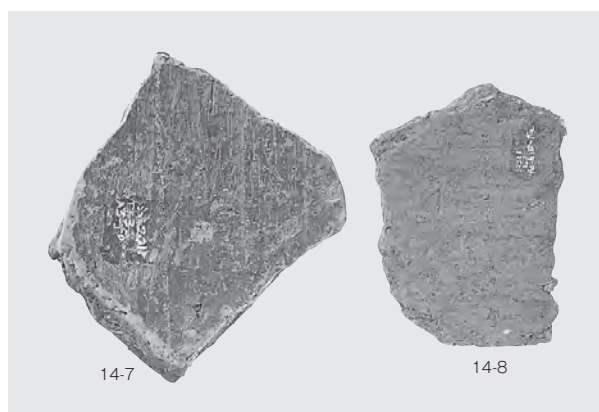
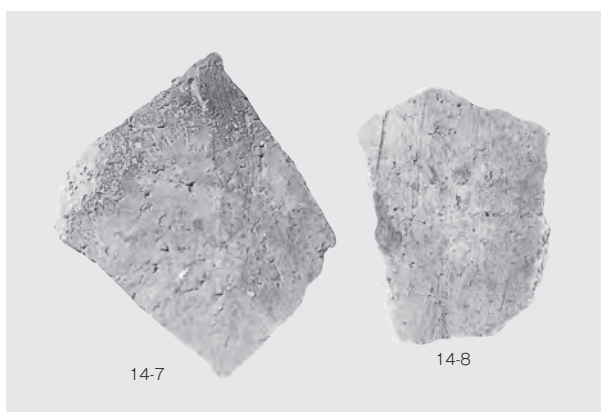
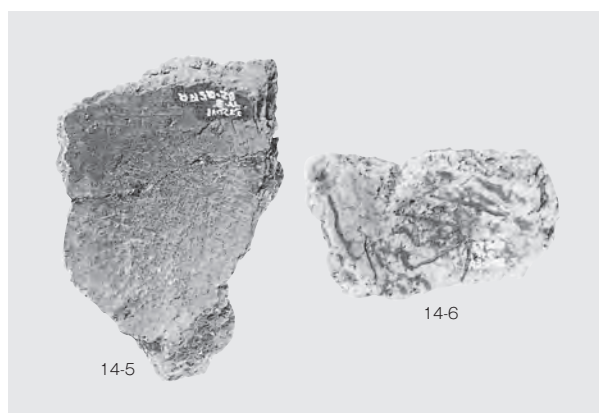
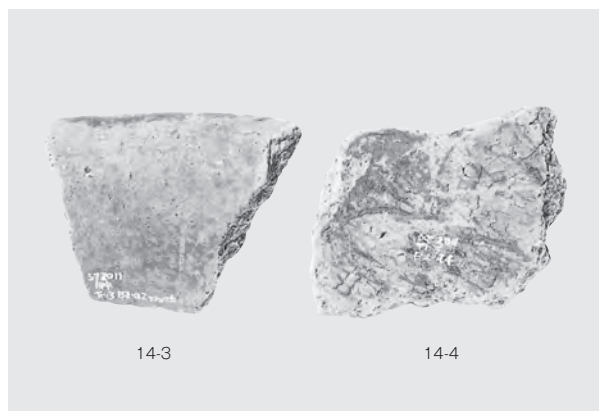
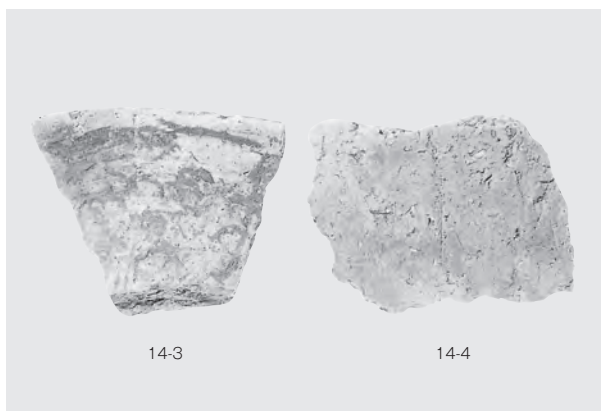
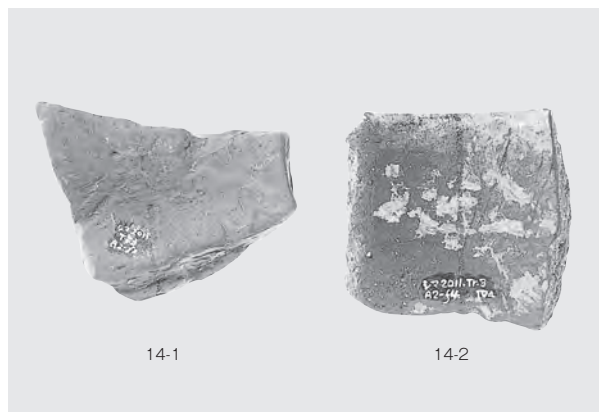
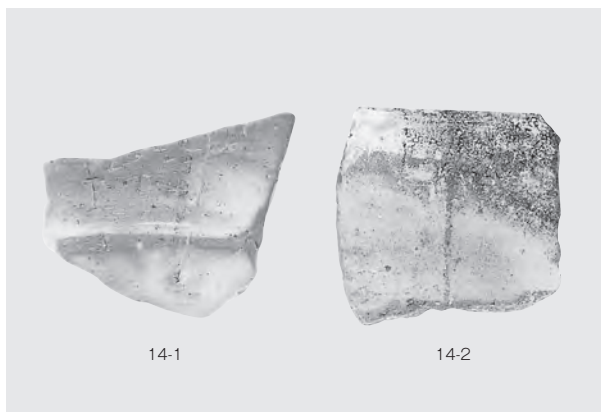


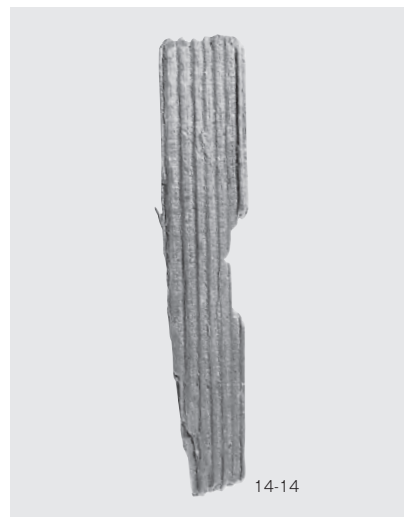
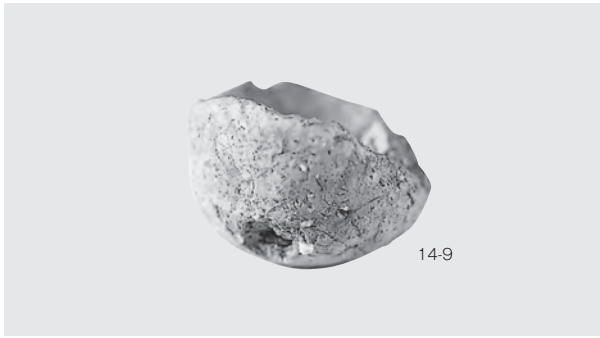


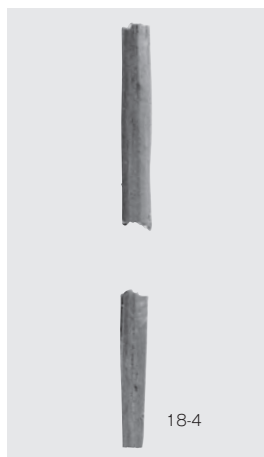
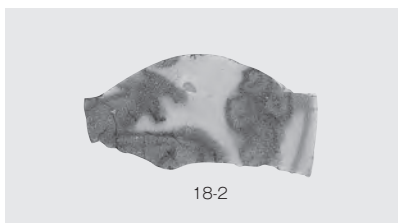
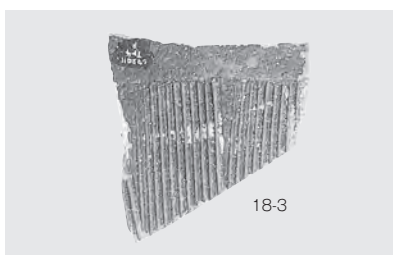


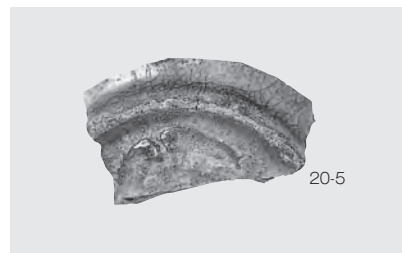
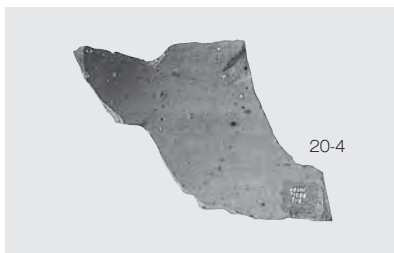
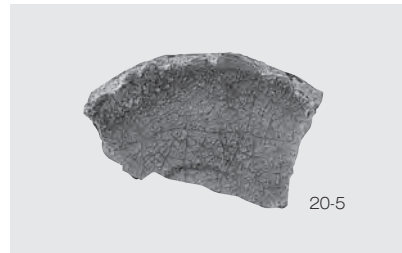
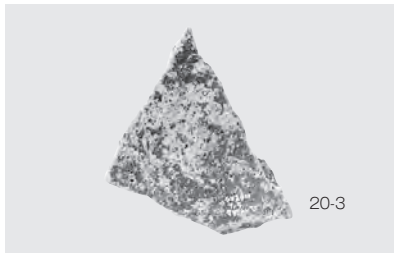
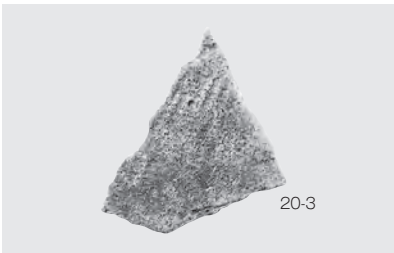
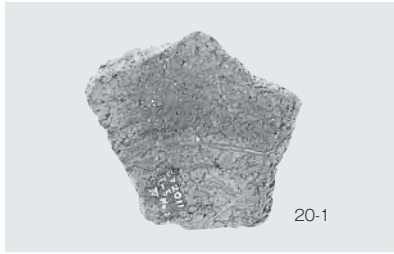
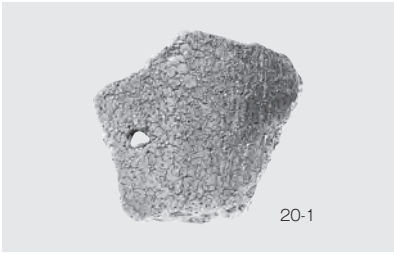
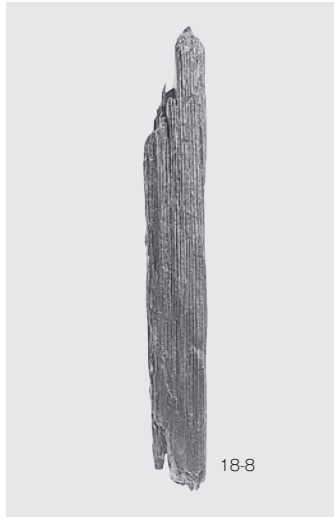








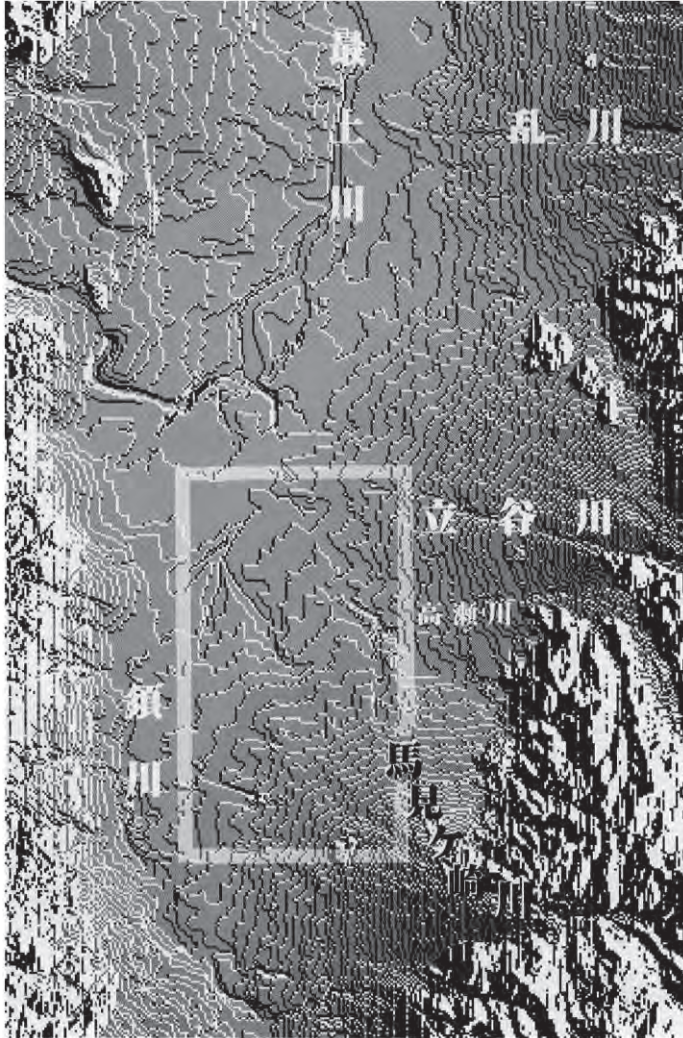




付 編

嶋遺跡の立地環境

阿子島 功
福島大学



第1図 2m間隔等高線による山形盆地底の微地形
(図中のくくりは 図2の範囲を示す。)

1. 山形盆地のなかの嶋遺跡の位置

嶋遺跡は山形盆地南部中央の軟弱な湿地帯に位置している。

山形盆地は東側の脊梁山地と西側の白鷹山地との間の東西幅が約10km程の盆地であり、南から北へ須川が、盆地中央の西側から中央を北へ最上川が貫流している。東西両側の山地からいくつもの支流が最上川や須川にむかって流れており、それぞれが扇状地を形成している(第1図)。そのため、山形盆地の盆地底の地形は、東から西へ、馬見ヶ崎川扇状地や立谷川扇状地などの大規模な扇状地群、後背湿地、須川の自然堤防帯、西側山地(白鷹山地)からの小規模な扇状地群などからできている。

嶋遺跡は馬見ヶ崎川の扇状地の北側外縁の湿地帯にある。

馬見ヶ崎川扇状地末端は広げた手指の形をしており、指の部分詳しくみると河道とその両岸の自然堤防からできている(第1図)。馬見ヶ崎川下流の山形市鈴川～成安の現在の河道(白川と呼ばれている)は、最近の約350年間の河道であり、その自然

堤防帯は最も幅広く連続しており、幅は約500～700mである。下流で高瀬川が合流している。

2. 馬見ヶ崎川旧河道と嶋遺跡の位置

馬見ヶ崎川扇状地の外縁部には、現在河道と旧河道が放射状に伸びており、第2図の範囲(第1図のなかの矩形)のなかに5条ほどが認められる。これらの河道にそって、自然堤防が分布している。

自然堤防は連続のよい畑あるいは切れ切れの畑の列として認識できる。扇状地外縁部の約10,000年前の地面の深度は10～5mであり、現在の地表面の微起伏(河道底と自然堤防との比高は最大約2m)は、おおよそ2,000年前以降に形成されたと考えることができる(阿子島, 1989ほか)。5条の河道帯とそれに沿って立地している主な遺跡は次のとおりであり、嶋遺跡は河道帯2に関わっている(第2図中に遺跡の頭文字を示す。時代を次のように略記する; J:縄文時代 Y:弥生時代 K:古墳時代 H:



第2図 馬見ヶ崎川扇状地の外縁部の旧河道1～4に沿う自然堤防と遺跡の分布
(塗りつぶしが自然堤防を示す。基図は明治34(1901)年測の1:20,000地形図である。縮小)

遺跡位置をその頭文字で示す。嶋：嶋遺跡 梅1：梅野木前1遺跡 ほか 文中に対応を示す。

平安時代 KM：鎌倉時代 E：江戸時代) (阿子島, 2001, 02, 04)。

河道帯1. 古墳時代－平安時代の河道(今塚－服部河道)馬洗場B遺跡(K, H)、藤治屋敷・服部遺跡(K, H)、今塚遺跡(K)では古墳時代の河道が平安時代までにおそらく同一時期の洪水堆積層によって河道が埋没している。

河道帯2. 古墳時代－平安時代の河道(嶋－中野河道)嶋遺跡(K)、梅野木前1遺跡(K, H)。

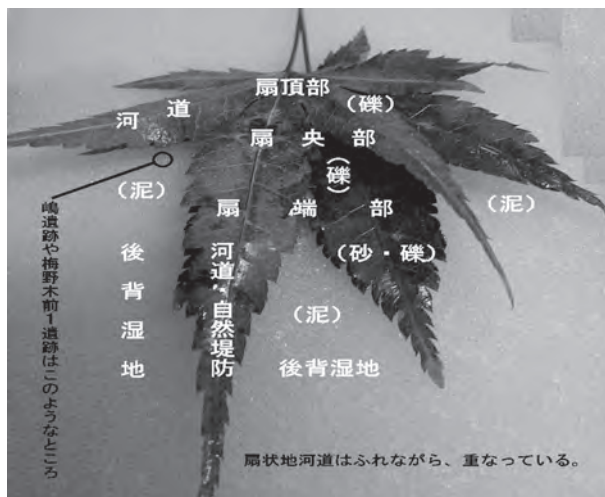
河道帯3'. 志戸田河道 3から分枝する。志戸田縄遺跡(K, H, KM)では4C頃の河道が埋没しその上に10C頃遺構がある。

河道帯3. 江戸時代以前の河道(江俣－陣場－吉野宿河道)17C中頃につけかえられるまでの本流である。

河道帯4. 現河道(鈴川－成安河道)最近約350年間の河道である。自然堤防は最も幅広く、連続性がよい。向河原遺跡(Y, H)では下流南岸の自然堤防帯にあるが埋没河道の砂礫層を切っている弥生時代晩期の住居跡と古墳時代・平安時代の集落が検出された(山形県埋文センター, 2000, 03)から、古い河道が江戸時代に再現されたものである。

これらに共通した特徴としては、河道の幅が10m前後、深さ約2m、両岸の自然堤防を含めた幅は約200m程度である。河道の幅は現在の河道幅とも一致し、扇端部のJR山形駅西側の城南1丁目・双葉町遺跡(J, K, H, KM, E)、扇央の山形西高敷地内遺跡(J, Y, K, H, E)で検出された埋没河道とも共通している。

河道と自然堤防には粗粒堆積物が、後背湿地には細粒・泥質堆積物が分布していて、その立体構造を模式化して示せば第3図のようになる。



第3図 馬見ヶ崎川扇状地の粗粒堆積物の分布の模式図
(阿子島, 2008)

3. 嶋遺跡と梅野木前1遺跡の微地形

嶋遺跡、梅野木前1遺跡、梅野木前2遺跡は、位置的に河道2に関わっており、これらの遺跡の立地は一連の起伏のなかで考察される必要がある。

嶋遺跡の微地形は、当初の国指定部分付近の古墳時代遺物包含層の確認面が相対的に高く、その南西側が低かった。南西側の低い部分は河川氾濫堆積層(砂層)におおわれていた(第5図)。この洪水堆積層は今回までの調査で江戸時代であることがわかった。

当初の国指定部分付近は、地山層が泥質細粒であり、低湿地であったところが古墳時代に相対的

微高地となって、泥炭層が乾いて土壌化が起きるような場所になり、打込柱建物群が作られた。今回発掘区は当初の国指定部分の北西側・西側であり、この低湿地では遺物が水中で堆積している。

嶋遺跡の南西方の梅野木前1遺跡では上下2層の遺物包含層があり、自然堤防と河道、自然堤防の外側の後背湿地にかけて古墳時代と奈良平安時代の2時期の遺跡が広がっていた。

下層の古墳時代生活面では、自然堤防に竪穴式住居・掘立柱建物と畑、後背湿地に水田が検出された。



第4図 自然堤防上の奈良平安時代の集落遺跡 (梅野木前1遺跡第1次発掘区)

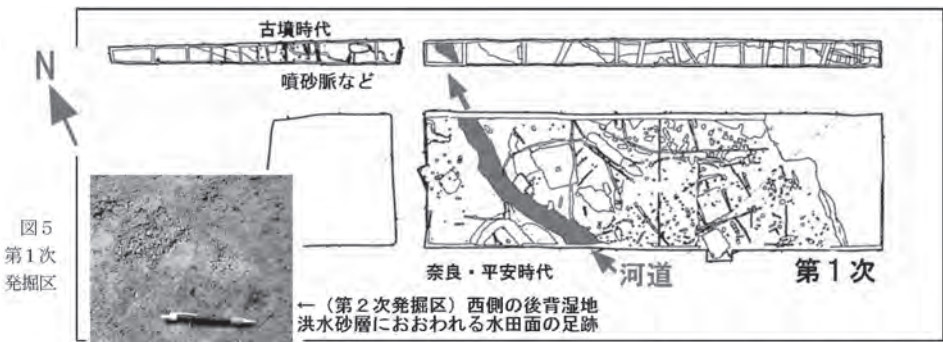


図5 第1次発掘区

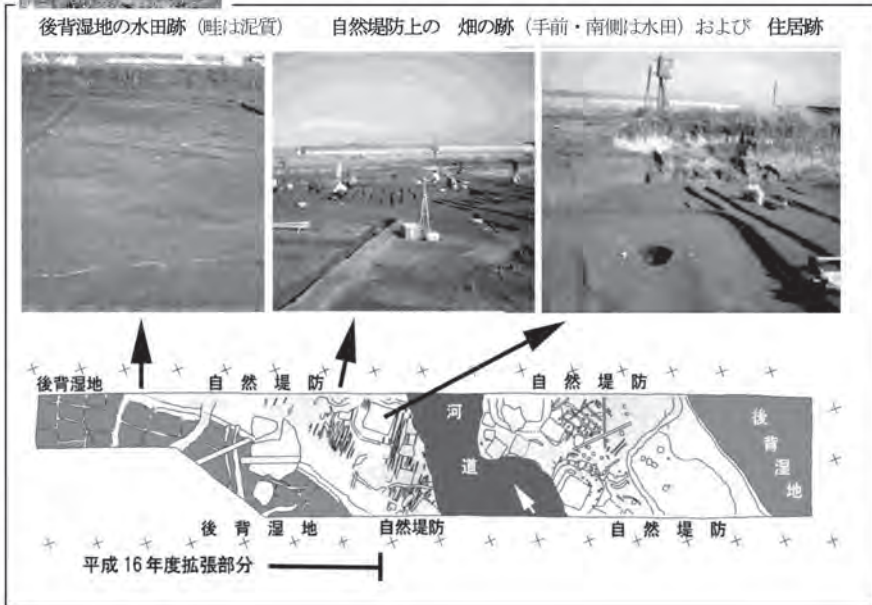


図6 第2次発掘区

第5図 自然堤防上の古墳時代の建物遺構・畑と後背湿地の水田遺構 (梅野木前1遺跡第2次発掘区) 上方が下流(北)である。

河道には砂礫層、自然堤防は砂・シルト層、後背湿地はシルト・粘土層が堆積している。古墳時代の河道は幅広く深く、本流河道と考えられるが、奈良平安時代の河道は埋没して狭く浅くなり、本流からの分流となっていたと考えられる。古墳時代の河道をあふれた粗砂層は後背湿地の水田面を覆ったことから、粗砂層を除くことで水路・水口・足跡のくぼみが検出できた。

河道帯1でも藤治屋敷遺跡・服部遺跡・今塚遺跡とも古墳時代の河道が平安時代までに洪水堆積層によって埋没している。

梅野木前1遺跡の自然堤防は第4・5図に示すように微地形、地山層の粒度の差が明確であったが、

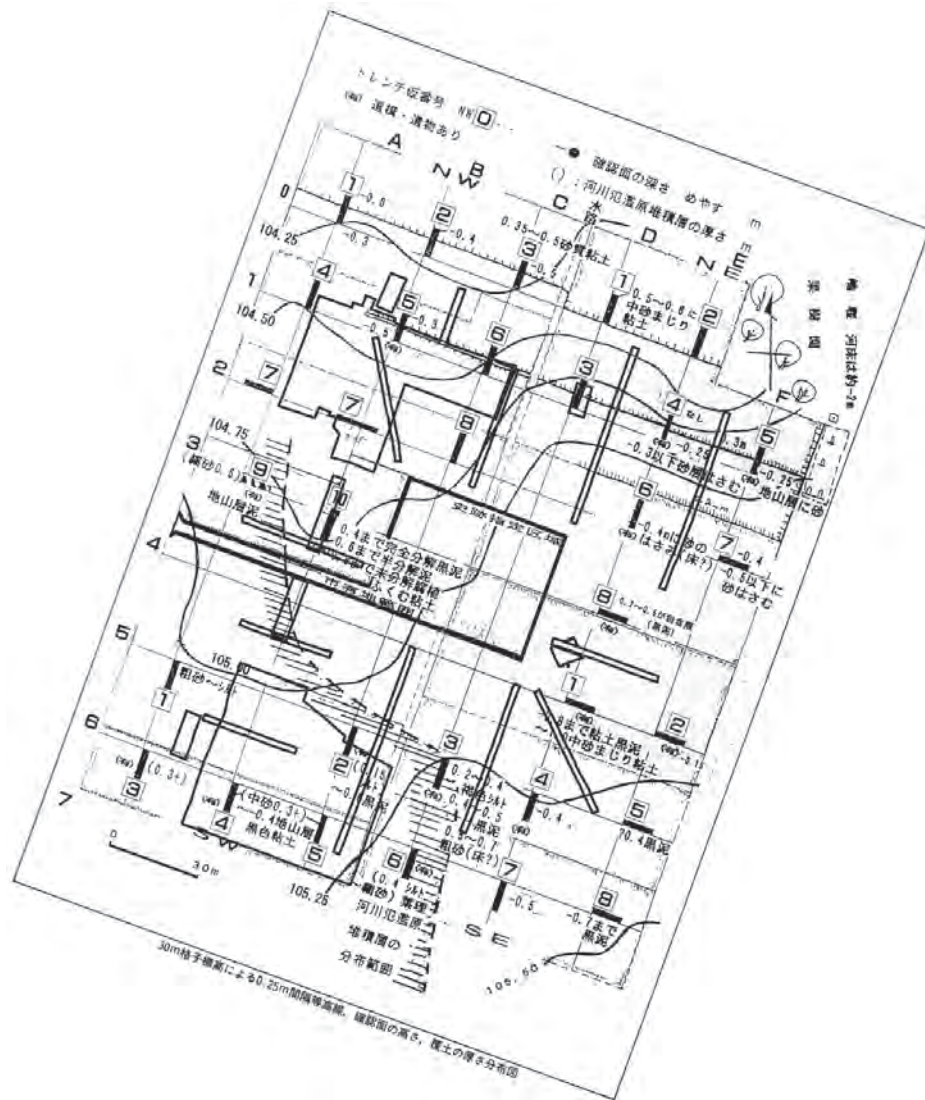
地表からでは不明瞭であった。

嶋遺跡の南方の梅野木前2遺跡では細粒砂・シルト層のなかに遺物包含層が検出された。古墳時代の打込柱建物、河・溝跡と遺物包含層、奈良平安時代の溝跡、浅い土坑、遺物包含層が検出されたが、遺跡範囲と微地形はさらに不明瞭であった。

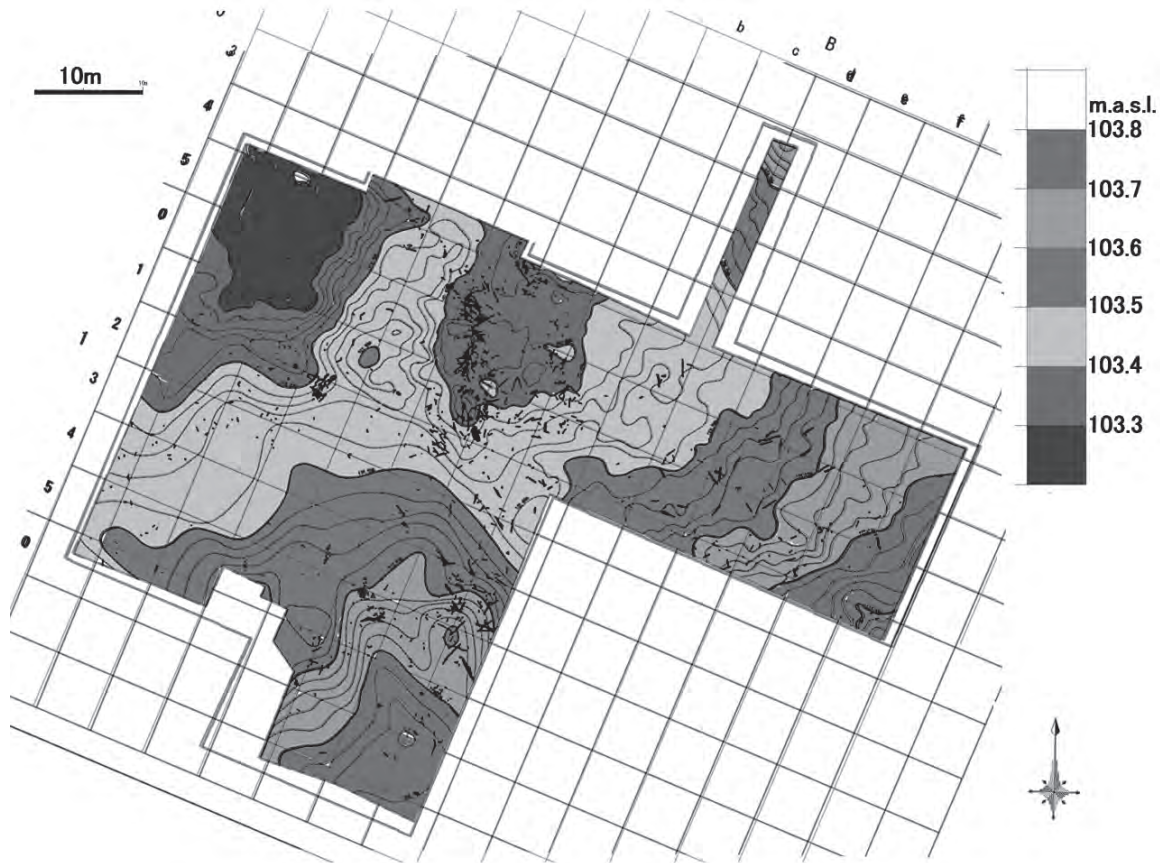
4. 嶋遺跡の微地形と遺構・遺物包含層の広がり

第6図は当初の国指定遺跡範囲とその周辺の遺跡確認調査（1994）の際に想定された古墳時代遺物包含層の確認面高度分布図・覆土厚さ分布図にその後・今回（2011）までのすべての発掘区を重ねて表したものである。古墳時代遺物包含層の確認面高度は当初の国指定遺跡範囲とその北東側が高く、南西側が低い。今回の発掘調査範囲はその西側と北側にあたる。

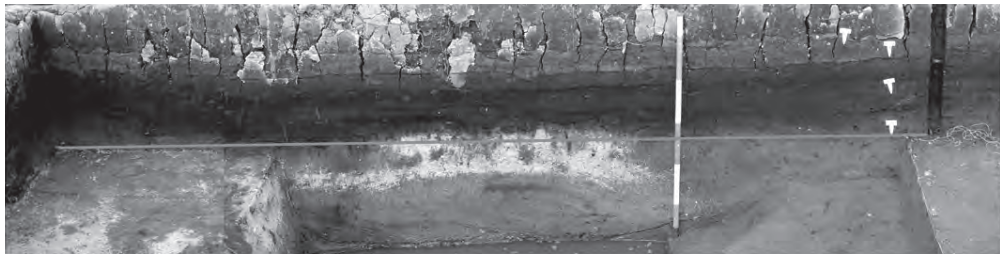
第7図は今回発掘区の北西隅の部分の古墳時代生活面の高度分布と遺物・遺構の分布を表している。古墳時代の生活面は北西側がとくに低く、波打っている。その部分の確認面下約1mの地層は深堀断面で泥質細粒であり、未分解の泥炭層を挟んでおり、かつ凹地で検出された木質遺物は分解腐朽していないことから、水中で堆積したのち乾くことがなかったことを示唆している。この部分において水田遺構の検出が試みられたが不検出であった。遺物・遺構の分布は、くぼ地の縁に密であり、岸近くに流れ込んで堆積したものや岸近くで打ち込まれたものであることが予想される。遺物・遺構の性格と水域との関係、相対的に高い部分の腐植泥炭層の分解された範囲（水域より高かった部分）の認定が課題である。



第6図 古墳時代遺物包含層の確認面高度分布図・覆土厚さ分布図（1994調査）。
今回2011年までの発掘区を重ねて表している。



第7図 IVb層上面（古墳時代生活面）の起伏と遺物分布 上方が下流（北）である。



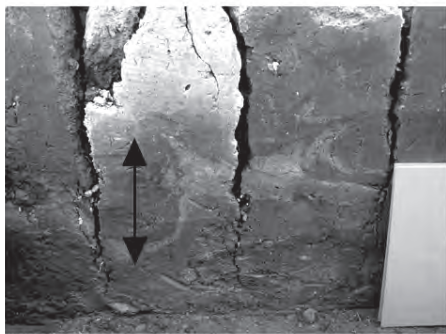
砂層直上の
腐棺の
14C年代
599-638AD
(YU-259)

東側トレンチ5 東壁

← 確認面で砂の脈が現われていた範囲

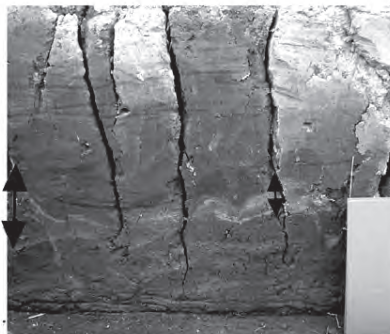
物差しの刻みは0.2m

サブトレンチによって 河道を埋める砂であることがわかった。
砂が吹き上げたところはなかった。



東側トレンチ5 西壁

縦両矢印は、地盤が液状化して流動した範囲を示す。



III層

IVb層

確認面

第8図 トレンチ5でみられた地盤液状化痕跡

5. 地盤液状化現象について

先に梅野木前1遺跡では噴砂現象の痕跡が検出されているが、今回発掘区北部のトレンチ5において地盤液状化の痕跡が観察された。梅野木前1遺跡では第5図発掘区北西部分である自然堤防で、細砂の脈が古墳時代確認面のシルト質砂を貫いており、部分的には古墳時代生活面にひろがっているように見えるところもあった(阿子島, 2008)。また、第2次発掘区南中央の河道東岸の自然堤防上の古墳時代前期の竪穴住居跡ST250に伴う外周溝SD251の覆土を噴砂痕が切っていることも確認された(山形県埋文センター, 2004)。

今回発掘区のトレンチ5の西壁断面では確認面上方5~20cmの間の黒色泥質層と明色の砂質層の間に液状化した地層の流動の痕跡が観察された(第8図)。層準としてはⅢ層(近世以降の水田土)とIVb層の間にあたる。トレンチ5の東壁の砂層直上の層準の腐植の¹⁴C年代は599-638AD(YU-259)であり、全面発掘区の遺物包含層下層(Ⅲb層)の¹⁴C年代は、AD778-888年(YU-258)である。

嶋遺跡の地盤液状化の時期はⅢ層堆積後・すなわち近世以降の可能性もある。梅野木前1遺跡の噴砂痕は古墳時代またはそれ以降と想定されるため、この地区の地盤流動化は異なるいくつかの時期があったのかが今後の検討課題である。

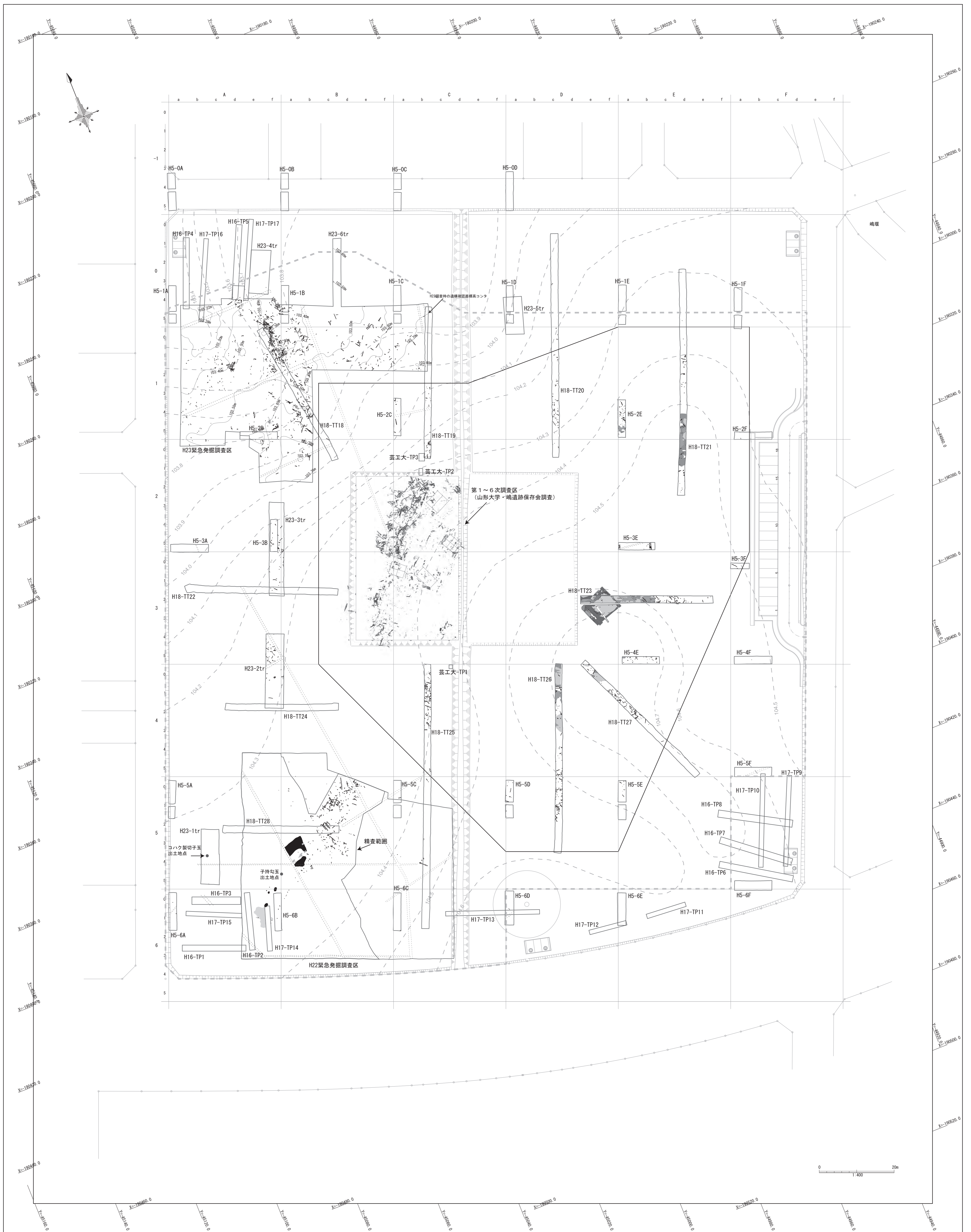
文 献 (一部)

- 阿子島 功(1989) 低地の埋没微地形面の同時期面の起伏(演旨) 東北地理, 41-3, p.188
- 阿子島 功(2001) 自然堤防の発達程度と形成時間観 日本地理学会予稿集59, p.204
- 阿子島 功(2002) 自然堤防の発達程度と形成時間観(2)(演旨) 季刊地理学, 54-1, pp.60-61
- 阿子島 功(2004) 服部遺跡・藤治屋敷遺跡第2次調査報告書 附篇 pp.1-6
- 阿子島 功(2008) 山形市馬見ヶ崎川扇状地の梅ノ木1遺跡でみられた噴砂現象 山形応用地質, 23, pp.65-68
- 山形市教育委員会(1994) 嶋遺跡発掘調査概報 22頁, 図版20
- 山形市教育委員会(2004) 河原田遺跡・梅野木前2遺跡発掘調査報告書 山形市嶋土地区画整理組合・山形市教委, 山形市埋文調報, 22, pp.80-101
- 山形県埋蔵文化財センター(1994) 今塚遺跡発掘調査報告書 同調査報告書第7集 82頁, 図版51頁
- 山形県埋蔵文化財センター(1999) 服部遺跡・藤治屋敷遺跡第2次調査説明資料 11頁
- 山形県埋蔵文化財センター(1999a, b) 馬洗場B遺跡調査説明資料・同2 各8頁
- 山形県埋蔵文化財センター(2000) 長表遺跡発掘調査説明資料 8頁
- 山形県埋蔵文化財センター(2007) 梅野木前1遺跡発掘調査報告書 同調査報告書第160集 136頁, 図版5頁

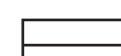





山形県山形市埋蔵文化財調査報告書第34集

嶋 遺 跡
範囲確認調査報告書
〈総 括 編〉

付図 嶋遺跡遺構平面図



付図 鳴遺跡遺構平面図

- | | | | |
|---|-------|---|-------------------|
|  | 国指定範囲 |  | 炭化物の広がり |
|  | 遺跡範囲 |  | 貼床 (粘土・炭化物・樹皮・焼土) |
|  | | | |
|  | | 暗渠 | |

山形県山形市埋蔵文化財調査報告書第34集

嶋 遺 跡

範囲確認調査報告書

〈総括編〉

2012年3月31日 発行

発行 山形市・山形市教育委員会

〒990-8540

山形県山形市旅籠町二丁目3番25号

電話 023-641-1212

印刷 藤庄印刷株式会社
